

ンドセール」(平成20年7月～8月)の開催など34件、中小企業者等に対しての、純米能登産梅酒づくり事業など25件であった。

<数馬酒造が開発した「特選 能登の梅酒」>



能登産の素材(梅酒・梅・水蜜)を活用し、器デザイン・ラベルデザインにもこだわったもの

② 復興1周年事業

商工会議所・商工会・商店街・組合・企業グループに対し、復興1周年を節目に、復興をアピールするイベントなど34件へ助成した。

商工会議所に対しては、見附海岸での夜桜祭りの開催(平成20年4月)など3件、商店街に対しては、富米ふるさとフェアの開催(平成20年4月)など5件、組合に対しては、能登の特産品販売促進イベントの開催(平成20年5月)など10件、企業グループに対しては、輪島地物市の開催(平成20年4月)など2件について助成し、県内外へ元気を能登をアピールした。

③ 能登ふるさと博関連事業

商工会議所・商工会・組合・商店街・企業グループに対し、能登半島地震からの復興を広くPRするため、能登ふるさと博と連携した復興イベント等へ助成した。

商工会議所に対しては、能登ふるさと博のジャズフェスティバルと連携した七尾ジャズストリートで開催など3件、商工会に対しては、能登ふるさと博の七尾港まつりと連携した浴衣のファッションショー開催など5件、組合に対しては、郷土芸能の夕べの開催など19件、商店街に対しては、楽しみながら食談義をする一本杉通り街あるきツアーの開催など19件、企業グループに対しては、郷土料理の実演販売など4件に対し助成を実施し、県内外へ元気を能登をアピールした。

④ 能登半島☆全国発信プロジェクト

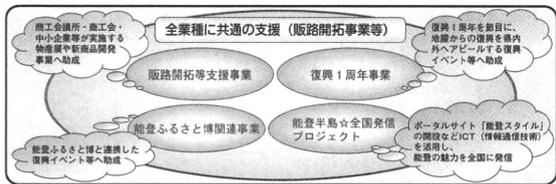
能登半島地震からの本格的な復興・活性化のため、地元の企業や団体が、能登の強みである特産品や観光資源など幅広い情報を全国に向けて発信するとともに、商品・サービスの販売促進や観光誘客に活用できるビジネス支援の基盤構築を目指すものである。

これまでの取り組みとしては、平成20年6月に、インターネット上に専用サイト「能登スタイル」を開発し、地域住民や学生ら「市民記者」も活用して、能登の特産品や観光などの魅力を発信し、平成21年1月末時点で、8万6000件のアクセスがあった。

また、11月に、能登の事業者の新たな販路開拓を支援するために、初期出店費用を無料にした能登の地場産品のネットショップを開発したほか、平成21年1月に個人旅行者をターゲットに、インターネットで自ら最適な旅行プランを作成するシステムを提供し、その後も、携帯電話から最先(着地)でのルート案内や最新の観光情報の入手などができるシステムを構築した。

さらに、英語、中国語、韓国語のホームページを作成し、海外に向けた情報発信にも取り組んでおり、能登の魅力の発信と能登の事業者による新たなビジネス展開につなげた。

支援策のイメージ



(2) 各事業の概要

① 大町川島地区土地区画整理事業(町施行)

家屋の倒壊が多く見られた区域(約0.7ha)においては、良好な住環境の創出を図り、被災住宅再建の受け皿とすることとした。区域内では、区画道路や都市計画道路の整備とともに、既に被災者の住宅再建工事が始まっており、平成21年3月末に基礎整備工事を完了させ、仮設住宅からの入居開始を目指している。

② 能登ふるさとモデル住宅(県施行)

被災者の住宅再建の参考とするため、穴水町の風土にあった快適で味わいのある店舗併用住宅のモデル住宅を建設し、平成20年10月4日から被災者への展示を開始した。

店舗部分では町と地元商店街による特産品の展示を行うとともに、住宅内では被災者への住宅相談も行っている。



能登ふるさとモデル住宅



地元特産品等の展示

③ (都)大町通り線[復興シンボルロード](県施行)

穴水駅と商店街のアクセスの向上を図るため、土地区画整理事業に合わせて穴水線地線から七尾輪島線までの160m区間を復興のシンボルロードとして、幅員8mの新設道路を整備することとし、現在、道路築造や橋梁整備を進めている。



復興シンボルロード(イメージパース)



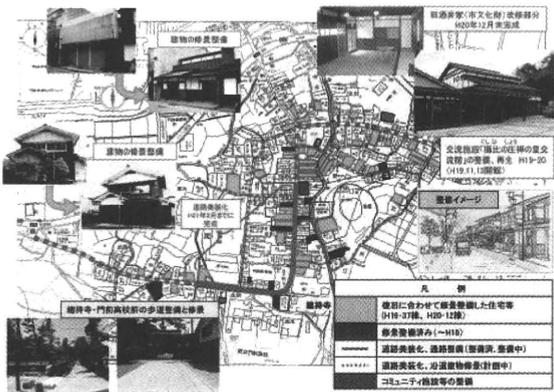
穴水町中心市街地の復興概観

3. 持続可能な地域づくり

■ 輪島市門前町総持寺周辺の復興のまちづくり

総持寺周辺地区は、曹洞宗大本山総持寺の門前町として栄えた歴史のある地区で、伝統的な祭りやイベントも数多く行われており、地区の中心を通る路線沿いには商店街が形成されている。

能登半島地震の震源地に近かったことから、同地区でも地震により多くの建物が被害を受け、建物や公共施設の復旧に合わせた街並みの復興が求められた。



輪島市門前町総持寺周辺の復興概観

■ 穴水町中心市街地の復興

(1) 事業の趣旨など

穴水町では、穴水駅前の中心市街地を形成している商店街に被害が集中した。

復興にあたっては、被災住宅の早期の再建はもとより、穴水駅から商店街へのアクセスの向上や中心市街地の街なかに再生を進めることにより、回遊性を高め、賑わいを取り戻すことが重要な課題であった。

そのため、地震からの現状復旧にとどまらず、創造的な復興によるまちづくりに取り組むこと

このため、平成15年から門前町及び輪島市が実施していた「街なみ環境整備事業」や能登ふるさと住まい・まちづくり支援事業などの基金事業を活用し、公共施設整備や建物の復旧にあ

わせた修繕整備を進めることとした。地震発生後の2カ年で、修繕整備を行った建物は50棟を数え、復旧に合わせた建物の修繕整備は概ね完了した。

また、地区の中心に位置する地区交流施設「鶴比の庄神の里交流館」も平成19年11月に開館し、平成20年末には修復・整備が完了しており、地区住民に広く活用されている。

となつた。

具体的には、県・町・地元が連携し、被災住宅の再建の受け皿となる土地区画整理事業や、復興のシンボルロードとなる都市計画道路大町通り線などの街路・道路事業、さらには、被災者の住宅再建のモデルとなる「能登ふるさとモデル住宅」などの事業を一体的に進めることとした。

平成20年6月8日には土地区画整理事業、街路・道路事業及びモデル住宅建設工事の起工式が行われ、復興に向けたまちづくりが本格的に始動した。

④ (都)本町線(県施行)

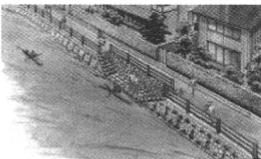
商店街の中心部220m区間を沿道まちなみの景観を整備に合わせて8mに拡幅するとともに、電線類の地中化も行う計画である。

⑤ (主)穴水線地線(県施行)

路切から商店街へ向けての160m区間を8mに拡幅整備することとしている。

⑥ 真名井川河川整備(県施行)

川辺景観の保全再生として、悪劣な石積護岸の修繕整備を進めるとともに、区画整理区域内では災害復旧工事と合わせて船着き場の整備を行っている。



船着き場(イメージパース)

⑦ 防災拠点整備(町施行)

災害に強いまちづくりを推進するため、平成20年度の新規築である「被災地における復興まちづくり総合支援事業」により、JR踏地を活用した防災拠点の整備などを進めている。

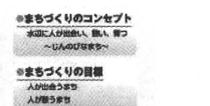
(3) まちなか再生へ向けた地元の取り組み

地元では、平成20年3月19日に商店街や地域住民が主体となって「穴水町まちなか再生協議会」が設立され、復興基金支援事業の受け皿の母体となつるとともに、復興プロジェクトの推進及び住宅再建や商店街の活性化、賑わい創出を目指し、行政と連携を図りながら、総力を挙げて復興に取り組んでいる。

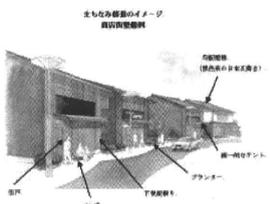
協議会では、「水辺に人が出会い、憩い、育つ～じんのびなまち～」を基本コンセプトとして、住む人、訪れる人が心地よいと感じ、回遊性や賑わいのあるまちづくりを住民主体で進めることとしている。



穴水町まちなか再生協議会総会(平成20年3月19日)



平成20年9月16日には、駅前中心市街地内の建物の建築ルールとなる「穴水町まちづくり協定」が定められるなど、道路の沿道やその周辺区域が一体となった良好な街並み景観形成に向けた取り組みが進められている。



まちなか再生のイメージ(駅前西側エリア)

(4) 今後のまちづくりの促進に向けて

現在、協議会では、公共施設のデザインや街並み修景の検討とともに、中心市街地の活性化方策やソフト施策の検討などを精力的に進めており、地域住民のまちづくりに対する熱意が徐々に高まっている。

今後とも、県・町が主体となって行うハード事業と地元が進めるソフト施策が一体となつて、事業の推進に努める。

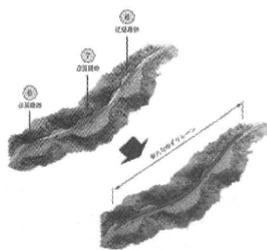
3 能登有料道路ゆずりレーン整備と別所岳サービスエリアの拡張整備

(1) 概要

能登有料道路では11カ所の大規模崩落を含む51カ所の災害が生じた。平成19年11月末までには復旧工事が完了したが、地震からの「創造的な復興」を図るため、ゆずりレーンの整備及び別所岳サービスエリアの拡張整備を引き続き行うこととした。

(2) ゆずりレーン整備

地震直後の応急工事では、本線復旧が困難な8カ所で迂回路を設置し、交通を確保した。



迂回路活用イメージ図(越の原IC付近のゆずりレーン)

(3) 別所岳サービスエリアの拡張整備

① 概要

能登有料道路の復旧工事に際しては、大量の土砂が必要となり、別所岳サービスエリア周辺から土砂を採取したため、約1.3haの平坦な土地が発生した。

そこで、能登半島地震を永く後世に伝えるとともに、能登有料道路の新たな魅力の創造を図るため、平坦な土砂採取跡地を活用して別所岳サービスエリアを拡張し、メモリアル的な広場の整備を行うこととした。平成22年春頃の完成を目指し、現在、整備を進めている。



別所岳サービスエリア観望

② デザインコンペの開催

拡張整備計画の策定にあたっては、「メモリアル」「眺望」「環境」をコンセプトにデザインコンペを開催し、審査の結果、採用された整備コンセプトの具体的な内容は次のとおりである。



その後の復旧工事の完了により迂回路は役目を終えたが、能登有料道路の走行性を地震以前にも増して高めるため、迂回路を活用してゆずりレーンを整備することとし、「別所岳サービスエリア付近のゆずりレーン」は平成22年春に、「越の原IC付近のゆずりレーン」は平成24年春の完成を目指している。

① 別所岳サービスエリア付近のゆずりレーン

中島町田岸地内の迂回路については、既設ゆずりレーン2,600mと近接していることから、これらと連結することにより3,300mに延伸することとする。

② 越の原IC付近のゆずりレーン

越の原ICに近接する3カ所の迂回路は、それぞれの間隔が狭いことから、3カ所の迂回路をつなぎ、1,700mの新たなゆずりレーンを新設することとする。

新トンネルの整備では、これら地域を代表する観光資源へのアクセスポイントとして、また「曾々木海岸」の景観を築くための眺望スポットとして、輪島側、珠洲側の両坑口に「ポケットパーク」を併せて整備することとした。

輪島側「ポケットパーク」の整備では、周辺自然環境との調和に考慮するほか、「震災復興状況説明板」の設置や、地震により斜面から崩落した岩を「景石」として配置するなど、復興記念としてのメモリアル的な広場としての機能を持ったポケットパークとする。

この両坑口ポケットパークは、新トンネルの完成後に整備を進め、平成22年春の完成を予定している。



珠洲側「ポケットパーク」完成予想図



輪島側「ポケットパーク」完成予想図



新トンネル平面図

5 震災復興地域づくりに対する総合支援事業

(1) 支援事業の概要

能登半島地震からの本格的な復興を図るため、地域住民の主体性と創意工夫による地域づくりとして、地域資源を積極的に活用した個性豊かで持続的効果の認められる事業に対して、能登半島地震復興基金を利用し、支援を行うこととした。



別所岳サービスエリア整備イメージ

アモリアル

メモリアル的な広場において、地震と復興を後世に伝える柱群を設置し、能登半島地震の震源方向を表現するほか、広場には幼木を植栽し、幼木の成長で復興の時間経過を表現する。

イ 眺望

視点場については、七尾湾からの風を取り込み吹き流す筒状の展望台とし、異なる高さから周辺樹林の様々な表情を観察できるスカイウォークを展望台へのアプローチとして設置する。

ウ 環境

幼木は、周辺樹林から採取したものを用いるとともに、周辺環境に配慮するほか、植栽は、地域と一体となって行うなど住民参加型とする。



別所岳サービスエリアから望む七尾湾

通行を再開した。

本格復旧は、周辺斜面上に不安定な岩塊が分布していることから、恒久的な安全を確保するため、被災した「八世乃洞門」と隣接する「曾々木隧道」を合わせて山側に迂回する新たなトンネルを建設することとし、平成19年12月から工事を進めている。

平成20年6月にトンネル本体の掘削を開始し、トンネル延長722mのうち、平成21年1月末で600mの掘削が完了しており、平成21年12月に供用開始を予定している。



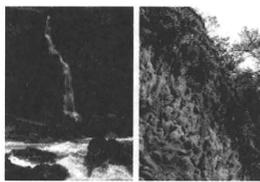
新トンネル完成予想図

(2) ポケットパークの整備

新トンネルは、能登半島国定公園内に位置するとともに、国指定名勝及び天然記念物「曾々木海岸」に指定されている風光明媚な地域に隣接している。

珠洲側坑口周辺には、山から直接海に流れ込む「垂水の滝」があり、冬場は強風により水が舞い上がることから、別名「吹き上げ滝」「逆さ滝」とも呼ばれており、全国でも有数の珍しい滝として、波の花とあわせて奥能登を代表する冬の風物詩となっている。

また、輪島側坑口周辺には、長年の風化浸食により出来た自然造形形の「千体地蔵」があり、自然の偉大な力と年月を感じさせてくれる。



垂水の滝

千体地蔵

4 八世乃洞門周辺の復興状況

(1) 八世乃洞門の本格復旧

大規模な岩壁崩落により、ロックシェッドに甚大な被害を受けて通行止めとなった国道249号「八世乃洞門」は、応急復旧として、ロックシェッド内にコンクリートボックスを設置し、平成19年7月7日から日中のみの片側交互で

事業区分	内容
大都市圏等との交流の創出・拡大事業への支援	① 移住・交流居住を担う受入組織の創設・育成支援 移住・交流居住に関する情報発信と移住等の希望者の受け入れに取り組み民間主導の組織づくりや活動に支援する。 ② 交流創出支援 民間団体が市町等と連携して、大都市圏等との間新たな交流を創出する取り組みで、継続的な効果が見込まれる事業に支援する。
地域づくり活動事業への支援	③ 地域ブランド・チャレンジ支援 住民が主体となり、地域の特産物や観光資源等の価値を増加させ、他に誇れる地域ブランドに育成する取り組みに支援する。 ④ コミュニティビジネス・チャレンジ支援 住民が主体となり、地域の活性化又は課題解決に資するコミュニティビジネスを新たに創出する事業に支援する。

(2) 支援事業の一覧

区分	事業名	実施団体	実施場所
① 移住・交流居住を担う受入組織の創設・育成支援	奥能登珠洲の「田舎暮らし」サポートセンター創設事業	特定非営利活動法人 能登ずんわり	珠洲市
	輪島・雪割車と外浦ウォーク	輪島・雪割車と外浦ウォーク実行委員会	輪島市
② 交流創出支援	能登人と交流会～能登地酒列車～	特定非営利活動法人 能登ネットワーク	能登6市町
	和倉温泉短歌・俳句大会	和倉温泉短歌・俳句大会実行委員会	七尾市
	輝の里ロードレースin輪島	輝の里ロードレース実行委員会	輪島市
	奥能登珠洲のデカ力山(やま)祭(デカ力山復興プロジェクト)	輪島区長会	珠洲市
③ 地域ブランド・チャレンジ支援	能登和倉万葉の里マラソン2009	能登和倉万葉の里マラソン大会組織委員会	七尾市
	「のどけりしまつツジ」ブランド化事業	のどけりしまつツジ連絡協議会	能登町
④ コミュニティビジネス・チャレンジ支援	定食屋ホットちゃん	定食屋ホットちゃん	穴水町
	笑楽路屋(わらじや)	笑楽路屋	輪島市
	いっつく地だんだん(暖々)設置事業	よつ葉	珠洲市
	農山林業女性チャレンジ活動事業	森の幸	穴水町
	能登ふれあいガーデン整備事業	能登ふれあいガーデン委員会	能登町

(3) 主な支援事業の概要

① 移住・交流居住を担う受入組織の創設・育成支援

奥能登珠洲の「田舎暮らし」サポートセンター創設事業
能登半島地震からの復興とともに、大都市圏との交流促進・拡大を目指す珠洲市における、空き家をはじめとする地域資源を活かした企画に取り組みサポートセンターの創設に支援した。

② 交流創出支援

能登人と交流会～能登地酒列車～
復興に取り組む能登の魅力を発信するため、全国からの参加者に能登の食と能登に住む人々のおもてなしを堪能してもらう「能登地酒列車」の運行事業に支援した。
(ア)開催日:平成20年3月20日～23日
(イ)場所:上野駅～和倉温泉
(能登地酒列車運行)
七尾市、輪島市、珠洲市、志賀町、穴水町、能登町(交流会)
(ウ)主催:特定非営利活動法人 能登ネットワーク
(エ)参加者:約550人



体験観光の様子(里山を活かしたシタケ観光)＝珠洲市



上野駅での出発式＝平成20年3月20日、地酒列車内

イ 和倉温泉短歌・俳句大会

短歌・俳句の盛んな七尾市において、愛好家間の交流や心を育む地域づくり、能登半島地震からの復興を全国へ広く発信するため開催した「和倉温泉短歌・俳句大会」に支援した。

- (ア) 開催日：平成20年4月23日、24日
(イ) 場所：和倉温泉観光会館
(ウ) 主催：和倉温泉短歌・俳句大会実行委員会
(エ) 参加者：約350人



短歌大会会場＝平成20年4月22日、七尾市和倉温泉観光会館

ウ 柳の里ロードレースin輪島

全国各地から参加者を集め、地域住民や関係者などとの交流を図るとともに、元氣な輪島市を発信することにより、能登半島地震により落ち込んだ交流人口の回復・拡大を図るため、輪島市門前町において開催された「柳の里ロードレースin輪島」に支援した。

- (ア) 開催日：平成20年10月18日、19日
(イ) 場所：輪島市門前町特設コース
(ウ) 主催：柳の里ロードレース実行委員会
(エ) 参加者：約4,500人



一糸にスタートをきる選手達＝平成20年10月19日、輪島市門前町

③ 地域ブランド・チャレンジ支援

「のとキリシマツツジ」ブランド化事業
能登半島地震からの復興を目指す能登町において、町花である「のとときりしま」による地域活性化策の一環として行われた「のとキリシマツツジ」ブランド化事業」に支援した。



「のとキリシマツツジ」フェスティバルの様子＝能登空港待合室内

④ コミュニティビジネス・チャレンジ支援

ア 定食屋ホットちゃん
仮設住宅生活で出会った穴水町の女性3人が、地域住民の憩いの場としての役割を果たすとともに、地域資源の活用やコミュニティ形成に寄与するため、平成20年3月4日に開店した「定食屋ホットちゃん」の取り組みに支援した。



コミュニティレストラン定食屋ホットちゃん＝穴水町

イ 笑楽路屋(わらじや)

輪島市門前町において、地震で被害を受けた地域の生産者と地元高齢者などが協力し、商店街の賑わい創出や地域住民の活力再生、総持寺への観光客と地域住民の交流の場の提供を目指して、平成20年5月14日に開店した「笑楽路屋」の取り組みに支援した。



観光客でにぎわう「笑楽路屋」＝輪島市門前町の市営駐車場

ウ いっぶく処 だんだん(暖々)設置事業

風評被害の払拭と商店街・朝市の賑わい創出を目指す珠洲市飯田町商店街において、新たなコミュニティの創造と商店街・朝市の魅力向上を図るため、平成20年8月2日に営業を開始した「いっぶく処 だんだん(暖々)」の取り組みに支援した。



新たな憩いの場となった「いっぶく処 だんだん(暖々)」＝珠洲市

エ 農山林業女性チャレンジ活動事業

地震で被害を受けた穴水町において、地域に自生する「ササ」、「アテ」などを温泉旅館や料亭に卸し販売をすることで、地元女性の生き甲斐をつくとともに、地域活性化や豊かな能登の発信に寄与することを目的とした「農山林業女性チャレンジ活動事業」に支援した。



⑥ 能登半島地震復興シンポジウムの開催など

(1) 能登半島地震復興シンポジウムの開催
地震から1年を迎えた平成20年3月25日に能登半島地震への対応を検証・総括し、多くの方々と復興に向けた思いを共有し、その道筋を確認するため、「能登半島地震復興シンポジウム」を開催した。

被災地の子供たちによる復興作文の発表、女優の田中美里さんの応援メッセージ、1年を振り返るパネルディスカッションなどが、最後に、地元中学生が「復興の誓い」を述べ、能登各地から集まった約1,200人が本格的な復興への思いをさらに強くした。

- ・日時：平成20年3月25日
・場所：輪島市文化会館大ホール
・主催：能登半島地震復興シンポジウム実行委員会

<復興シンポジウム次第>

- 1 開会宣言(石川県知事)
2 来賓挨拶
3 ビデオ上映「震災から復興へのあゆみ」
4 地元町長からの報告(輪島市長、穴水町長)
5 作文発表～震災体験、ふるさとへの思い～
6 応援メッセージ(女優 田中美里さん)
7 パネルディスカッション

(1) テーマ
「防災と能登半島地震への対応の総括及びその教訓の未来への継承」

(2) コーディネーター
室崎 益輝
(総務省消防庁消防研究センター所長)

- (3) パネリスト
谷本 正憲(石川県知事)
泉 靖郎(輪島市門前町下区区長)
北村 祐一(赤井防災ボランティアリーダー)
里谷 光弘(輪島商工会議所会頭)
大井マ璃幸
(和倉温泉旅館協同組合女将の会長)

会直前まで、温泉女将などによる波動的なPRキャンペーンを行った。
このほか、JR西日本とのタイアップによる関西・北陸主要駅でのポスター掲出や、テレビ局とのタイアップによる旅番組の制作、情報番組中のPRを実施した。



能登ふるさと博ポスター

また、4月15日から、博覧会の開催を広く全国に向けてアピールするとともに、多くの方の参加によって博覧会を盛り上げていくため、シンボルとなる「マスコットキャラクター」のデザインと愛称の募集を開始し、全国から寄せられた186点の応募作品の中から、「のとドン」が選定された。



マスコットキャラクターに選定された「のとドン」

(2) オープニング・イベント

博覧会のスタートとなった7月19日には、能登空港に隣接する輪島市空港交流センター(日本航空学園)内で、「オープニング・イベント」を開催した。

まず、谷本知事や関係市町、商工・観光関係者によるオープニング・セレモニーを、地元国會議員、県議会議長らに來賓として迎え実施した。これを皮切りに、「輪島朝市」をリソースした歌手の

<「加賀四湯博」開催概要>

- ・基本コンセプト
① 加賀温泉郷が丸一となった宿泊者の呼び戻し
② 新幹線開業を見据えた加賀温泉郷振興策の試み
・会場 加賀市・小松市の4温泉地(粟津温泉、片山津温泉、山代温泉、山中温泉)及び周辺地域
・期間 平成20年7月1日(火)～10月5日(日)
・実施主体 「ほっと石川」観光キャンペーン実行委員会加賀温泉郷部会(商工会議所、観光団体、県市などで構成、平成20年4月18日設置)
・事業費 約3,000万円(うち能登半島地震被災中小企業復興支援基金分2,000万円)
・事業内容 「加賀さんいらっしゃい」キャンペーン、まちめぐりポイントラリー、加賀四湯お祭りバスツアー、加賀四湯博おたからまつり、加賀四湯博の発行、白山スーパー林道半額キャンペーン助成など

② 「能登ふるさと博」の開催

(1) PRキャンペーン
博覧会の開催に先立ち、平成20年5月19日から、三大都市圏、近隣県を中心に、計7回にわたる、集中的なマスコム等への訪問など、博覧

8 復興の誓い

復興の誓い

私たちが住む能登は、外洋と内洋などの美しい自然があり、全国的にも有名な温泉地があるほか、新雪が美しい山並の香も豊盛です。

また、能登の各地では、古くから伝わるお祭りや、能登らしい風景である秋田、輪島など伝統的産業があります。
ちょうど1年前、この地で、私たちの誰もが経験したことのない大災害が発生しました。てこなつた方々や多くの犠牲者を出した方々や、被災地の思いのこもった、積み重ねた努力が、道路がひび割れました。大切な「ふるさと」がどうなってしまうのか大変心配でした。

しかし、地盤を揺動して初めて気づいたこともありました。日頃あまりお話ししたことのない方との間で会話が生まれました。そして、この地域に住む方々の優しさを感じました。不安な時には、お互い励まし合い、助け合いながら、今日まで頑張ってきました。

また、ボランティアの方々を通して、人の心の温かさを知りました。誰かの手を借りることも、感謝しなければいけません。お礼を言いたいです。お礼を言いたいです。お礼を言いたいです。

このような貴重な経験を判断して、私たちが、大切な人が住むふるさとのために、頑張らなければいけません。
私たち一人一人の力は小さいのですが、いろいろな人の力を借りながら、復興に向けて、みんなを力合わせて、自分の生きた経験をもっとよく知り、その素晴らしいさを守り、誇りを持って未来へ伝えていきたいと思っております。

平成20年3月25日

門前中学校3年 長徳 谷 真介
穴水中学校2年 藤野 真哉



約1,200人が復興を誓ったシンポジウム＝輪島市文化会館

(2) 能登半島地震復興絵画・作文コンクールの実施
能登半島地震復興シンポジウム関連事業として能登半島地震復興絵画・作文コンクールを実施した。

絵画コンクールの作品については、シンポジウムの会場において全作品を展示した。また、作文コンクールの入賞作品のうち最優秀賞の作品については、シンポジウムの会場にて発表してもらい、入賞作品については、「能登半島地震復興作文コンクール入賞作品集」に掲載し、シンポジウム会場にて配布した。

なお、絵画・作文コンクールの入賞者については、平成20年4月25日に県庁19階展望ロビーにて表彰した。

① 絵画コンクール入賞者

最優秀賞：定見 謙吾(輪島市立門前西小学校4年)
ほか優秀賞6人、入選8人
(応募総数490点)

② 作文コンクール入賞者

小学校の部
最優秀賞：南 優花(七尾市立小丸山小学校4年)
ほか優秀賞6人、入選4人
(応募総数1,381人)

中学校の部

最優秀賞：松原 萌(輪島市立門前南中学校2年)
ほか優秀賞5人、入選5人
(応募総数1,044点)



能登半島地震復興絵画コンクール 最優秀作品

4. 風評被害の払拭

① 概要

風評被害対策として、平成19年に「ようこそ能登」観光キャンペーンや「ほっと石川」観光キャンペーンを実施した。

平成20年は、能登半島地震の風評被害により落ち込んだ観光入り込み客数を、平成18年並に戻すため、広域的な取り組みとして、能登地域では「能登ふるさと博」を、加賀温泉郷では「加賀四湯博」を開催し、引き続き能登半島地震被災中小企業復興支援基金を活用しながら、風評被害払拭観光キャンペーンに取り組んだ。

<「能登ふるさと博」開催概要>

- ・基本コンセプト
① 能登の魅力再発見による「賑わい創出」
② 元氣な能登の全国発信
・会場 能登4市5町

水森かおりさんによるスペシャルステージや、4市5町の物産市、11店舗による能登半夏メニューのPR販売などのイベントを行い、会場には約6000人が来場した。

(3) 能登元氣市

七尾市、輪島市、珠洲市をメイン会場に開催した「能登元氣市」では、旬の地元の特産品の販売や、伝統芸能のステージ等を行うとともに、例年の内容に新たな魅力を付加したイベントを実施した。

このうち、七尾会場では、港まつりにあわせ、誘致した「全国ドラゴンボート七尾大会」を実施し、全国から集結した精鋭21チームが七尾港を舞台に熱戦を繰り広げた。

珠洲会場では、「全国チョンガレまつり」と称して、珠洲市の伝統芸能「ちよんがり踊り」とルーツを同じくすると言われる「河内音頭(大阪府)」、「江州音頭(滋賀県)」の関係団体を招き、シンボジウムやワークショップなどを開催した。会場では、高さ16mの燈籠山を中心に、夜遅くまで踊りの輪が広がった。

輪島会場では、農林漁業まつりにあわせ、「輪島塗大漆器まつり」を開催した。輪島塗の巨匠による作品の展示や、沈金体験などの催しに朝早くから多くの人が訪れた。

また、これら「能登元氣市」にあわせ、JR金沢駅から各イベント会場に向けて「能登ふるさと博」号を運行した。往年の国鉄色を施した車体(キハ28・58)が人気を集めた。



全国ドラゴンボート七尾大会=7月21日、七尾市

「能登元氣市」の開催結果

会場	開催日	場所	入り込み客数
七尾会場	7/19(土)~21(月・祝)	能登食祭市場周辺	33,000人
	7/26(土)・27(日)		5,500人
珠洲会場	8/2(土)・3(日)	ラポルトすず周辺	7,000人
	10/26(日)	珠洲市健康体育館	3,000人
輪島会場	10/5(日)	マリンタウン	18,000人
	10/18(土)・19(日)	総持寺周辺	4,500人



全国チョンガレまつり=8月2日、珠洲市



輪島農林漁業まつり=10月5日、輪島市

(4) 灯りでつなぐ能登半島

7月27日の「御飯川まつり」(七尾市)を皮切りに、万燈会やランブシェイドなど、「灯り」をテーマに4市5町を結ぶイベントである「灯りでつなぐ能登半島」を実施した。

中でも、10月4日、輪島市で開催された「白米千枚田あぜの万燈」では、約250人のボランティアによって並べられた無数の提灯が幻想的な世界をつくりだした。

(5) 能登秘宝めぐり

「能登秘宝めぐり」では、通常拝観できない仏像、掛け軸などを、博覧会期間中、特別公開した。

永光寺(羽咋市)では、「水晶舍利容器」や、「木造十羅漢坐像」を、本行寺(七尾市)では、「隠れキリシタン秘仏(前田家秘仏)」を期間限定で公開した。



白米千枚田あぜの万燈=10月4日、輪島市



水晶舍利容器(永光寺/羽咋市)

(6) 蔵コンサート

「蔵コンサート」では、能登の造り酒蔵や漆器蔵など、11の「蔵」を舞台に、ジャズから横笛まで、多彩なコンサートを開催した。

独特の「蔵」の香りが漂う落ち着いた雰囲気の中、来場者は、アーティストたちの調べに酔いしれた。



蔵コンサート(宗玄酒蔵)=9月15日、珠洲市

(7) 能登人と過ごす能登時間など

能登でモノづくりに携わる人たちと触れ合いながら、モノづくり体験をする「能登人と過ごす能登時間」では、4市5町28人の「能登人」が、「土壌土地底層検」、「塩づくり」、「花嫁のれん人形づくり」、「能登ラド」など、能登ならではの体験プログラムを提供した。



「能登人と過ごす能登時間」のポスター

(8) 栗原はるみ料理&トークショー

9月6日には、輪島市文化会館で、「栗原はるみ料理&トークショー」を開催した。全国1,800人の応募者の中から抽選で選定された300人が、栗原さんの軽快なトークと能登の食材を使った料理の試食を楽しんだ。



栗原はるみ料理&トークショー=9月6日、輪島市

(9) 誘客促進策

「能登ふるさと博」では、様々なイベントの実施に加え、能登地域に足を伸ばしてもらうため

の誘客促進策として、能登有料道路の通行料金を助成を実施した。

マイカー利用者への助成制度として行った「みちカード(片道分)プレゼントキャンペーン」では、能登の協賛宿泊施設(約200施設)に1泊以上した方を対象に、片道分のオリジナルみちカードのプレゼントを行った。

また、旅行会社に対しては、大型観光バスの往復通行料金の助成を行った。

<オリジナル「みちカード」プレゼントキャンペーン>

・期間：7月19日(土)~8月31日(日)
・プレゼント内容：「宿泊施設の最寄り料金所~内灘料金所」区間分の通行券(片道分)
・配付実績：27,119枚

<大型観光バスの能登有料道路通行料助成>

・期間：7月19日(土)~10月26日(日)
・助成内容：能登有料道路・田鶴浜道路の往復通行料
・助成利用台数：838台

このほか、4市5町の「道の駅」などを巡るスタンプラリー、能登の風景や人をモチーフにした「能登を撮ろう写真コンテスト」、思い出に残った能登の祭・人・風景などを描く「絵がみコンクール」を実施し、合計30人の方に、能登牛や加能ガニ、輪島塗、珠洲焼のあたる豪華景品プレゼント・キャンペーンを実施し、誘客促進を図った。

<「道の駅スタンプラリー」>

・期間：7月19日(土)~10月26日(日)
・道の駅等：21カ所
(道の駅：12カ所、一息スポット：9カ所)
・応募総数：延べ2,351人(当選者10人)

<「能登を撮ろう写真コンテスト」>

・期間：7月19日(土)~9月30日(火)
・応募総数：計146作品(優秀賞10作品)



能登を撮ろう写真コンテスト優秀作品

<「絵がみコンクール」>

・期間：7月19日(土)~9月30日(火)
・応募総数：計63作品(優秀賞10作品)

【加賀四湯博】の開催

(1) オープニングキャンペーン

博覧会のスタートの7月1日には、各温泉の女将さんたちによるオープニングキャンペーンを小松空港及びJR加賀温泉駅で行い、チラシや記念品を配るなど、PRに努めた。



「加賀四湯博」ロゴ



「加賀四湯博」オープニングキャンペーン=7月1日、小松空港

また、加賀4温泉の情報を掲載した「加賀四湯本」を発行し、加賀4温泉の魅力のPRに努めた。

このガイドブックは、加賀四湯の歴史文化から最新の体験、グルメ、イベント情報を掲載し、さらに、ポイントラリーの台紙や、入浴割引券を添付し、加賀4温泉が一目でわかるものとした。



加賀四湯本

(2) 「加賀さん」いっしょにキャンペーン

全国から加賀温泉郷に因んだ名字の方が集合した「全国の「加賀さん」いっしょにキャンペーン」を実施した。

北は北海道から南は熊本県まで185組の応募があり、抽選で選ばれた、20組40人の全国の、「加賀さん」「小松さん」「栗津さん」「片山(津)さん」「山代さん」「山中さん」に、7月10日山代温泉に集合して交流を深めてもらうとともに、観光大使に委嘱を行い、加賀四湯の応援団になっていただいた。翌日は、加賀四湯の見どころをバスで見学してまわり魅力に直にふれもらった。



観光大使への委嘱状



「全国の「加賀さん」いっしょにキャンペーン」ワルカム! (一斉) =7月10日、加賀市山代温泉

(3) まちめぐりポイントラリーなど

加賀4温泉の宿泊客が温泉街や観光施設をめぐる「まちめぐりポイントラリー」を実施した。参加者には記念品をプレゼントし、「加賀四湯本」を片手に、宿泊した温泉街だけでなく、他の温泉地を回遊する観光客も見受けられた。

さらには、加賀の4大祭り「おっしょべまつり」栗津温泉、「湯のまつり」片山津温泉、「山代大田楽」山代温泉、「こいこい祭」山中温泉)を巡る「加賀四湯お祭りバスター」や、8月14日から16日のお盆期間に4温泉を巡回する「四湯号」を初めて運行するなど、4温泉が一体となって、観光客にさまざまなイベントを提供した。



おっしょべまつり=8月28~30日、小松市栗津温泉



湯のまつり=8月20~22日、加賀市片山津温泉



山代大田楽=8月3、4日、加賀市山代温泉



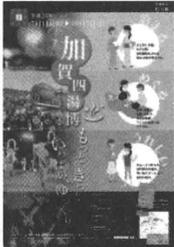
こいこい祭=9月22、23日、加賀市山中温泉

(4) 加賀四湯博おたからまつり
 フィナーレを飾った「加賀四湯博おたからまつり」は、10月5日、片山津温泉街で開催され、加賀白山物産市、海鮮大鍋のふるまい、加賀4温泉の獅子舞や芸妓の舞踊、太鼓の競演、柴山湖湖上花火などが実施され、「加賀四湯博」のフィナーレイベントにふさわしく、多くの観光客や地元住民で賑わった。



加賀四湯博おたからまつり＝10月5日、加賀市片山津温泉

(5) 誘客促進策
 4温泉が統一したテーマで夏祭りを行う「加賀四湯にぎわいイベント」や、9月に2泊以上された方に抽選で豪華景品が当たる「連泊キャンペーン」を実施し、誘客促進を図った。



「加賀四湯博」テラス

また、東海北陸自動車道の全線開通を機に、石川・岐阜県が連携して実施した白山スーパー林道の割引制度にあわせて、「白山スーパー林道半額キャンペーン」を実施した。

<加賀温泉郷における白山スーパー林道利用料半額キャンペーン>

・実施期間：平成20年7月5日(土)～8月31日(日)

・助成条件：加賀4温泉(栗津、片山津、山代、山中)旅館協同組合加盟旅館に1泊

・助成内容：
 通常 公社2割引 半額
 普通自動車 3,150円 → 2,500円 → 1,250円
 軽自動車 2,540円 → 2,000円 → 1,000円
 通行料金半額負担分の1/2を支援

・県による支援内容：
 地域魅力アップ支援事業(能登半島地震被災中小企業復興支援基金)

・利用台数 1,356台

Ⅱ 両博覧会の開催による効果

(1) 観光入り込み客数の増加

両博覧会を開催した7月から10月の4カ月間の入り込み客数を見ると、速報値ではあるものの、県内の主要7温泉地では、前年(平成19年)比9.9%増、地震前の平成18年比でも1.6%の増となった。(このうち、和倉温泉では、前年比5.2%増、平成18年比4.8%減、輪島温泉郷では、前年比29.9%増、平成18年比1.7%増となった。)

また、主要観光地については、輪島朝市では前年を27.7%上回っているもの、平成18年比では、9.1%の減となったが、のどろ水族館や兼六園では、ともに地震前の平成18年の入り込み客数を大きく上回った。

これらのデータから、本県全体の観光入り込み客数は、ほぼ平成18年並に回復しつつあるとともに、能登地域についても、平成18年にとり、一歩の水準まで来ており、両博覧会の開催が風評被害の払拭に寄与したものと考えられる。

(2) 広域的な取り組みに対する意識の芽生え
 従来、ややもすると「能登は一つ・ひとつ」といった市・町単位で行っていた取り組みから、今回の「能登ふるさと博」においては「能登は一つ」の合い言葉のもと、灯りのイベントや、程宝めぐりなど、共通のテーマにより、地域が一体となった広域的な取り組みが見られた。

また、「加賀四湯博」でも、4つの温泉が、それぞれのイベントへの相互送客を行うなど、初めて長期間にわたって連携した取り組みが見られた。

そして何より、この両博覧会は、能登の元氣とともに、能登地域や加賀温泉の魅力が県内外にアピールできたことが大きな成果となった。

「県内主要7温泉地の入り込み客数(平成20年7～10月)速報値

区分	入り込み客数(千人)	平成19年比	平成18年比
県内主要7温泉地	1,217	109.9%	101.6%
うち加賀温泉郷	794	111.4%	105.3%
うち和倉温泉・輪島温泉郷	404	108.5%	96.2%

注) 前年比及び前々年比は千人未満の端数を含んだ比較

「県内主要観光地の入り込み客数(平成20年7～10月)速報値

区分	入込客数(千人)	平成19年比	平成18年比
輪島朝市	340	127.7%	90.9%
のどろ水族館	216	100.2%	118.1%
兼六園	547	116.5%	105.6%
いしかわ動物園	133	98.4%	103.3%

注) 前年比及び前々年比は千人未満の端数を含んだ比較

体験寄稿

1 国関係者 188
 2 市町長 193
 3 消防関係者 200
 4 警察関係者 202
 5 防災等関係者 203
 6 医療関係者 209
 7 ボランティア関係者 214
 8 被災地の声 219

1 国関係者

- (1) 陸上自衛隊金沢駐屯地司令兼第14普通科連隊長 正木 幸夫 188
(2) 航空自衛隊第23警戒群司令兼輪島分屯基地司令 佐藤 雅俊 189
(3) 北陸地方整備局金沢河川国道事務所長 渾見 有毅 190
(4) 林野庁森林整備部整備課課長補佐 堂本 肇 191
(5) 石川労働局長 坂本 潔 192

2 市町長

- (1) 七尾市長 武元 文平 193
(2) 輪島市長 堀 文秋 194
(3) 珠洲市長 泉谷 浩吾 195
(4) 志賀町長 梶川 義雄 196
(5) 中能登町長 杉本 榮蔵 197
(6) 穴水町長 石川 宣雄 198
(7) 能登町長 持木 一茂 199

3 消防関係者

- (1) 奥能登広域圏事務組合消防本部輪島消防署 国永 剛 200
(2) 輪島市消防団副団長 四柳 未言 201

4 警察関係者

- 石川警察本部警備機動隊小隊長 松村 圭 202

5 防災等関係者

- (1) 北陸電力株式会社七尾支社長 竹原 利一 203
(2) 西日本電信電話株式会社金沢支店設備部災害対策室長 俣 敏明 204
(3) 財団法人石川県建築住宅総合センター理事長 照田 繁隆 205
(4) 社団法人石川県建築士会輪島支部長 高出 正次 206
(5) 独立行政法人土木研究所土砂管理研究グループ 地すべりチーム上席研究員 藤沢 和範 207
(6) 独立行政法人森林総合研究所 水士保全研究領域山岳研究室長 落合 博貴 208

6 医療関係者

- (1) 元能登北部医師会長 山岸 満 209
(2) 公立能登総合病院 事業管理課長 山口 光平 210
(3) 輪島市立輪島病院 病院長 品川 誠 211
(4) 金沢赤十字病院整形外科医 堀本 孝士 212
(5) 珠洲市総合病院看護科看護師長 天満 富子 213

7 ボランティア関係者

- (1) 穴水町ボランティア連絡協議会長 松田 栄四郎 214
(2) 日本赤十字社石川県支部防災ボランティアリーダー 北村 裕一 215
(3) 石川県災害ボランティアコーディネーター協力会事務局長 松井 善憲 216
(4) 災害ボランティアコーディネーター 伊藤 静香 217
(5) 石川県立羽咋高等学校2年 山田 亮 218

8 被災地の声

- (1) 輪島市門前町道下区長 泉 靖郎 219
(2) 農事組合法人モロカオカエーシー代表理事 竹内 新一 220
(3) 志賀町芦波区長 茶畑 勝朗 221
(4) 輪島工務長屋 七浦 精達 222
(5) 七尾市中島町 永谷 誠行 223
(6) 輪島市門前町深見区長 板谷 弘 224
(7) 志賀町鶴野屋 松田 外茂三 225
(8) 穴水町大町 皆森 照子 226
(9) 七尾市立小丸小学校4年 南 優花 227
(10) 輪島市立門前中学校2年 松原 萌 228
(11) 和島温泉旅館協同組合女将の会 会長(大観荘) 大井 マ理華 229
(12) 輪島漆器工芸協同組合理事長 岡田 典典 230
(13) 合名会社中島酒造店代表 中島 浩司 231
(14) 総持寺通り商店街復興委員会 五十 冨義美 232

注 寄稿については、2019年3月25日現在の情報が掲載されています。注記については、本文208頁を参照してください。

異動直後の能登半島地震

陸上自衛隊金沢駐屯地司令兼第14普通科連隊長 正木 幸夫

能登半島地震の発生を知ったのは、横浜の自宅で早朝から単身赴任のための荷造りをして

できた。東京羽田を後にしてからの半日間、疲

明けて翌日、被災現場に到着したときの印象

駐屯地到着後、真っ直ぐ指揮所に入ると、副

災害派遣は自衛隊の本業任務である。金沢駐

「進の報告を受けた後、「被災現場へは最早

「進の報告を受けた後、「被災現場へは最早

能登の人々と思いを一つに

航空自衛隊第23警戒群司令兼輪島分屯基地司令 佐藤 雅俊

地震発生当日、私は、市ヶ谷の統合警備監部

調整を実施させました。一刻一刻と状況が変

一、輪島市との信頼醸成

災害派遣等で指揮関係の異なる複数の組

三、被災者の目録になった活動

直接的な支援活動の実施に際しては、被災

四、ボランティア精神の醸成

自衛隊が撤収フェーズに入り、他自治体

二、情報の共有

地震発生直後に災害対策本部に連絡員を

震災から一年、私自身は無夢中で駆け進

地震からの復旧・復興とさらなる活性化を願う

北陸地方整備局金沢河川国道事務所長 蓮見有敏

地震直後、余震が続く中で金沢に着任し、翌日最初の仕事として衆議院災害対策特別委員会の方先方の現地視察に同行した。自分の目で見た被災地は、報道以上に家屋の倒壊・損傷が見られ、道路をはしめとする公共施設の被害は甚大であった。一方、避難所にはお年寄りを含め多くの方がおられたが、サポートする職員、ボランティアの方のご努力により不自由な生活の中でも皆さん落ち着いておられたのが印象的であった。

北陸地方整備局では、地震発生直後から県庁にリゾンを派遣して情報収集に努めるとともに、輪島市役所に災害対策本部車2台を派遣し災害対策現地支援センターを開設し10人体制で連絡調整等に当たった。金沢河川国道事務所が管理する直轄国道は、震源地に近い能越自動車道穴水道路を含めた大きな被災はなかったことから、我々の地震対応の主体は県、市町の管理する道路等の復旧支援となった。

大きな災害時には自治体の職員は被災者のケアや避難所対応に全力にたらざるを得ず、道路等の公共施設の被害状況調査まではとても手がまわらない。輪島市道を中心に被災状況調査、復旧費申請のための報告書の作成等をべ150人規模で行った。また、遠隔操作タイプボウ、衛星通信車、照明車等の災害対策機械を職員とともに現地に派遣し、応急復旧にあたった。能登半島地震におけるこのような災害発生直後からの人員・資機材の緊急的な派遣は、その重要性が認識され、平成20年度の国土交通省緊急災害対策派遣隊（通称TEC-FORCE）の発足に繋がった。蓄積された多くのノウハウを受け継がれ、緊急時の支援体制が構築されたと言える。この原稿を書いている最中も、岩手・宮城内陸地震の対応でTEC-FORCEが派遣されていく。改めて地震大日本とその院請な国土上

思わざるを得ない。特に被災の著しい能登有料道路や国道249号八世乃洞門、門前町深見の輪島市道については、長期間の通行止めを余儀なくされ、学識経験者、国土交通省や土木研究所の専門家の助言も得ながらの復旧になった。このような場合、早期復旧と安全性・利便性確保の両立が求められるが、往々にしてこれらが相反することが多い。復旧工法を決めるにあたっては難しい判断を迫られることが多かったと思うが、能登有料道路のG前面の通行止め解除、八世乃洞門の夏休み前の開通等、当初の被災状況からは想定できないほどの短期間で応急復旧がなされており、担当された方々、作業に当たられた方々のご努力には心から敬意を表する次第である。

観光産業が地域経済に与える影響が大きい。能登半島では、観光ルートが長期の通行止めになると地域全体に大きなダメージを与えるし、風評被害も含めてその影響は広範囲かつ長期に及ぶ。県をはじめ関係機関も風評被害の払拭に腐心され、我々も微力ながら道の駅やHP、道路情報板、自らの口コミで道路交通の復旧状況をPRしたが、残念ながら能登地域に限らず加賀や富山県でも観光入り込み客が減少したようであり、結果として地震の影響は小さからず残ってしまった。

能登半島地震の復旧・復興は、今後住宅の再建、観光の振興、さらにはコミュニティの再構築などのステップに移るが、地域ごとに活性化するように、県民の方々が従前より増して笑顔になるように、我々としても社会資本の整備に努力を怠らない所存である。また、TEC-FORCEを派遣するような大災害が起らないに越したことはないが、万が一の時に被災危機管理に万全を期してまいりたい。

早期復旧に向けた支援

林野庁森林整備部整備課課長補佐 堂本 整

2007年3月25日、自宅で見えていたテレビに地震速報のテロップが流れる。「石川県能登地方で震度5強の地震が発生」。阪神淡路大震災、新潟中越地震の被災状況が脳裏をよぎる。「林道被害に関する情報収集を早急に！」とは言え、林道は一般道に比べ山間地を通っているものがほとんど。余震が続き二次災害発生が危惧される中、早急に現地に入り調査することは可能なか？県から国へ応援要請があれば迅速に対応できるよう応援体制の検討も必要だ。

しかし、県、市町の担当者の皆さんの連日連夜にわたる大変な努力により、時間の経過とともに被災者の状況が明らかになってくる。さらに、能登有料道路のサービスエリアで孤立していた観光バスの乗客等が、林道を使って救出されたニュース、門前町で孤立していた地区が林道の早期復旧により孤立が解消されたニュース等を知り、つかの間の安堵感。

結果、被害発生10日後にはすべての林道の現地調査を終了し、この時点で林道被害は297カ所、被害額8億2,600万円に達したとの報告を受けた。

次は早期復旧に向けた災害査定を早急に計画することとなる。日程調整の結果、第1回（5月7日～11日）と第2回（6月4日～8日）の査定が我が現地入りすることとなった。午前11時、能登空港に着陸。奥能登農林総合事務所での林道の被害概要等打合せを行う。打合せでは、東京へ想像していた以上の緊迫した雰囲気を感じたと伝わる。

第1回の査定は、被災した林道の中でも優先順位の高い林道を中心に、15路線56カ所を正味35日で査定するハードなスケジュールである。

事務所から輪島市へ向かう道中、ブルーシートに覆われた民家の屋根、建設されたばかりの応急仮設住宅、倒壊した建物ものと思われる廃材の大きな山等、被害の甚大さと、復興に向けての地域住民の苦悩が伺える。

形状を見て驚いた。路体には高さ1m以上の段差と、数十cmの大きな口をかけた地割れ。コンクリートの重圧力輻輳が数十cmも持ち上げられたもの、路体全体が崩落して跡形もなくなってしまうものもある。想像を越すほどの地震の揺れによる悲惨な状況を目の当たりにし、改めて自然の力の大きさと地震の恐怖を感じる。

一方、見た目には林道の舗装に数mmから1cm程度のクラック（ひび割れ）が入っているだけの現場。被災の程度を確認するため、このクラックに直徑数mm長さ2mのピンポールを差し込んでみる。ほとんど抵抗を感じることなく「スボッ、スボッ、スボッ」とピンポール全体が地面の中に簡単に入ってしまう。一体、どの深さまで路体を構築し直せばよいのか判断に迷う。中途半端な復旧の方法では、降雨の際にこの場所が起点となつて再び崩壊してしまうことも考えられる。

被災者である県、市町の皆さんのためにも、低コストで最大限の効果を発揮できる工法で復旧できるよう査定し、指導する必要がある。技術者としての腕の見せ所もあるが、査定内容かせの現場でもある。

現地では、復旧工法の選定に苦慮する場面もあったが、担当者の迅速かつ適正な対応の結果、6月22日までに約6億9千万円の事業費を決定し、林道の災害査定を終了することができた。査定終了から約5か月後、東京で会議で、奥能登農林総合事務所の林道担当者のOさんと偶然会った。現場の復旧状況はどう？の問いに「査定を受けたほとんどは既製の工事発注を終了し、着々と工事進行中です」との答え。「全て林道の復旧工事が完了するまでが目標よ」と激励する。

被災現場では、今なお多くの人が復旧に向けて汗を流している。我々ができる支援は、全体からすると小さなことではない。一日も早く完全復興を切に願う。

能登半島地震体験記

石川労働局長 坂本 潔

日曜日の午前9時40分頃、大きな揺れとともにテレビの土の上カレンダーが落ちた。あわててテレビをつけるともまなく地震状況が始まり、東京で震度6強という文字が飛び込んできた。

東京の自宅からメールが入る。県外から電話は通じないが、メールは送れるようだ。

労働局に災害対策本部を設置し、職員の安否等情報収集を行うが、休日のため一部職員の安否が不明のままであった。

翌日、早い段階で職員全員の安否の確認が出来たので、災害の状況把握と職員を激励するたため、穴水、輪島、七尾の各監督署、職業安定所を回ることにする。途中、能登有料道路が柳田インターで通行止めのため、較道で行くこととなるが、支援のために来ているのだからと思われる。多くの地味ナンバーの消防車等とすれ違う。ブルーのシートをかけた家も多く見え、ことの重大さを物語っていた。各監督署、職業安定所とも外壁、床の一部にひび割れが出来たり、戸舎の一部が隆起している部分もあったが、どうやら大きな問題はなさそうだ。余震が続いており、職員の不安も大きなものがあったが、各監督署、職業安定所とも前日に職員が出動し、事務所内に倒壊している書棚、ロッカー等や散乱している書類を整理し、当日には勤務体制が整った。

翌々日「石川労働局における能登半島地震への対応措置について」として、労働局の企画室と全ての監督署、職業安定所に労働者、事業主の方から相談に応じるべく、特別労働相談窓口を設けたことともに、災害救助法適用による一時的な離職者に対する支援等について、報道発表を行った。

労働局としては今回の地震に際し、労働災害の早期補償と労働災害防止団体、発注機関等への、復旧工事における労働者の安全確保を行うとともに、労働災害防止団体の協力のもと、輪島市の災害対策本部等に、復旧工事における荷じん暴落防止のために、防護マスクを1,900個配付した。

また、災害により離職された方に対する雇用対策として、特別労働相談以外にも、雇用保険失業給付の受給者が、地震のため職業安定所に来所できない場合に、受給者からの申し出により、所定の失業認定日を要変更することや、一時的に離職を余儀なくされた方に、雇用保険の基本手当を支給する特例措置を行うなどの対応につとめた。

地震後、直ちに労働局内各課室及び監督署、職業安定所に対して庁舎内外の備品、物品等について転倒、落下の危険性についての点検指示を行うとともに、後日行われた労働基準監督署長、公共職業安定所長合同会議では、災害発生時の対応等について周知徹底を図った。

今回の地震では、組織がうまく機能したが、忘れていたことも多く、日頃から繰り返し災害時の対応について周知していく必要性を、改めて痛感した。

春の一斉清掃を激励するため市内を巡回し、地震に遭った。慌てて市役所につけ、地震情報を確認した。庁舎内を見てみると、書棚やファイルが散乱しており、電気も消え非常灯で、震度6強と報道され、平成16年10月の中越大地震の惨状を思い起こし、市民の被害状況はどうか、市内のライフラインや家屋の状況はどうなのかというのが、最初頭によぎりました。

急いで出勤してきた職員で災害対策本部を設置させた。幸い防災訓練を行った後だったので職員が迅速に落ち着いて対応していた。

地震発生から15分で本部を設置し、総務・広報班、上下水道班、産業・農林班、衛生班、環境班、土木班が設置され、防災用電話も設置したが、市民に知られていなかったため、被害情報や問い合わせが代表電話に集中して混乱した。災害発生から2時間後、第1回災害対策本部会議を開き、被害状況及び対応状況などの報告を受け、今後の対応を指示した。正確な情報の把握と職員間の情報共有が必要と考え、広報班への情報提供を徹底させた。

能登総合病院の水タンクが満水しているというので金沢市へ給水車の派遣要請をした。病院の地震対策は想定外であったので、随分慌てました。人命に関わることなので本当に冷汗が流れる想いでしたが、幸いにも治療等に支障もなく、胸を撫で下ろしました。

3時間後、避難所を開設した。被害者が増えたので避難所を7カ所に増やし、職員を2人ずつ派遣し対応にあたらせたが、被災者の方々の不安な気持ちをどれだけ慰められたことか。

また、各地区の民生委員や町会長に老人世帯や一人暮らし高齢者などの安否確認をお願いしたが、皆さんはすでに安否確認を終えられて、一人ひとりの状況を正確に把握されておられたことに、本当にうれしく頭が下がりました。

14時頃、能登有料道路の崩落により、別所岳パーキングエリアでバスの観光客が孤立しているご連絡があり、びっくりした。幸いにも傷病者がいない模様とのことと安心したが、とにかく山から下ろさなければならない。早速マイクロバス3台で中島支所とパーキングの間をピストン輸送し救出した。16時頃、各病院に照会したところ人的被害は増えており、和倉温泉の

能登半島地震における体験から

七尾市長 武元文平

旅館についてもほとんど営業を見合わせたとの報告を受けた。通行止めも1カ所解除されたのが新たに3カ所追加された状況であった。

この日は、本部会議も4回開き情報共有と対策確認をし、24時間体制で本庁及び3支所に職員を配置して万全を期した。

断水箇所での復旧は夜を徹して行い次々と復旧させたが、再び別の断水箇所も出てきて終日対応に追われた。

2日目は、被害状況の把握及び安全対策として被災住宅の応急危険度判定調査を実施、避難所での健康相談、エコノミー症候群や生活不活発病の予防チェックを行い、保健センターでも24時間体制で健康相談の対応に当たられた。

3日目は、被災住宅被害応急調査を7班14人体制と増員し、被害状況の把握がスムーズにできるように体制を整えた。また、全民生委員に協力してもらいボランティアのニーズ調査も行った。

七尾市は、地震が余り発生しない地区だと行われていたため、地震対策には危機感があまりなかったように思いますが、幸いなくこの防災訓練が卒ぐに役に立ったこと、日曜日の午前9時42分ということ、会社等が休みで、火災もなかったことが幸いでいた。学校や保育園、幼稚園に生徒や児童がいたら大変なことになっていたと思います。特に田鶴浜保育園の内部を見たこと、もしここに園児がいたらと思うと、本当に冷や汗が流れた。

和倉温泉では、地震発生後、観光客のキャンセルが相次ぎました。旅館の被害も大きかったのですが、お客様に被害がなかったことが幸いです。

震災復興後は、風評被害でお客様が戻らず、関係団体と協力し様々な復興イベントを開催しましたが、復興に時間がかかりそうです。「地震は必ず起きる」ことを前提に、能登半島地震の教訓を生かし、災害に強い、安全、安心なまちづくりを進めなければなりません。基本は自分の安全・安心は自ら守ること、地域ぐるみで守ることだと思います。やはり一層厳格になるのは、地域防災組織であります。今後は、各地に町会や民生委員などが参加する自主防災組織を作ることにより力を入れていかなければならないと思っています。

最大の被災自治体、輪島市からの報告

輪島市長 髙 文秋

突然に大地が揺れた。かすかな地鳴りから一気に突き上げる衝撃と南北の大きな揺れ。経験のない強さだ。時間が長い、さらに強くなる、立っていることが出来ない。戸棚の上のテレビが飛び、冷蔵庫の中の物が流れるように落ちてくる。書架が倒れ、壁に掛けた額が揺る。大変な事態が起きた。飛び散った物の合を抜けるように歩き、防災服を着て外に飛び出し、車に乗り込んだ。前方の道路では倒れた家屋やブロック塀が散乱している。市役所に向かうため、進路を変えたが別の通りでも何棟もの倒壊家屋があり、そこをすり抜けて行くという悲惨な状況であった。

市役所に着くと執務室のロッカーが倒れ、入り口を塞いでいる。市長室は書架が倒れ書類で無茶苦茶になっていた。総務課で防災担当者をはじめ職員の名簿を確認し、直ちに災害対策本部設置を指示した。総務班・情報収集班・連絡調整班・幹事職員等を集め、非常用電源が配備された対策本部室(大会議室)に、衛星電話をはじめパソコンや各種機材を設置した。「直ちに災害対策本部を設置する。各委員は速やかに作業にかけろ」午前10時10分。水いらいの始まりを宣言し、腹を決めた。

旧門前町庁舎に現地災害対策本部を設置した。門前町では平成18年10月、大きな地震とそれに伴う津波が発生したとの想定で防災総合訓練を1300人規模で行ったばかりだった。しかし多数の倒壊家屋と高齢化率66% (旧門前町住民基本台帳ベース)の高さは、実際の災害と訓練との大きな違いを見せつけ、対策の大変さを痛感した。また地震発生が年度末であることや合併からわずか1年2か月という特殊な状況の中、数々の奇跡や異常事態に遭遇した。

「直ちに、指定された避難場所の全てを開封し、職員の配置を行うと共に、倒壊家屋に閉じこめられた被災者がいかに確認せよ」「県を通じて自衛隊、緊急前防援助隊・日赤医療チームの出動を求めよ」。既存の防災用備蓄品では、被害の大きさに対応できない。物資は緊急に県やインターネットで支援を求めた。ライフラインが寸断状態であるため、給水車の派遣支援や炊き出しの準備を要請した。かねて市にある航空自衛隊にお願いし、図上訓練CPXを災害対策本部訓練として実施していたことが大きな効果発揮した。

また市庁舎の災害対策本部に隣接する部屋には、今回の災害が初めてとなる内閣府の現地連絡室が

いち早く設置された。同時に国土交通省の所有する衛星通信車が駐車場に2台、県の現地対策本部も市庁舎内に設置され、毎日の国・県・市町の対策会議がリアルタイムに内閣府を通して国の各省庁にも伝えられ、現地での各日の被害状況や対策を共有できた。内閣府の現地連絡室は、国土交通省をはじめ環境省、厚生労働省、農林水産省等の関係府庁派遣者による混成チームであったことから各種の相談もできた。

最も頼りになったのは、中越地震で大きな被害を受けた新潟県や何県各自治体職員がいち早く支援に駆けつけてくれた事であり、涙がこぼれた。特に震災日以降、次々と起きるであろう様々な問題点を自らの経験と踏まえ、本市職員に的確に指導して下さった。何日も…何人も…本市に留まってくれた指導者であり、「確証証明」発行のための被害調査にも同行頂いた。その後の「被災者生活再建支援法」の相談業務等、被災者による相談を受ける前にも皆まじく、指輪の争が現実によく発生している。しかし職員は諦めず冷静に対応し、一方では復興に向けた計画づくにもあたった事ができた。深い感謝の気持ちを、この紙面をお借りして申し上げます。

避難所では富山県や福井県の保健師の方々にご活躍頂いた。高齢化率が県内一の地域での震災に指導して下さった。何日も…何人も…本市でスポーツ・インストラクターや保健師・保育士・保育園児等と一体(ふれ愛隊)として避難所に派遣し、高齢者の不活発前対策等を行って来た。仮設住宅での対策も県の保健師の派遣を頂き、対応している。

防災担当大臣や衆議院災害対策特別委員会、国土交通大臣、安倍前総理等がいち早く調査や動向に現地入りし現地調査として速やかな指定を頂き、加えて商店街や漆器産業等を支援する中小企業復興支援基金の創設、復興基金の創設等の道が開かれた。ただし復興は想像以上に大変なボリュームとなる。災害ゴミだけでも50数億円が必要となり、国の支援を受けたとしても必要な一般財源の捻出に苦労する。半島先端の過疎自治体であり、財政力指数0.260の輪島市だが、何とか歯を食いしばり復興を果たしていきたい。

最後に、この紙面では書き切れないほど多くの自治体の皆さんやボランティアの方々にご支援を戴いたことに感謝し申し上げ、現地からの報告に致します。

能登半島地震の報告

珠洲市長 泉谷 満寿裕

平成19年3月25日午前9時42分。私は、「すず峰フェスティバル」の開会式で国民宿舎のうら荘にいた。突然、強い揺れが襲った。揺れの間中、どこまで強まるのか、いつまで続くのかと思ひながら、身の危険すら感じた。会場には多くの方々がいっしょだったが、皆さん冷静で落ちついてた。長い揺れがようやく収まるまで直ちに会場を後にし、市役所に向かった。揺れの復合いからして、一期でも早く災害対策本部を立ち上げなければならぬと考えていた。市役所に向かう間、沿道の家並みをつぶさに見ながら、目に見える被害は発生していなかった。市役所に入る直前、情報を取集しようとする消防署に立ち寄った。火災、救急とも出動要請は無く、既に各消防団が警戒と被害調査のため出動しているとのことであった。消防団の対応の早さを心強く感じた。

午前10時10分頃に市役所に入ると、既に各課長は集合しており、直ちに災害対策本部を設置し、被害状況の把握に努めた。平成5年に発生した能登半島沖地震の経験が生きており、迅速な対応ができた。また、市内161の自主防災組織の長を兼ねる区長を通して、市民一人一人の安否確認を行った。午後3時過ぎには、家屋の損壊や負傷者など人的被害、また公共施設や道路などインフラの被害状況を把握することができた。結果的に、軽傷者が3名いらっしゃったものの、電気、水道等ライフラインに関して大きな被害は無く、また住家の全半壊も無かった。全区長からの連絡により、市民全員の安否確認も速やかに行えた。珠洲市の状況は

把握できたことから、午後4時30分頃、輪島市の視市長と連絡をとり、早速、給水支援の手配をした。

翌日から、約15億円にのぼる公共災害の復旧と国に対する支援要望活動が続いた。特に輪島市と本市の境にある国道249号のトンネル「八世万洞門」が崩壊し通行止めとなり、観光産業にとって大きな痛手となった。ゴールデンウィーク期間中の観光客の入り込み数は、対前年の半分となり、約8万人減少した。「八世万洞門」近辺の天然塩の生産業者からは、売り上げが8割減となるなど悲鳴が上がった。

その後、全国の多くの方々から義援金や応援をいただき、また、国、県のご支援によって復旧が進んだことは感謝の念に耐えない。中でも、7月7日、約100日振りに「八世万洞門」が通行できるようになった時の感激は忘れられない。多くの方が輪島から進め切ったように入ってきた。改めて、「能登はひとつ」ということを実感した。

あれから、もう、1年半が過ぎようとしている。復旧工事はほぼ終わり、「能登ふるさと博」や東北北陸道の開通の効果もあり、観光客の入り込みも回復してきた。「八世万洞門」のトンネルの工事も進められている。災害時において最も重要なのは「地域の絆」であることと痛感したことから、災害時要援者の「見守りマップ」の作成や、「地震防災マップ」の作成と住宅の耐震改修工事費等補助制度の創設、より実際の防災訓練の実施等、市全体で防災力の強化に取り組んでいるところである。

能登半島地震体験記

志賀町長 細川 義雄

能登半島地震の第一報を受けたのは、病院のベッドの上でした。横たえてテレビをつけると、既に能登半島地震の特別番組が放送されており、その映像を見て愕然としました。

私は、当時入院加療中でありましたので、被災地の陣頭指揮を執ることができず、歯がゆい思いをしておりましたが、区長さんをはじめ、住民の皆さんには率先して被災者の安否確認や被災状況の把握に努めていただき、避難所の開設にも奔走していただきました。また、職員も昼夜を問わず、幹線道路や上下水道の仮復旧作業に従事するとともに被災者の支援に全力を尽くしました。

退院後、速やかに特に被害の大きかった菅波、郷野屋、富永領家町などの避難所へ駆けつけ、お見舞いを申し上げましたが、遽に私の病状を気遣っていただき、被災住民の方々から元氣付けられたことが強く思い出されます。

さて、地震から1年が経過いたしました。その間、幹線道路や上下水道の本復旧、被災者の生活支援を行うための住民相談の実施に全力

をあげ、一日も早い復興に努めて参りました。おかげをもちまして町の主要施設の復旧は、概ね完了し、住民の日常生活も落ち着きを取り戻して参っております。

また、現在仮設住宅で不便な生活を強いられる方も、それぞれ住宅再建の目途が立ち、仮設住宅を出入れる日が近いと聞き、ほんの少し肩の荷が下った気がすると共に、新たに建設された住宅が三十数棟もあり、住民の皆さんの力強さを実感しております。

最後になりましたが、本町がここまで早く復興の道を進めたのも、全国の多くの皆様から寄せられた励ましの言葉や心温まる義援金、県、国の全面的な支援の賜物と深く感謝申し上げます。

私どもは、この能登半島地震を後世に未永く語り継ぐと共に、この地震で得た教訓を活かし、今後は、自主防災組織の立ち上げや強化を行うと共に、消防団、消防団の活動施設と福祉避難所を併設した防災拠点施設の建設などを行い、安全、安心の町づくりに努めて参ります。

災害に強いまちに

中能登町長 杉本 栄蔵

当時を振り返れば、これまでに経験したことがないような大きな揺れと度重なる余震に襲われ、町民一同、不安な日々を過ごしたことが鮮明に思い出されます。

地震当日、私は早朝から地区行事に参加して参りました。行事が終わり、家の居間で新聞を広げたところでした。突然の大きな揺れに襲われ、家具がガタガタ動きはじめました。地震だと思い、私はとっさにストーブのスイッチを止め、揺れがおさまるのを待ちました。

ようやく揺れがおさまり「ほっ」としながらも、町内にも被害が出ているに違いないと思い、私は急いで役場に向かいました。車での道中、ラジオから能登半島沖が震源で、中能登町の震度が6弱であることを知り、規模の大きさに驚きを覚えました。

登庁後、まず災害対策本部を設置するとともに、町内の被害状況の把握と、消防や警察など関係機関との協力要請を急いで行うよう指示を行いました。地震発生直後、職員による被害状況確認、区長や民生児童委員との連絡及び情報収集を素早く行うことができたのは、地震発生半年前に行った防災訓練の成果であったと思います。

国や県の支援を受け、道路の復旧や被災家屋からの瓦礫の撤出は終了しましたが、地震発生

から1年が経過した現在も町民の生活の復興支援は続いております。幸い、地震により家を失った方、全員の住宅復興に目途は立ちましたが、その一方で地震による怪我が原因で今も病院のベッドの上で寝たきりの生活を余儀なくされている方や、家を失った精神的ショックから体調を崩し、今なお通院されている方もおり、町民の皆さんの生活が通常になるにはまだまだ時間がかかるそうです。

昔から「災害は忘れた頃にやってくる」と言われ、現に新潟県の中越地方では、平成16年の震災から3年後に再び大地震に見舞われております。現在、町ではこの現実を忘れず、建築物の新築化の促進やライフラインの強化を進めているところですが、今後もこの地震により明らかになった様々な課題・問題点に対する対策を行い、災害に強い「安心、安全なまちづくり」をさらに進めるとともに、町と町民の皆さんが一体になり「協働の心」を大切にしながらまちづくりを行って「協働」と思っています。

終わりにあたり、全国の皆さんから心温まるたくさんの激励をいただきました。多くの方の義援金をお寄せいただきましたことを、町を代表して厚くお礼申し上げます。また、被災された皆さまが一日も早く平常の生活に戻れますよう心よりお祈り申し上げます。

震災体験から復興に向けて

穴水町長 石川 宣雄

能登半島地震を体験して

能登町長 持木 一茂

平成19年3月25日は、晴天に恵まれた春日の日曜日、私は、4月からの中学校再編に伴う向洋中学校の閉校式に出席しておりました。会場となった体育館には、生徒、教職員、校下の方々など多くの関係者が出席し、やがて始まったのは午前9時42分、突然、これまでに経験をしたことのない大きな揺れに立ちつき、一瞬にして大混乱となり、生徒などを中心に誘導する大きな呼び声が響き渡ったことを、今でも克明に覚えております。

その後、役場に戻り、災害対策本部を設置し、安否などの調査・確認の指示を行いました。幸い、区長町内会長、民生委員、婦人会などの方が手分けして確認作業を行っていただいたことで、2時間余りで確認がとれたことで、行政と地域とのネットワーク、絆の大切さを再認識いたしました。

震災2日目頃から、全国各地より温かい支援の申し入れがあり、自分たちではとても手が回らないところ、経験したことのない業務を、同、県その他、多くの自治体などから、調査やご指導を頂いて頂いたほか、職員等を回せないような被災家庭の片付けや清掃などの作業を多くのボランティアの方々にも担って頂きました。

さらに、国・県でも、直後から現地本部を設置し、救援や応急対策などのご指導をいただいたほか、県独自の厚い支援策など、スピード感をもって対応していただいたことで、被災者の再建意欲を喚起するなど、大変心強く、おかげで大きな混乱もなく、応急から復旧復興に移行することができたことを深く感謝しております。

次に、本格復興に向けた取り組み状況ですが、その土台を固める復旧作業を先行して進め、その間に復興プランを策定し、本格復興を目指すことにしましたが、町での支園を日中であって、商店街を形成する中心市街地に被害が集中したことで、①市街地の再建、②商店街の再生、③住宅の再建を一体的に取り組むことが必要となりました。このため、復興の方向性や施策を円滑に推進するためには、町、地域民商店街などとの協働体制を強化することが前提条件であるとの思いから、商店街ごとの復興委員会や町民の誰もが参加できる「ふれあいサン」を設置するなど、今後のまちづくり活

動にできるだけ多くの関係者が参画できるような体制づくりを努めたところであります。しかし、大型店の退出や後継者不足などで、商店街としての活気、賑わいが落ちていたこともあり、総論と各論に温度差もあるなど、厳しい一面を呈していたのが事実で、毎週20人余りが集まり、賑わいのあった商店街になるには「これが最後のチャンス」、「次の時代には評価されるまちづくりが必要」との積極的な意見も多く聞えるなど、ハード、ソフト両面にわたり、活発な議論が行われました。

このような、経緯と国・県の特設のご配慮によりまして、シンボルロードや住宅再建の受け皿となるミニ区画整理事業などを盛り込んだ「復興計画」が3月14日開催の策定委員会でご決定されました。

この計画による復興の目標は、単なる復旧ではなく、震災から得られた教訓を生かし、震災がバネに安心・安全で活力あるまちづくりを取り組むとともに、将来の穴水町を担う人材が育ちまちづくりを担い、「安心・安全」「活力再生」「人材育成」の3つをキーワードとする町づくりを復興の目標としたところであります。

また、計画策定と併せて、課題の解決に向けた必要施策を県の復興プランに盛り込んでいただくために、関係者とともに要望活動も展開してきた結果、区画整理事業については、県当局の素早い対応によって事業認可の交付をいただくことができました。

さらに、真川川沿いの護岸は親水空間としての整備や、モデル住宅でははるかなる住宅など、町の実情に配慮した計画をご提示いただくなど、本格復興に向けた道筋を確実なものとしていただきました。

平成20年度には、駅前などの遊休地を活用したシンボル施設の整備を含め、災害に強い町づくりのための計画を策定し、出来るだけ早い時期に完成させたいと考えております。

最後に、少子高齢化そして過疎化が進み大変厳しい環境ではありますが、「小さな町だからできない」というのではなく、「小さな町だからこそできる」というきめ細かな住民サービスをこせげながら、新しい穴水まちづくりを努めます。

平成19年3月25日午前9時42分頃、突然の揺れは揺れを増し、ドスンという轟音の後、今までに経験したことのないくらい大きく自宅が揺れました。

能登半島地震であります。能登町においては、震源地から離れてはいたものの、震度6弱の揺れを観測し、人的被害は重軽傷者12人、被災家屋1142戸という被害内容であり、また、町道の通行止めや上下水道管の被害など、ライフラインについても甚大な被災を受けました。

地震後、役場庁舎に駆けつけたときにはすでに数人の職員も登庁しており、すぐに災害対策本部の立ち上げを決定し、被災者の調査確認とその支援、ライフラインの被災箇所調査や応急処置等を指示し、復興に向けての日々が始まりました。

今まで地震の少なかった能登町においては、日頃より災害の準備はしていたものの、今回のような大地震というものは、正直想定外の災害であり、当時行政として最善の支援を標に、職員とともに慣れない復興復興作業に取り組みましたが、今にして思うと疑問や指示が充分であったかどうかという点に疑問に思うところがあります。

さらに、目を追うごとに被害の情報が寄せられ、テレビでの報道などの影響からも、被害の大きさをさまざまなと実感するとともに、余震も頻発してはいたことで二次的被災の心配と、復興が完了するまではいつになることかと終わりの見えぬ作業に不安を感じてはいるけれども、復興が、職員のみならず地域住民も一丸として復興に向けて頑張ったおかげで、年内には被災前の普段通りの生活に戻ることが出来たのではないかと感じております。

今回の地震で被災された方々のために、全国より多くの支援が寄せられ、能登町においても千件を超える義援金と多くの支援物資をいただ

き、人の心の温かきを感じるとともに、感謝せずには居られませんでした。

この心温かいありがたさはとても貴重な経験であり、その後の復旧作業だけでなく、中越沖地震などの震災災害への職員派遣などにも生かされているものと考えます。

それと、地震の災害において風評被害というの大きいものがあると痛感いたしました。その風評被害の対策において、ソフト面の復興を試みたので少し紹介したいと思います。

まずは「元気がいい能登町 あなたの真心ありがとう」というステッカーを手作りで作成し、企業や学校にもお願ひして郵便物、会議資料、車両等に貼り付け、町内外に向けて地震復興に元気づけようという姿勢と、全国からの心温かい支援に対する感謝の気持ちを少しでもアピール出来ればと試みたものでした。

また、地元県立青柳高校にお願ひし、修学旅行先の長崎県にて地震復興のPRチラシを、高校生の手によって配布活動を実施してもらい、地震復興アピールに役立ちました。

地震復興のためにはこれらソフト面の対策も非常に重要なことを再認識させられ、このような施策が風評被害に対して十分な成果があったとは言えませんが、知恵を何とかならなければならないと考えます。これは難しいと痛感いたしました。

これらの教訓を生かし、日頃より災害に対する準備はおこなって、万全の準備を心がけ、町民が安心して暮らせる町づくりを目指していかなければならないと考えます。

最後に今回の能登半島地震により被災された方々に改めてお見舞い申し上げます、一日も早い復興を心から願ひするとともに、心遣いしていただいた方々に感謝申し上げます、私の体験記といたします。

能登半島地震震災体験手記

奥能登広域圏事務組合消防本部輔員消防職 国永 剛

平成19年3月25日8時30分頃から当日の勤務に就き始業点検等終了後、車庫清掃を行うための庁内すべての車両を、庁舎向の三角洲駐車場に移動し清掃を開始する。

車庫清掃終了後、車両移動のため玄関前の歩道で、突然突き上げるように上り左右に激しく揺れ、今まで体験したことのない揺れを感じ、揺れがおさまるまで何もできず立っているのがやっとなった。揺れの最中、目に入ったのは庁舎玄関ポーチと、犬走りの段差が大きく上下動し、庁舎が浮き上がるのと同時に犬走りが下がり、建物と地面に大きな段差ができた。その後、すぐに庁舎の横揺れが始まり、揺れのおさまるのを待って庁舎両側に流れる風車川、河原田川の対岸風車地区、河井地区に車両を移動する。移動中、橋と道路のつなぎ目には大きな段差ができ、走行に支障をきたす状態である。

移動後すぐに、河井町地区内において「木造倒壊建物に1人が生き埋めになっている」との119番通報により、救助工作車3人と北郷約1km先の現場へ向かうが、途中市街地の雰囲気がいっつも違い静まりかえり、車両、住民の往来等もなく奇妙な空気を感しながら現場到着する。

現場は、朝市通りのはずれに位置し、付近に多数の観光客らしき人が目に付くと共に、建物1、2階部分が押しつぶされ2階屋根が道路にはみ出し、倒壊した建物横の道路上に横たわる年配の女性1人と、付き添い1人の女性が確認でき、付近の住民で救出した女性であること確認し、救助隊に引き継ぐ。引き継ぎ中、同河井地区約250m離れた場所では倒壊建物の下敷きになっている」と、さらに救助要請指令を受け現場へ向かう。

倒壊建物は、木造2階建て瓦葺き、1、2階部分は押しつぶされ木材等の破片が道路上に散乱し、原形をとどめているのは屋根部分だけで、2階軒先は道路上から数十cmの高さに位置し、周囲には付近住民と思われる多数の人が立ちつくすのが認められる。

家族の情報をもとに、安否を確認するため倒壊建物上から大声で呼びかけるが最初返答はなく、何度かの呼びかけに僅かな応答があり、生き埋めによる場所の確認をするともに、発掘位置、除去木材等の集積位置の指示を行い、消防隊3人、救助隊員4人を増員し、さらに地元消防団

員10人の計20人による救出活動を開始する。

瓦礫の山と化した建物を、救助工作車積載のチェーンソー・鉄線カッター、ポンプ機を積載してきたチェーンソーを使用し木材等を切断するとともに、1つ、1つ手作業により取り除き、要救助者に接触、接触時救助者は梁と床の僅か30cmの間に身動き出来ず横たっていたが救助開始49分後、1階扉間に横たわる74歳の女性を救出した。要救助者は長時間生き埋めになっていたため体力はかなり消耗していたが、軽度の打撲のみで救出することができ、救助隊員に引き継ぎ準備中。

帰署すると当務、非番員の全員が出勤しており、通信係員が現場との情報連絡に当たっており、被害報告を行うと同時に「風車地区の住宅地排水路から、油の漏洩事故が発生しているため漏洩などの確認」の出動指令を受け現場へ向かう。通報者と合流し、流れている排水路の油痕を確認するとともに、上流約50mに家庭用屋外灯油タンク(90L)の配管亀裂を認め、バルブを閉めると同時に持ち主に事情を説明し、修理を依頼し状況を本部へ報告する。報告後は、風車地区倒壊建物の調査指示を受け、調査にあたること、至る所て建物の倒壊があり、生き埋め、けが人等の確認を行うが生き埋め、けが人等の情報もなく、倒壊建物当番者だけ一人悲願的なもにかかわらず一件の火災もなく、また倒壊による生き埋め等による作数も少なかったことが不幸中の幸いであり、も、火災と救助、救助活動が同時に発生した場合などは、はたして消防の機能を十分に発揮できなかったらう。

平成16年10月23日に発生した震度7の新潟県中越地震で、緊急援助隊石川県隊の参加救助4隊のうち、奥能登広域圏消防救助隊として新潟県へ派遣され、24日13時に長岡市に到着し、長岡市消防本部を中心に21日朝、計8人の救助隊を搬送したが、まさか自分が震度7の強い地震体験をするとは予想だにできなかったことであり、一度と経験したくないことだが、消防職員として中越地震の緊急援助隊としての参加、また能登半島地震震源地の当事者として、倒壊建物から要救助者の無事救出等、貴重な体験をしたと思う。

大災害を体験して

鶴島市消防団四副団長 四柳 末吉

地震発生時、私は仕事で親戚の住宅の天井張り替え工事をしていました。沖合いからドーンとものすごい音がしたかと思うと、まさまいい揺れに襲われました。最初は上へ大きく持ち上げられ、次に大きな横揺れがやってきました。私は足場の上に乗っており、一時は何も出来ずも動きませんでした。揺れが静まり、これは大変なことだと思っていた。負傷者は知り合いの人に病院へ搬送してもらい、私たちはテントの設置と公民館からいすを高台まで運びました。続いて各家庭のガスの元栓の閉鎖の確認、体の不自由な老人が家の中にいるから見に行ってくれたの依頼を受けて、現場に分団員を向かわせるなどしました。家の玄関で助けを待っていた車椅子のお年寄りには大変感謝されたことを報告を受けました。

翌26日早朝には、県内外より救助隊やポンプ車が集結しました。我々の分団は民生、まんだら村の道長案内を行い、住民の生消確認や消防、消火栓の点検にも動きました。引き続き、消防団は家庭用のブルーシート張りを行うことが決まりました。各分団の応援もあり、ブルーシート張りは無事完了しました。団長に、分団長として各分団も大変な時なので、あえて他の分団の依頼を拒否することは苦しい思いを伝えること、お互い困っている分団の応援をするのが我々消防団の使命でもあるとの言葉をいただき、胸が熱くなりました。そしてお前の所は全体的に地域より被害が大きいので、分団員に頑張つてくれるよう動員した言葉もいただきました。4月1日、大方の作業が完了し、消防団災害対策本部は解散しました。この間、遠く一時期は休んでくれたらした分団、毎日作業にあたられた各分団の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。本当に有り難うございました。

最後になりますが、この震災を通して思ったことは、災害は忘れた頃にやってくるという定説を捨て、災害はいつでもやってくるという決心に刻み、その対処法を日々こまめに身につけて、身を守る上で大切だと感じました。この地に生かされたボランティアの方々、行政機関、関係者各位には大きな力をもらいました。集まった分団員から、家を出ると同時に家が倒壊した、危機一髪だったという話も聞きました。私はこれからの分団の行動を何らかやるべきか

を団員に指示しました。まず、火災の発生に備え、ポンプ車を待機させ、いつでも出動できるようにしました。幸いにして火災の発生も人命救助の要請もありませんでした。次第に避難所に集まってくる人も多くになり、中には断水、断電などは足場の上に乗っており、一時は何も出来ずも動きませんでした。揺れが静まり、これは大変なことだと思っていた。負傷者は知り合いの人に病院へ搬送してもらい、私たちはテントの設置と各家庭のガスの元栓の閉鎖の確認、体の不自由な老人が家の中にいるから見に行ってくれたの依頼を受けて、現場に分団員を向かわせるなどしました。家の玄関で助けを待っていた車椅子のお年寄りには大変感謝されたことを報告を受けました。

翌26日早朝には、県内外より救助隊やポンプ車が集結しました。我々の分団は民生、まんだら村の道長案内を行い、住民の生消確認や消防、消火栓の点検にも動きました。引き続き、消防団は家庭用のブルーシート張りを行うことが決まりました。各分団の応援もあり、ブルーシート張りは無事完了しました。団長に、分団長として各分団も大変な時なので、あえて他の分団の依頼を拒否することは苦しい思いを伝えること、お互い困っている分団の応援をするのが我々消防団の使命でもあるとの言葉をいただき、胸が熱くなりました。そしてお前の所は全体的に地域より被害が大きいので、分団員に頑張つてくれるよう動員した言葉もいただきました。4月1日、大方の作業が完了し、消防団災害対策本部は解散しました。この間、遠く一時期は休んでくれたらした分団、毎日作業にあたられた各分団の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。本当に有り難うございました。

最後になりますが、この震災を通して思ったことは、災害は忘れた頃にやってくるという定説を捨て、災害はいつでもやってくるという決心に刻み、その対処法を日々こまめに身につけて、身を守る上で大切だと感じました。この地に生かされたボランティアの方々、行政機関、関係者各位には大きな力をもらいました。集まった分団員から、家を出ると同時に家が倒壊した、危機一髪だったという話も聞きました。私はこれからの分団の行動を何らかやるべきか

復興を願って

石川県警本部警備部機動隊小隊長 松村 圭

その地震と轟音は、機動隊での当直勤務に就いた直後、突然やって来ました。機動隊長以下自主参集員は一次部隊として輪島方面へ出動、私は連絡体制を整えた後、二次部隊の指揮官として穴水・門前方面へ出動しました。

能登有料道路は至る所で陥没し、緊急走行もままならない状態でした。そんな折、鳴り止まぬ無線の中、警備本部から我が部隊に指令が下りました。

「別所岳SA（サービシア）に観光バス3台が避難中。道の駅で七尾市職員と合流し、SAで孤立している乗客等140人の避難誘導にあたる。」

我々は直ちに有料道路を降りて市職員と合流、救出方法の検討を行い、「林道を使ってマイクロバスでSA直近の側道まで行き、孤立した乗客を順次バスタン輸送で避難救出する」という方針に決定しました。

時は午後3時を過ぎ、地震発生から5時間以上経過していました。体調を崩している高齢者や子供がいるかと思うと一刻の猶予もないと思い、直ちに活動を開始しました。

林道を通ってSA付道まで行くと、本線上の観光バス3台が確認できました。私は隊員を指揮し、一日散に手前のバスへ走り、車内に駆け込みました。

「助けが来たぞ」の声。乗客の皆さんの顔が一齐にパッと明るくなり、車内全体が安堵した空気に変わりました。

私は遠る気持ちを抑え、努めて穏やかに乗客の皆さんに声をかけました。

「警察です。遅くなってすみません。これから皆さんを役場までお送りします。小さなお子さんや高齢の方を優先し、順番にマイクロバスに乗って下さい。」

乗客の皆さんから、「ありがとう」「お願いします」と、言葉を掛けて頂きました。

幸い、体調を崩しているとの訴えは一人もなく、私も内心、胸を撫で下しました。乗客の皆さんは長時間、不安の中で過ごした

にもかかわらず、誰一人不平不満を口にせず態然と行動して下さり、遂に私の方がお礼を言いたい気持ちになりました。

こうして、観光客等137人全員に、中島高所まで無事、避難して頂きました。その後我々は旧門前町へ移動、住民の皆さんの安否確認にあたる後、深夜に中島地区の小字区に到着、体育館で仮眠を取りました。

午前4時、我々は全世帯の安否確認のために旧門前町下地区へ出発しました。道が液打つように陥没し、倒壊家屋が道を塞いでいる惨状に、言葉を失いました。

落胆する間もなく、「道下地区で全壊家屋内に人が取り残されているおそれあり。捜索、救助にあたる」との無線指令を受け、現場へ急行しました。

地元消防署、消防団と協力して倒壊家屋の屋根に登り、屋根瓦と屋根板を剥がし、中に人がいない事を確認、仕人の方も会え、無事を確認する事が出来たのです。

出動した隊員が、改めて日頃の訓練の大切さを強く感じました。私は、能登半島地震でのこれらの災害活動を通じて、「県民のために活動する」という任務の尊さを、身をもって実感しました。

被災された方々からの感謝の言葉の一つひとつや喜びの姿が、我々現場で活動する警官にとって、何にも勝る原動力であったことは間違いありません。

我々は、今回の災害活動で感じたこの思いを心の支えとし、今後も職務に励んでいきたいと思っています。

しかし、もう二度とこんな災害は起こって欲しくはありません。日頃の災害救助訓練や災害用装備を必要とする日があるまで、という願いは今も変わりません。

最後に、原警察職員一同、この地震で亡くなられた方とご遺族の皆様へ謹んでお悔やみを申し上げるとともに、被災地の日も早い復興を、心よりお祈り致します。

北陸電力の地震対応について

北陸電力株式会社七尾支社長 竹原利一

北陸電力では、供給区域内で震度6以上の地震が発生した場合、本店ならびに当該地震が発生した市・支社・所およびその他事業所は、自動的に非常体制に入り、すみやかに対策組織を設けずとも、従業員は呼集を待つことなく、あらかじめ定められた基準に基づき、原則として所属事業所に参集することになっていました。

平成19年3月25日9時42分に発生した能登半島地震においても、発生後直ちに本店に非常災害対策本部が設置され、10時37分、テレビ会議システムを利用して全店社を対象とした第一回非常災害対策本部会議を開催し、総本店長(社長)の指揮の下、被害状況の把握に努めながら全社的な応援体制を確立して、早期復旧に向け懸命の復旧活動を開始しました。

地震発生直後に発生した約16万戸の停電戸数は、地震発生後の10分後の9時52分には送変電供給支障が解消して配電設備被害による約1,000戸程度となり、18時15分には倒壊家屋等の7戸を除いて解消(26日16時50分すべて復旧)した。また、石川県が設置した応急仮設住宅には、電気温水器323台およびクッキングヒーター317台を無償貸与した。

地元支社として特に考慮したのは、①自治体災害対策本部への要員派遣②送電後の二次災害(火災)の防止③電気給湯器の配管不良対応であった。①については、災害復旧において地元自治体への情報提供が大切であるとの教訓を先輩から頂いていたからであり、②については、阪神・淡路大震災において屋内配線の絶縁不良による火災の発生や、送電後も配管不良により電気給湯器が使用できないという問題が指摘されていたからである。

震災の復旧・復興のボランティア活動に約1,500人(延べ)の社員が参加し、当社設備の復旧作業に約8,100人(延べ)の社員及び施工者が従事した。最終的には12月26日、門前・深根地区での道路復旧を待っての電柱建て替え工事をもって完了となった。比較的早期に復旧できたのは、住民の皆様の生活習慣、及び道路事情、並びに国・県、地元自治体との連携と指導力によるところが大きいと考えている。とりわけ復旧作業に支障となる火災の発生がなかったことは住民の皆様のお陰と感謝している。

能登半島地震からの教訓

西日本電信電話株式会社金沢支店設備部災害対策課長 榊 敏明

地震発生時は日曜日早朝で、私は金沢の自宅で家族と共にくつろいでいる時でした。普段感じる事のない大きな揺れに「あっ、やばいな」と強烈とした不安を感じた事が印象として残っています。火の元と実家、親戚の安否確認、幸い金沢周辺であったため棚から食器が飛び出す程度で済み、家屋被害、けが人などはありませんでした。

その後、通信設備への被害が大きくない事を願いながら、会社へ向かいました。日曜日早朝ということで、出動している社員はほとんどおらず、災害対策本部員及び復旧班員の参集の遅れが心配でしたが、ニュースなどで知った対策員や日ごろの情報連絡訓練の成果により、発生から30分で災害対策本部の設置ができました。災害対策本部の設置後、ただちに現地被災状況の確認としてNTT七尾及び金沢ビルより調査班が動きました。被災地に近いNTT七尾支店の社員の中には、自宅が被災したが、家族などの安否を確認すると、直ぐに会社に駆けつけ通信設備の点検・復旧に当たった社員もいました。

そのころの通信状況としては、全国からの見舞い電話などにより石川、富山エリアの電話が非常につながりにくい状態(輻射)となり、9時56分より、災害用伝言ダイヤル(171)、災害用ブロードバンド伝言板の運用開始、安否確認や集合場所の連絡手段などとしてサービス提供を開始しました。対策本部でも通信輻射や現地の混乱により情報収集がなかなか難しかった。特に輪島市周辺では、電柱の倒壊などにより電話が非常につながりにくい状態となっており、現地からの情報もなかなか入りにくかった。そのような状況の中、県庁災害対策本部及び輪島市役所災害対策本部へNTT社員を参加させていただくなどして情報収集に努め、重要通信確保としてポータブル衛星通信装置を当日中に、輪島市役所を含め3カ所(25回線)に設置しました。なお、衛星通信確保には、装置への電源提供が必要となり、災害対策員が昼夜監視のため車中泊など、その運用面での課題も新たに分かりました。

さらに翌日には、地域住民や避難住民への通

信手段として、集会所・避難所に特設公衆電話(無料)を37カ所(58回線)取り付けました。特設公衆電話の設置には、県庁及び各自治体との調整が必要であり、正確な情報の手手が重要となりました。通常であれば、かなり多くの時間を要するところですが、県庁、輪島市役所災害対策本部への参画などにより、早期の開通が出来たことは非常に良かったです。まだ寒い時期、夜中3、4時ごろまで屋外工事に携わるNTTグループ及び通信建設会社の社員には頭の下がる思いです。また携帯電話が普及した中、避難している方から感謝のお言葉を頂いたことは忘れられません。

能登半島地震では、災害対策用伝言ダイヤルは3月28日から30日までの5日間合計37,734件の利用を頂きました。石川県外から石川県の電話は、最大で平常時の24.6倍に達しており、災害用伝言ダイヤル、災害用ブロードバンド伝言板の重要性を改めて感じました。また、被災地の自治体通信、避難所への通信確保(特設公衆電話設置)など、被災直後における早期の通信確保は、NTTグループ内の連携のみではなく、県庁をはじめ各自治体との連携が不可欠であることを再認識し、今後の有事の際での対応を取って行きたいです。

今回発生した能登半島地震は、通信サービスの安定的な提供を使命と考える私たちに災害などにおける通信サービスの確保の試練を与えられたものと思います。NTT北陸グループ、通信建設会社社員らが一丸となり、昼夜を連日3月25日から30日までの短期間で、被災した通信設備の復旧や被災したお客様の早期通信サービスの復旧を達成できたことは、通信を守る私たちの大きな自信になりました。

また、地震より1年の経過を機に、NTT北陸グループ社員等の危機管理意識を高めるために、帝京大学教授方俊先生による講演「新しい危機への対応」など防災危機管理セミナーを平成20年3月19日に行っています。「災害は忘れた頃にやってくる」—ありふれた言葉ですが、能登半島地震の大きな教訓として、今後も「いつでもお客様に安心して頂ける通信サービスの提供」を目指していきたいです。

被災住宅への支援活動

財団法人石川県被災住宅総合センター理事長 照田繁隆

地震の直後、県からの応急危険度判定士の派遣要請に応じて、関係団体が協力し28日29日の両日約50人を現地に出したそのあとすぐ、今度は被災地(穴水町)で住宅修繕を実施しようという動きがありました。当センターは従来から「いしわき住宅相談・住情報ネットワーク」の事務局として、県民からの相談に対応していたので、直ちに各構成団体に連絡して動員態勢をとりました。各団体に対し2〜3人の派遣を依頼するとともに会場の手配、住民への広報の依頼、ボランティア保険に加入するなどの準備、相談員の名札や受付簿、相談内容の記録票の作製、筆記用具など事務用品の準備、さらに弁当とお茶の手配など細かな作業をすくなくこなしました。また相談態勢は、建築上、木造に詳しい大工さん、不動産関係、融資関係、契約関係など日頃のネットワークを利用し、住宅に関する様々な相談に対応できる態勢を整えました。

震災発症後の土曜日の3月31日、まず穴水町役場の地域情報センターで相談を受け付けました。朝10時の開場前から廊下は相談に来られた町民でいっぱいになり時間を待たずに開始しました。来られた皆さんの多くはお年寄りで、被害を受けた住宅に大きな不安を抱えておいて、とにかく被害を受けた住宅を見てほしい、応急判定で赤や黄の紙を貼られたが、修繕が可能なのか除却するしかないのか現地へ来てほしい、あるいは応急の安全対策を教えてくださいという相談がほとんどでした。しかし、現地へ行ってはまだ家具が散乱しており、床下・二階梁・小屋裏などが見られない建物が多く、それでも作業員にヘルメット姿で身の危険を感じながらもできるだけの調査をしました。この日は50人、翌日曜日は54人の相談者がありました。

この経験に基づき、関係団体で協議した結果、輪島・門前地区でも同様の支援が必要だろうと、次の週末から4月いっぱい各土・日曜日(日曜日に輪島市役所、同門前支所を加えた3箇所)で相談会を開催しました。大勢の方が相談に来られ

ましたが、4月末には各会場とも一日の相談者が千人未満となり、当面の役割は終わったと判断して終了しました。結果、送り出した相談員は延べ380人、来場した相談者は受付された方だけで約548組にのぼりました。この相談会がどれだけ被災民の心支えに立てたかはわかりませんが、被災後の混乱した状況の中で、私達もこのような状態の住宅を見るのは初めてなので正直に自分の判断や意見をお話するだけでしたが「修繕可能と聞いて安心した」「専門家が見てダメなしかたがない除却する決心がついた」などの話を聞くとも多少なりともお役に立てたのではないかと思います。

その後、被災地では本格的な再建・修復が始まり、8月には県が復興基金を設立し、被災者に対する住宅再建支援が開始されました。この動きにあわせて、当センターは現地での相談会を再開しました。今度は住宅を再建しようという人のための設計の相談や修繕・増改築・耐震工事に関するアドバイスの場を中心としました。

相談内容も具体的に再建住宅の設計や資金計画、修繕の工法などに関する相談などがほとんどです。また、ふるさとモデル住宅も完成し多くの人が見学に来られると同時に相談をされております。今後は、仮設住宅の期限いっぱいまで、長期間ですが、能登の復興のため少しでもお役に立てるよう、この活動を続けていきたいと思っております。

最後に、ボランティアとしてこの活動に参加いただいた関係団体の皆様に感謝申し上げます。

- 参加団体
- (社)石川県建築士会
 - (社)石川県建築士事務所協会
 - (社)日本建築業協会北陸支部
 - (社)石川県建築業協会連合会
 - (社)石川県宅地建物取引業協会
 - (独)住宅金融支援機構
 - 石川県消防生活支援センター
 - (財)石川県建築住宅総合センター

地元建築士会の取り組みについて

社団法人石川県建築士会輪島支部長 高出正次

地震発生当日は日曜日の10時近くということで在宅者も多く、被災と条件的にも救われ、輪島市内に限っては全球330棟、大規模半壊380棟、その他450棟の住家、非住家の被害があり、人的には死亡1人、重軽傷者90人の被害がありました。何分大災がなかったのが何より幸いで、二次災害を免れたと思います。

応急判定の結果について
輪島市調査数5653件のうち「危険」865件中、木造850件、RC 8件、S造7件「要注意」930件中、木造905件、RC 7件、S造18件。延焼した土数158人の方が79班に分かれて調査を行ったそうです。

周辺状況
地震時の自宅や事務所被害は最小限で、木造家屋の一部損壊で済んだのはほとんとしていますが、一時錯乱状態になりました。通りを歩いてみると、木造家屋には全壊、大規模半壊の家屋がかなり目立ち、非木造のビル等の壊面クラックなども外観から目視されました。通りはビヤガラスが散乱し、道路には割れ目や段などがまばり困難などの所が多数見受けられました。

地元建築士会の取り組み
県内外からの関係者より見舞いや被害の問い合わせが殺到しパニック状態でした。冷静になり考えますと、まず災害に対しては住む場所の確保が大切と思われ、罹災された市民の住宅、その他家屋の損壊について建築の相談窓口を設けることとし、建築士会会員を招集しましたが役目をはじめ会員の多数が何らかの被害を受けているので対応に苦労しました。何分初めの経験、何からどうしてよいかと試行錯誤でした。それでもどうにか関係者の方々のアドバイスを受け、市役所ロビーの隣で受け付け窓口ができました。

1. 相談窓口の担当者の割り振り
2. 相談カード用紙、事務用品の準備

3. 仮設電話の準備
4. 暖房用ストーブの準備
5. 関連ボランティアの受け付け
6. 現地調査担当との打ち合わせ

等を手配し、なんとか相談窓口を立ち上げるのが出来た。遅ればせながら4月2日よりスタートしたわけですが、初日はPR不足で相談者は少なかったのですが、2日目より28件、3日目66件、4日目118件、5日目122件、6日目111件、7日目21件、8日目32件、9日目14件、10日目14件、11日目17件、12日目20件、30日目15件、14日目6件、15日目7件、16日目5件、17日目5件、18日目以降全体で20件となり1日1件の件数が少なくなったので土日に限り、相談を受けることにしました。

相談受け付けの前半は、点検調査担当者との調査日の調整で大変苦労しましたが、約300件の申し込みに対して関連団体ボランティアの協力を得て、アドバイスを終えることができました。尚、建築組合の会員と製材組合の方々のボランティアのおかげで仮設泊り入れ、サポートの応急措置をほどし、大変喜ばれた家屋もありました。ただ地元では、深部産業や酒の醸造元が多くあり、経過年数のため土蔵が数多くあった土蔵に関しては時間をかけ調査が必要との指摘もありました。

今後の課題

・がんばる輪島、を合い言葉に地元の建築士会として頑張っていきたい。最後に建築関連のボランティアで協力して下さった方々、行政機関の方々に感謝します。今後も復興した能登半島を目指して頑張りたいと思います。

派遣要請を受けた緊急時の技術指導についての雑感

独立行政法人土木研究所土砂管理研究グループ 地すべりチーム上席研究員 藤沢和範

能登半島地震発生後、派遣要請を受けて2回の現地調査を実施しました。1回目は、3月27日に高山空港へ移動して翌28日に輪島市野町町々々木八世乃洞門、輪島市深見町の深見地すべり防止区域、輪島市前町の奥能登傾斜地崩壊防止区域の3カ所を調査しました。2回目は、4月6日にへりによる上空からの広域調査と、その後、輪島市前町深見の急傾斜地、輪島市前町深見の地すべり、輪島市大野町の地すべりの3カ所を現地調査しました。今でも印象に残っているのは、急峻な海岸線を走る国道に大きな岩塊が落ちて八世乃洞門を破壊した厳しい現場の様子と地すべりによる土砂崩落の危険性から、市道を通り止めた深見地すべりのことでした。そのため、その後4月21日、22日に調査及び応急対策等の進捗状況を確認しました。

八世乃洞門を被災させた岩盤崩落の発生源は直立した岩盤斜面であり、高いところは比高差は100m程度あります。岩盤には多数の開口した節理面が見られることから今後とも岩盤崩落が継続することが予想されます。景勝地でもあることから現道復旧の要望の強いことが予想されましたが、道路利用者の安全と岩盤崩落による災害発生時の道路管理者の責任を考えるとトンネルによって岩盤崩落の危険がある地域を避けるのが望ましいと感じました。道路の復旧方法については専門委員会が設置され、土研からは別途、地質の専門家委員として参加したため、私は経過確認のためにその後数回現地を訪問したのみです。しかし、本件のように岩盤崩落の危険がある道路斜面は全国に多数あるため、現在どのような調査・対策・監視等を行っているのか、さらには今後岩盤崩落が発生した場合に道路の復旧方法をどのように考えるのか、それぞれ斜面についてあらかじめ整理しておく必要があるように思います。

もう一つの事例は深見の地すべりです。この地すべりは海岸線を走る市道の斜面の一部で発生したもので、私は地震発生から10日以上経

過した4月6日に現地に向かいました。現地に至る市道には崩落した土砂や岩塊が手付かずの状態に残されており、地すべり発生場所のほかに道方より通行止めになっていました。そのため林道を経由して現地に到着しましたが、現地を見たところ、斜面上の尾根付近には落差10m程度の滑り崖が現れ、地すべりの末端と思われる斜面の中腹からは崩落した土塊が市道を乗り越え海まで達していました。斜面中腹からの小崩落の発生は市道からも時折確認され、また地すべり地内に立ち入って調査を行ったときの状況からも地すべりの動きが停止していないことを実感しました。そのため亀裂を挟んだ位置に地盤伸縮計の設置と、路面の土砂等を除去した後も市道の交通規制の継続を助言しました。4月21日に現地を再び訪れたときには、道路上の土砂は撤去され、土砂溜めボックスを確保し土塊が斜面直下に作られていました。これによって落石程度の小規模な崩壊には安全性を確保できたもので、それ以上の規模の崩落には対応できないこと及び計測結果から地すべりの動きが継続しているために交通規制は引き続き実施するように助言しました。この間には深見の集落の住民30世帯以上が長い避難生活を強いられていたため、通行止め解除の機運が高まりを見ている時期がありました。

私の助言に基づいて輪島市による通行止めが行われていたことから、その助言の内容に見直しを求めた問い合わせが一時集中したことがありました。結果的には、市道が危険にさらされていることに変化がないことを繰り返し説明し、理解していただくまで通行規制は継続することになりましたが、専門家からの緊急時の技術指導のあり方・心構えについて改めて考える機会になりました。立場上、初めて目にする現場で、直ちに調査・計画の方向性や対策の選定意見等を求められることも少なからずありますが、今回の経験を生かして今後も適切な助言が出来るように努力したいと思います。

能登半島地震後の緊急山地災害調査に参加して

独立行政法人森林総合研究所 土壌保全研究部城山研究室長 落合博貴

地震が発生した日、林野庁治山課山地災害対策室よりつくば市の自宅に連絡が入り、能登半島北部を中心に山地崩壊が発生しているとの情報があり、現地の体制が整い次第、災害の実態把握のための現地調査を行うよう要請された。翌日26日、林野庁と石川県、森林総合研究所の間で日程を調整し、27日朝の飛行機で林野庁山地災害対策室三谷課長補佐と伴に羽田から能登空港へ乗ることになった。事前の準備として林野庁より送られた資料とともに、所蔵の能登半島地質図に目を通した。

空港に着き、空港ビル内の奥能登森林総合事務所において、現地の状況について説明を受けた後、県森林水産部担当職員と伴に公用車に乗って現地に向かった。最初に訪れたのは、門前町中野塚地区に発生した崩壊地で、麓を走る県道36号線からも南東向きに山腹急斜面に発生した崩壊跡が見えた。事前の情報ではここで土石流が発生したとのことであったが、人家脇を流れる渓流に設置した治山ダムで土砂が停止し下流への流出を防いでいた。渓流内には巨礫・流木とともに水気を含んだ土砂が厚く堆積しており、その少し上流の狭く部では青味を帯びた土砂が崩壊跡が見え、通常の豪雨時に発生する土石流とは異なる印象であった。我々は渓流脇の赤道を上がり、崩壊土砂と伴に発生した多数のスキ・ヒノキの倒木を落り抜けて崩壊斜面を全観できる箇所を探した。人の背より大きな巨礫の上に立つと、傾斜40度、幅約50メートル程の植生のはぎ取られた急な斜面が目前に広がっていた。崩壊地の中腹からは地下水が浸みだして下流に注いでいるものの、斜面の上部は比較的乾燥しているようであり、上流流の起源となるような多量の水流もなく奇妙に思った。その後、現場を下って麓のお宅で当日の様子を伺うと、崩壊発生後2日間にわたって渓流を移動する土砂により樹木が折れるバキバキという音が続いたとのことであり、土砂の移動速度がかなりゆっくりしたものであ

たことが伺われた。すなわち、通常の土石流のような水を多く含んだ土砂が急速に流下する現象ではなく、地震により崩壊した巨礫を含む土砂が水を含んだ渓流内をゆっくりと滑った現象であり、いわゆる高速で流下する通常の土石流ではないと判断した。

その後、尺が池地区、腰細地区の崩壊地を調査、翌日、輪島市街地へ向かい熊野町、袖ヶ浜地区を調査し、さらに猿山山道を守る佐比野林道の被災状況を調査して帰途についた。概況調査の印象では、同様な急斜面を呈する斜面の崩壊が目についたため、特定の地質の場所に崩壊が多く発生したのではないかと印象であった。そこで地質図と崩壊場所を詳細に比較するとともに、数回にわたり森林総合研究所のメンバーと現地調査を行った結果、能登半島の地質図における石炭安山岩質凝灰岩層（K4）に相当する地層において地形が急峻を呈しており、そこに崩壊が多く発生したと推定された。崩壊箇所は、傾斜変換部（法研）の凸地形の急斜面であり、いわゆる「地形効果」による地震動の増幅によって、平地に比べて地震力が働いたため崩壊したものと推定され、尺が池地区、熊野町地区、袖ヶ浜地区の崩壊もこれに類したメカニズムによる急峻の崩壊と考えられた。

また、当初土石流といわれた土砂の移動も、その後の現地調査により水を多く含んだ粘土層に崩壊した巨礫が急激に乗り上げたため、一時的に粘土の摩耗抵抗が小さくなって巨礫が渓流内を緩慢に滑って移動したものと判断した。こうした巨礫の移動現象は数少ないものの、地震とは無関係の別の落石現場における事例として報告されている。

最後に、今回の地震で発生した山地崩壊は、特定の地域に発生していることが特徴的であり、今後の地震時の対策のための材料となすと考えられたため、林野庁を通じて行政部に報告を行った。

能登半島地震から学んだこと

元能登北部医師会長 山岸 満

本年1月26日未明、突然の強い揺れが輪島市を襲った。震度5弱の地震、飛び起きた私は、テレビの臨時ニュースで被害のないことを知り驚かされた。同時に、頭の中で昨年の大規模地震の記憶が呼び覚まされてきた。

昨年3月11日曜、能登ゴルフ倶楽部で久しぶりのゴルフに熱中していた。午前9時42分、突然の足元の大きな揺れとそれに対応した松木の左右の作復運動。生まれてはじめて目にする異様な光景。数分後、私の携帯にもたらされた妻からの第一報。続いてテレビで映し出された妻の変わり果てた姿。言葉もなかった。能登という遊樂地に発生した大地震がたらした未曾有の災厄。その中で体験で得たいくつかの教訓を報告したい。

1. 震源地に近い私の診療所は家具などの被害は大きかったが、有休診療所としてのマニュアル通り、自宅の被災にもかかわらず職員が速やかに休日出勤してくれた。その結果、診療はできる状態になっており、当日12人の緊急患者を受け入れることができた。
2. 当日の夜から、翌日の朝にかけて、実に多くの医療チームが門前に入られた。この多くの災害避難者は約1700人。多数の医療関係者、報道機関が集まったために駐車場は満杯となり、多少の混乱があった。県医師会から小森会長の全面的支援を受け取り、同時に避難者の医療救護班のリーダーが私が務めることに決定した。断続的に開かれた協議で今後の活動方針が速やかに決定したことで、混乱も最小限に留まった。
3. 3月27日より、多岐の医療活動が開始された。避難住民に対する支援が多角的な視点で構築されたことは特筆に値する。「心のケアチーム」の参加、北陸各地から馳せ参じてくださった保健師、看護師の方の扶

夜を分かちあふる介護。その活躍にはただ頭が下がった。医療チームによる身体管理と「心のケアチーム」による心のサポートと車の両輪のようによく噛み合っていた。このような体制が可能になったのも現地に根付いて行政との連携を取っていただいた小森会長によるところが大きい。

4. 1日2回のミーティングには50人を超える方が参加し、それぞれの立場から貴重な意見をいただいた。歯科医師会からは口腔管理、誤嚥防止、兼助師医師会からは服薬管理、NPO法人の方から避難所におけるプライバシーの確保（女性の着、トイレetc.）、さらに東海薬業、リハビリ、柔道整復師会、また、不活発消防士、深部静脈血栓防止についても早期より取り組みが開始された。

5. 無論、すべてが上手く噛み合ったわけではない。ノロウイルスに対する感染防止はうまくいかず、感染症胃腸炎が一時的に増加する経過を辿った。ここでも医療従事者による感染対策、保健師、看護師による献身的活躍により一人の犠牲者も出さずとなく、感染も終息に向かった。多くの善言と知恵と協力が如何に大切かを痛感した日々だった。

今、門前では倒壊した家の再建と共に、さまざまな町再生の取り組みが進んでいる。高齢者が多い地域のため仮設住宅から全ての人々が解放されるにはもう少し、時間がかかるであろう。「心のケアハウス」は今も立派に住民をサポートし続けている。住民の笑顔が町に溢れる日もきっとそう遠くはない。一人の医師として、生まれ育てきたこの土地をこれからも守り続けていきます。多くの皆様御支援御協力に感謝いたします。

公立能登総合病院での地震体験記

公立能登総合病院 事業管理者 川口 光平

忘れもしない、それは平成19年3月25日の朝であった。食事が終わって、机で自宅のコンピュータを操作していた時、突然揺れが来た。以前にも小さな揺れは経験していたので、すぐに取まらなうと思っていたが、今回は違っていた。揺れは大きくなり恐怖を覚えた。とっさに女友を呼んで、机の下に避難した。数分して揺れが取まってから、温風ヒーター、ガスレンジ、給湯装置などを点検したが、温風ヒーターは自動消火になっていた。これは大地震だ。病院内の被害は？の思いが湧き、不安そうな女友に落ち着いて行動するように諭し、車で病院に向かった。

午前10時過ぎに病院救急入り口に入ると、医師2人に会い、一応、病院内では患者に大きな被害はなさそうだと聞いた。地震発生が午前9時42分であったこともあり、休日ではあったが、回診に来ていた先生方が初期活動をしてきている状況であった。即座に災害対策本部の設置をこれまでにトリアージ訓練などを行っていた経験から、比較的スムーズに会議室に設置するのことが出来た。10時25分に災害対策本部の設置を宣言し、50人はど集ったスタッフに被害状況の把握をするために20分間で各部署を回っていただくように指示した。被害のうち受水層の破損による水漏れ(水がなくなる可能性がある)、エレベーターの停止、検査室サーバーの故障、カルテ保管庫の故障が大きな問題であった。また、救急外来にも外傷患者が来ているとの情報もあった。この時点で最も大きな問題は、受水層の問題であったが、3分の1は貯められる程度の被害で、受水して屋上にくみ上げれば大丈夫と判断した。一方で、エレベーター停止状態で、患者の軽食をどのようにして運ぶのかであった。一応、入海戦術で運ぶことに決定して臨んだ。夜明け明けの看護部をはじめ、病院の危機的状況を察知してわざわざ出て来てく

れたスタッフが階段を並んで手渡しで食事を運ぶことが出来た。地震で自分の家が散らばっているにも関わらず、患者のため、病院のためにと集ってくれたスタッフは徐々に集り、約200人を超えていた。平成17年から病院経営改革に取り組んでいる遠上で地震であったが、これだけ病院のことを思ってくれるスタッフが、いれば、病院経営改革も出来ること確信させるだけの一致団結力であった。14時から再度の被害状況把握の作業を行い、15時には幹部4人で病院内を巡回し、明日の診療を行うかどうかを協議した。医療情報システムは異常なく、カルテ保管庫は修理に来てもらい、修理できない場合は、電子上の履歴でも診療できると判断して、翌3月26日は診療をすることに決した。

幹部を残し、スタッフには関連部署の地震で散逸した物品を整理していただくこととし、これが終わったら帰っていただくようにした。災害対策本部には石川県医療対策課、警察、新聞社などからの被害状況、救急患者の問い合わせが頻発し、対応したが、19時30分からは本部長が交代で対応することとした。救急患者の報告が主なものであったが、38人受診し、4人の入院であった。翌3月26日7時にはカルテ保管庫は全部復帰できたとの報告で、診療は可能な状況となり、平常通りの診療にこぎつけることが出来た。

今回の体験から様々なことを学んだが、このような災害に対しては、日頃の訓練こそ適切な対応に導くものと強く感じた。トリアージ訓練は毎年行ってきたが、この訓練から得たものは大きかったように感じている。また、職員は病院への熱い思いを感じた時、これこそ災害において最も大切なことではないかと感じた。職員が心から思いを寄せられる病院にしたいと考えていた。一応、入海戦術で運ぶことに決定して臨んだ。夜明け明けの看護部をはじめ、病院の危機的状況を察知してわざわざ出て来てく

まだ見ぬ災害に備えて

金沢赤十字病院整形外科 堀本 孝士

能登半島地震の救護活動を行った経験から、初動対応及び災害応急対策についてどのような準備が必要か、思うことを述べたいと思います。災害が発生したら「空振り覚悟」で、できるだけ早く出動すること、とマニュアルには書いてあります。現場で使用する医療用物品の準備はあらかじめできているので、いかに早く派遣メンバーを集め、出発の命令が下るかが問題だと思われすが、今回の初動対応はやや緩慢であったのではないかと考えられます。発生後、私は一度病院に行き病棟回診を行い帰宅しましたが、その後病院から連絡が入り、召集されました。それから派遣命令が下り、現場に着いたのは、発生約6時間後でした。出来るだけ早急に医療活動を開始するため、また、赤十字病院という性格上とこよりも真っ先に現場に駆けつける必要があると思われましたが、すでに他の病院のチームが到着しており、医療活動が行われていました。幸い多数の重傷者がでるといった事も無く、ある意味では「空振り」に終わったかも知れません。しかし、今後の教訓としてできるだけ機敏な初動対応がなされることを希望します。Phase0(災害が起ってから系統的救護機関が開始されるまでの数時間)が限りなく短縮されることが最も重要だからです。

現場での救護活動を行う際、最も感じたのは情報の混乱です。特に発生当日は、道路状況や被害状況が全くといっていいほどわかりませんでした。現場でも混乱がみられ、医療チームが鉢合わせする場面もありました。情報を収集・分析し統一する機関の存在が必要だと思われま

した。2日からはかなり情報の整理がなされていたようです。また、情報収集の手段として、携帯電話はつながらないことが多くあり役に立たないで、衛星電話が必須だと思われました。

現場での救護活動を行う際、必要な物品が足りないと感じました。被災者を診察する場所がないということ。今回のように建造物に比較的損傷が少ない場合は屋内で診療が可能ですが、仮設テントは必要だと思われました。患者のプライバシーを守る意味でも重要ですが、救護スタッフのための寝袋や毛布なども絶対に必要です。不眠不休で救護に当たるわけですから。

災害は、何の前ぶれもなく突然起こるものです。そのため、日頃から、それに対応できるための準備が最も重要です。また、災害の発生初期から経過をおいて、必要な救護の内容が変化していきます。医療の面では、まずトリアージを行います。外科的治療から内科的治療、メンタルヘルスケアなど、さらには感染対策など衛生面での対応が必要となります。これらのことを詳しく学んでおく必要があります。

先日起こった中国四川省の巨大地震の映像を見ていると、速くの出来事とはいえ、痛く思われることがたびたびあります。もっと早く専門チームが派遣されていたらと、二次災害を防ぐ方法が無かったかなど、改善されるべきことはたくさんあります。

明日、また、同様の災害がもっと近く起こるかもしれません。少しでも被害が少なくてすむように、今回のことを教訓として、勉強していきたいと思ひます。

能登半島地震における当院の対応

能登半島地震 院長 品川 誠

を救急車両で金沢市内または七尾市内の病院へ緊急搬送いたしました。能登有料道路が開閉されており道路状態の悪い区路での搬送には患者さんの安否が保てず、さらに通常以上の時間を要するたため積極的に空路を利用する必要がありました。

地域医療に変わる波が押し寄せている昨今、当院だけでは地域医療を完結することはほぼ不可能であり、中核都市の総合医療機関との密接な連携により適切な医療を提供することが必要と考えます。へり搬送の円滑な利用には、迅速な連絡形態、情報交換が必要であり、県および関係機関と協議していきたいと思っております。

当院も約7名の職員が被災いたしました。聞き取り調査を行ったところ、頭痛、めまいを訴える職員は地震後一週間の時点で25%でしたが、半年後には半数に減少しておりました。しかし、不眠や不安感、落ち着かないなどの症状を認められた職員は直後は70%を超え、半年後も半数に認められておりました。集約力低下による診療現場での不注意、うっかりミスによる医療事故の発生が懸念されましたが、各部署でミーティングを行い互いに注意しあひ緊張感をもって業務に臨みました。幸いに医療事故の発生はなく、地震後のヒヤリハット報告の増加も認められませんでした。

また、石川県看護協会のご支援により、3月27日(火)から4月13日(金)の間、交代で23人の災害支援ナースを派遣していただき、救急外来や中央処置室、手術室業務に協力していただきました。おかげで、全壊など被災した看護部は交代で休むことができました。他の医療機関からの応援は精神的な支えにもなりました。

能登半島地震を経験して、ライフラインの確保がいかに重要かを再認識させられました。災害時にはマンパワーの確保が必要で、日頃から、自分たちが地域の医療を守るという強い信念を持ち、全職員が同じベクトルを持つことで、多くの職員が自主的に登院してくれました。しかし、先の見えない中、自分たちだけで乗り切ることには不可能であり、他の医療機関とのネットワークや支援の受け入れ態勢の構築など連携強化を日ごろから取り組む必要があると実感いたしました。

地震の発生で、もっとも深刻な事態に陥ったのは遠送治療を受けている患者さんです。当院の透析室はベッド数25床で78人の患者さんに治療を行っております。地震翌日、断水と給水の遅れで受水槽が枯渇状態となったため、遠送1時間+ECUM 3時間に急遽変更となりましたが、このままでは患者さんの生命の危険が及ぶと判断し、石川県立中央病院への移送を決定いたしました。明日(地震の翌々日)の遠送予定の患者さん30人の移送が決定し、急遽、午後に出発することになりました。しかし連絡が思うように進まず、昼頃になってやっと全員との連絡がとれました。また、患者さんのこれまでの診療情報を移送先の医療機関に提供するための作業も遠送治療、電話連絡と平行して行われました。

移送については、自衛隊に対し当時輪島上空を旋回していた大型ヘリの使用を要請しましたが断られて、このためバスを使用することとなり患者さんは約4時間かけ石川県立中央病院に着いたました。能登有料道路が使用不能のため、地震で凸凹になった国道をバスで揺られながら、呼吸状態、全身状態の不良な方の看護をつつ、全身の硬縮をきたし座位になれない方を抱きかかすための患者苦悶の道中でした。次の日には35人の患者さんを移送いたしました。遠送患者を受け入れていただいた医療機関は入院8施設、外来通院1施設でした。

移送先の医療機関により必要とされるデータが異なり、78人の患者情報を短時間で作成することが極めて困難な状況にありました。災害時の必要情報の統一フォーマットを検討していただき、平時より情報出力できる状態に管理していくことが課題と考えます。

また、遠送室と患者さんとのコミュニケーション不足も問題と考へております。地震当日、患者さんからの遠送治療に賛成しないかについての問い合わせは2件だけでした。また、遠送スタッフから患者さんへの安否確認は行われませんでした。遠送不能状態は患者さんの生命を脅かすものであり、相互の連絡体制の確立は急務と考えております。

能登半島地震に関連した熱傷や骨折以外に、地震発生後2週間間に7人の患者さんが脳心血管系イベントを発生しました。このうち2人が死亡されています。3人をヘリコプターで、2人

能登半島地震「救護班」ボランティア活動を体験して

珠洲市総合病院看護科看護師長 天満 富子

地震発生後、石川県看護協会・能登北部保健センターからボランティアの要請があり、第1陣として珠洲市は看護師長3人、技師1人と決定し、3月27日(地震発生後3日目)～3月29日までボランティア活動に参加しました。被災直後にはとにかく被災者の不安が強いと思うので、少しでも体と心をケアしたいという気持ちと、近隣地域のことなので余震が怖い不安だけれど、行かなくてはという思いでした。日頃から現場まで約2時間弱の道のりでしたが、一瞬にしてすべてを失った家々や落石や道路の陥没・隆起があり大変なことになっていました。私達は17避難所あるうちの仁岸地区の剣地公民館と国民宿舎つぎぎ荘の担当になりました。今まで大きな災害に逢う経験もなく過ごしているものにとって、災害看護支援機構の里田裕子氏と山崎達枝氏との出会いは貴重なもので、情報収集・発信の方法や、支援活動の方法を学びました。健康相談票を元に情報収集し、バイタルサイン測定を行い被災者の健康調査を行いました。また衛生・防疫に関する感染予防策について避難所で生活に共にすることで援助していただきました。夜中に余震があると赤ちゃんのようにくっ付いて夜中高齢の女性や赤ちゃんと日常生活が崩壊し、住み慣れた土地を離れる方々のそばで横になり話しを聞きまし

た。家庭訪問や安否確認は毎回同じ担当者が2人で行くように配慮しました。要援助者や慢性疾患患者の継続的援助の中で、一人が発熱状態となり入院されることになりました。レクレーションにお手玉を用いてお互いにキャッチしました。高年齢の女性の表情が少しだけ和み、子供が声をあげて笑い、生き生きとした表情を見せてくれたことが嬉しかったです。活動中に県の視察や石川県看護大学長さんの訪問は大変強く感じました。またボランティア開始前後のミーティングは一致団結して活動したいという現れのように思いました。活動期間中という期間なので、その後は変化していくものと思いますが、人の出合いを大切にしたいという方々への安定を願っていただけたいと思ひました。

その後、当院では災害看護チームを立ち上げ、マニュアルの見直しや取り組みむき課題であった組織的な動きについても検討され、災害に備えた訓練を行っています。あてはならないことですが、もしもの備えになるようにしていきたいと思ひます。そして今後の災害支援ナースの活動に活かされています。災害に遭われた被災者の皆様の復興を心から祈っています。

能登半島地震体験記録

穴水町ボランティア連絡協議会長 松田 栄四郎

突然、震度6強という恐怖の地震を体験した。そのとき私は穴水町陸上競技場でグラウンドゴルフ大会に参加していた。参加者は160人程で高齢者が多かった。スタートして間もなくで高齢の方がグラウンドに座り込み、背ざめた顔で揺れが止まるのを待った。大会本部も被害が大きいと判断し、大会中止と緊急帰宅するよう指示した。帰宅して驚いた。玄関の柱が傾き、戸は倒れ、ガラスが割れて散乱していた。足の踏み場もない状態であった。家の中は食器棚をはじめ棚や箆が倒壊しており、呆然と眺めるだけであった。そのとき、我が家とどこではない、被害者の救済が私の責務であり、車の重さを自覚する。家の中の通路だけを片づけ、社会福祉協議会へ駆けつけた。職員も民生委員を通して一人暮らしの安否確認に追われていた。早速、穴水町災害対策ボランティア現地本部の立ち上げの準備にかかった。災害の被害状況の把握に戸惑いが、情報の収集と被害者のニーズを行政の町内放送で呼びかけ、情報収集に全力を挙げ取り組んだ。同時にボランティアグループに災害支援要請と召集を呼びかけた。被害を受けながらも大勢が集まってきた被害者のニーズに対応するための支援体制作りと現地救援派遣を実施した。ニーズによって行政とのパイプ役も重要な活動と判断し、要請の対応に努めた。避難所応援企画、避難所環境整備支援と戸惑いの連続であった。そこへ名古屋から神戸の阪神淡路大震災と新潟地震で救援活動を体験した「レスキュースタッフカード」支援スタッフが泊り込みで指導にあたった。災害支援の手順などについてアドバイスを受けた。感謝している。町内外のボランティア支援団体が大量駆けつけ、どのように支援体制も整い始めた。被害者のニーズにマッチした効率的な満足感を与え支援体制作りを努力した。地元社会福祉協議会の職員をはじめ県内外の社会福祉協議会の職員も応援に駆けつけ、実に手際よく支援体制の先陣に立ち援助してくれた。感謝している。私は3カ所の避難所を巡回し、心のケアとニーズの収集に努めた。行政に対して被害者の要請に的確に答えているかもチェックしながら対応

に努力した。そのとき避難所の高齢者や子供達の心のケアが如何に重要であるかを認識し、ボランティアの方々に協力を要請した。次第に避難所でも不安な生活をしている方々にも笑顔が見られるようになり、ほっとした。慰問と励ましボランティア活動計画も作成し、ボランティアの輪が広がるのが嬉しかった。皆さんの温かい支援に感謝した。5月に入り被害者は仮設住宅に45世帯が入ることになり、引越して作業の支援も行った。不自由な生活を余儀なくされている被害者の方々に対し、巡回ボランティアグループの心のケアに今も継続して頑張っている。優しい声かけ運動に加え、趣味を生かした作品作りなど仮設住宅の中央にある談話室に皆さんが集まって笑顔で出来た話を話しながら和やかな雰囲気を作り出している。会話の中で再生復興に向けての話しも交わされ、前向きに生きる努力と明るさがあるが、嬉しい思いである。日ごとに笑顔が増え、明るさを

災害者の再生復興に向けての要請は行政を交えて相談会を毎月、仮設住宅のケアハウスで実施している。色々なニーズに対応すべく行政にも要請している。

私自身も穴水町の再生復興委員となり行政、商工会の会議に出席し、積極的に被災者の要請に応えながら、再生と復興に向けて努力している。会議の内容も進捗が早く、復興道路の測量に取り掛かっている。また町の活性化に繋げる復興に向けて、学識経験者の意見を交えて取り組んでいる。早期復興に期待している。

最後に私の能登半島地震から得た貴重な体験から、皆さんにお願したいことがある。それは、絆を大事に支えあって生きる大切さ。ボランティア活動は、してあげるとはなくてあくまで活動である。元気を与えて元気を貰う活動である。そして、能登半島地震のボランティア活動は終わったわけではない。形を変えながらゆくりとニーズにあったものを探し出し、みんなで力を合わせて支援を続け、被災者が苦痛のない生活に少しでも近づける温かい支援が必要であるということに、ご理解をいただきたい。

能登半島地震体験記録

日本赤十字社石川県支部防災ボランティアリーダー 北村 裕一

地震発生時、私は石川県支部内で40人の仲間と救急法の講習中でした。大きな長い揺れがおそってきたので、すぐに講習を中止し、テレビを見ると震源地は輪島市門前沖あたり震度6強とテレビに流れました。9時50分には自家用車で輪島方面に向かいました。途中、携帯電話は圏外で、情報はラジオに頼りましたが、能登有料道路は徳田大津で通行止めになっていました。そこからは国道を走って穴水町に入りました。町全体が静まり返って車の台数が少なく、不安が増したまま輪島市に向かい、市内には11時30分頃に到着しました。

市内のスーパーの様子を確認すると陳列台から商品が落ちていたが、比較的落ちた様子のお店の棚が、地震被害の大きさを物語っていました。それから門前町に向かおうとしたが、道路事情も含めて最悪の状態になったため、輪島市に戻り、県の県民交流課と石川県支部に被災状況を連絡し、輪島市役所で避難所の確認をし、石川県支部に毛布と日用品セットの発注を依頼しました。その後、輪島市社会福祉協議会で現地災害ボランティアセンターを立ち上げる準備を、現地ボランティアと相談し、県の県民交流課と石川県支部に連絡を行い、深夜、金沢に戻りました。

能登半島地震のマスコミの報道すごいと知人や仲間から聞きました。そういう状態で2日目も現地に向かい、今度は七尾市、穴水町、旧中島町、志賀町、旧門前町、輪島市、能登町と被災地といわれているところをすべて回り、前日同様、県の県民交流課と石川県支部に情報連絡を行い、現地災害ボランティアセンターの立ち上げのお手伝いをさせていただきました。2日目になると、県外のNPOの方もかなり現地入りされ、現地ボランティアセンターの早期立ち上げについて議論がおこなわれました。

3日目は被災者対策ボランティア本部に協力するため県庁内で活動しました。県の防災

計画には、日本のボランティアも本部に入る項目があり、普段から災害があったときはどう動くかという約束事をいろいろな方としていたので、自然にボランティア対策本部で活動できました。

しかし、最初は本部と現地本部との連携、マスコミ対応、本部内の連携など、いろんな問題点がありました。また、本部内は、ボランティアの利用者登録、災害状況確認、ボランティアのクレームなどいろいろな内容の電話があり、電話受け付けボランティアの方が対応できない内容は、なるべく私が対応しました。自分でも驚くくらい、その場で対応できたように思います。今までいろいろな災害現場で災害ボランティアでしてきた経験が生かされたようです。しかし、その反面、現地での情報交換会で門前、輪島、穴水へは行きましたが、地震発生後3週間ぐらいは自分も含めてみんなが、冷静な判断ができなかったのが原因で、意見のぶつかり合いも多くあり、反省ばかりの期間でした。その後は順調な流れになったように思います。石川県内のボランティア、県内企業の団体ボランティアも含め、今回の災害で、災害ボランティアに対する意識は間違いなく高くなったと確信しました。また、地震発生後3週間以降は、現地ボランティアセンターを被災者との信頼関係も生まれ、被災者ニーズも増え、県の災害対策ボランティア本部としても、現地に有効な支援が明確になっていっているように思います。今回、私の反省点の一つとして、もっと大きい声で言いやすかったのにもっと大きい声でお願いしたかったのに満足できなかったということ、心残ります。

私は、日本ボランティアとして募金活動にも参加しました。募金してくれる方の年齢は様々ですが、被災復興のために役に立ててねと、募金箱にお金を入れていただいた時は本当にうれしかったです。能登半島や輪島の花やメダカなどいろいろな面で能登の復興のPRがされていますが、自分ができる復興ボランティアには何かを考え、これからも活動していきたいと思っています。

能登半島地震災害ボランティア活動体験について

石川県災害ボランティアコーディネーター協力会事務局長 松井 喜憲

私は、3月25日の能登半島地震発生当日、約20人を引率して、輪島市門前町の嶺山(333m)に雪割草観察ハイキングに行っていました。門前深見集落の裏山で被災し、門前町・志賀町集落(特に密波等海岸沿いの集落を通り)の被災状況を確認しながら一日帰宅しました。帰宅後、災害ボランティアコーディネーター協会(以後 協会)の会員に岩手石川県に集合するよう召集をかけ、発災翌日の3月26日に災害ボランティア県本部(以後県本部)に入りその後、石川県職員と一緒に穴水町・輪島市等の市町の災害対策本部を訪問し、災害ボランティアセンター現地本部(以後県本部)開設の働きかけを行いました。また、同時に県災害対策ボランティア本部の体制とシャトルバス運行の原案を立案しました。(事後の反省ですが、コーディネーター協会は発災翌日朝に被災地の現地災害対策本部(以後 現地災対)に入ったのですが、この時期は現地の協力が最も混乱している時期であり、発災から1〜2週間は、続けて社協側のスタッフとして現地災対との調整や、全国から来たボランティア・NPOとの応対を肩代わりすれば、もう少し現地協力の負担が軽減できたと思います)その後の3日間で、3カ所のVCの状況を把握し、31日から最も被害規模の大きい門前VCに入りました。我々には仕事を持ったボランティアですので、VCに毎日入る事ができず、4月は週に1日有給休暇を取り、5月は連休の全日と2週間に1日の有給休暇を取り、2カ月間のVC開設中に延べ1カ月間VCに入りました。しかし、ボランティアの任意性という観点から、継続的にスタッフを派遣する事ができず、VC内の機能を分担する事ができないために、VC組織の中核には入らずに、活動として、気が付いた点をアドバイスさせて頂いたり、スポットで渉外や現地見下見などのお手伝いをさせて頂きました。また、現地にいた時に、多くのボランティア

が集落の災害ごみ置き場で、ごみを分別している所へ、被災したお年寄りが1人でセルフカーに小さい家具を積んで捨てに来る姿や何人も見て、思わずボランティアを出す者や何人でも頼んで下さいと伝える日々が続きました。VCの役割として、被災者のお年寄りが、ボランティアに頼もつかうという気持ちになってもらうことが大切であると痛感させられました。2カ月目に入るとボランティアが少なくなり、私も含めてVCスタッフ自身が作業に出るケースが多くなりました。2カ月前半でのニーズの予測とボランティアの確保の重要性を痛感しました。

また、この時期に、県内の高校が平日に生徒をボランティアに出して頂いた事は本当ありがたいが、被災した老人の方も県内の高校の名前は知っているのが安心して受け入れて頂けたようです。

VCの2ヶ月間で感じたことは、太平洋側の大都市の災害と日本海側の小さな市町の災害には規模の大小の差の他に様々な差があるという事ですが、災害に手馴れたNPOの他に、多少ノウハウを持った県内のボランティアを入れ、地元とのバランスを取った復旧支援をすることが大切であると思いました。

振り返ると自分自身と協力の無力さを感じながらの2カ月間でしたが、今後は大きく分けて3つの点を確認し活動して行きたいと思えます。

- ・日頃からいろいろな機会での防災意識の啓蒙を図る。
- ・防災訓練へ積極的に参加し、地元市協や市町等との連携を図る。
- ・県の災害ボランティア本部とボランティア現地本部の円滑な運営を図る。
- ・近隣の県で災害発生時にボランティアとして災害支援を行う。ことなどです。

最後になりましたが能登半島地震後、引き続き地元を毎月訪問しており、仮設住宅が完全に撤去されるまでは、この活動を続けようと思っております。

「人」

災害ボランティアコーディネーター 伊藤 静香

研修を受けてから約2年経ちますが、県内の地震で実務活動をするとは予想もしていませんでした。災害ボランティアコーディネーターが活躍するような災害がなければいいと思ってしまう。災害経験のない私にとって「能登半島地震」では全てが初めての活動でした。都合よく多くの活動は出来ませんでした。多くの貴重な経験がありました。

復旧復興には必要不可欠なものはいくつかありますが、一番大切なのは人だと思います。被災地の人々・活動ボランティアなど多くの人と出会い活動する中で、人とのつながりやコミュニケーションの大切さを実感しました。短い時間でコミュニケーションを取り、信頼度を上げ、事務的に処理していくのではなく、目に見えないものを大切にしたい。日々の日常生活でも同じ事が言えますが、非日常時は益々大切にならなければならない一つであることが分かりました。

被災地のために人と人をコーディネートしていくボランティアリーダーには、ニーズ依頼者や活動ボランティアに素早く安心感を与えるこ

とも大きな役割だと思います。

例えば活動紹介班での出来事です。活動紹介に集ったボランティアへ注意事項などを伝えるオリエンテーションで、リーダーがズボンがポケットに手を入れた話を聞いて、私は急に不安になりました。誰もが多少なにか不安な不安な感がある中、ちょっとした言葉や行動で揺らぐ事があることが分かりました。言葉を通じてコミュニケーションから安心感と繋がることでお互いへの活動ができたと思います。

県内外問わず全国から復旧復興を願う被災地へ多くの人々が集まりました。

人からも天災からも学び、知識と経験を積み重ね、自信を持って活動できるようになりました。自分が思うように十分な活動ができませんでした。全国の皆様に助けていただけたと思っています。コミュニケーション上手になり、もっとスキルアップをしいつか恩返しをしたいです。

全国の皆様のご意見を感謝いたします。

「能登半島地震ボランティアに参加して」

石川県立羽咋高等学校2年 山田 亮

地震が起きて、輪島や門前ばかりがテレビに映り、あまり災害の実感がわきませんでした。しかし、ゴミ処理場のゴミの多さを見て、思っていた以上の被害がとても驚きました。ゴミの分別をしていると、まだ使えそうで新しい物がたくさんありました。大切な物が壊れて捨てざるをえなくなった方々はたくさんいると思います。一瞬にして大切な物や建物を失う辛さは、体験してみないとわからないと思います。ボランティアはそのような人々の負担を少しでも減らすことができる良い機会だと思います。

ボランティアをする機会はありません。私も今回で2、3回目くらいです。野球部

で行ったときには、被災地の家々を訪ねて、お手伝いをさせてもらいました。私は被災者の方々は明るさがないものだと思っていました。しかし、実際はとても明るく接していただき、たくさんの「ありがとう」の声をもらいました。私はここにボランティアの最も良い部分があるのだと思いました。

被災者に対して、ボランティアをしてやるという上からの目線ではなく、常に被災者と同じ気持ちでいることが大切であると学びました。自分の為でもあるが、やはり被災者の為に行っているのです。今回のボランティアは、全員参加でしたが将来は、人に言われてではなく、自分で積極的に参加したいと思っています。

緊急時の体験から見たもの

輪島市門前町道下区長 泉 靖郎

1. 自分の被災体験＝大地震の怖さ
25日朝9時42分、地震が発生した時、私は私の庭に面した家の廊下にはいました。

ドーンという地震の直後、激しい上下の揺れに立っただけの状態でした。家中が激しく震動するのと同時に、隣に隣に壁が倒れ、壁が落ち、家具や戸棚が倒れ、物が散乱しました。すぐに外へ逃げなければ、98歳の母がいる居間を見ると、テレビが台から落ち、サイドボードが倒れ足の踏み場がない有様でしたが、幸い部屋の中央のこたつで無事でした。すぐ母を背負って、戸の外れた縁から脱出のまゝ、裏の庭へ出ました。家は倒壊を免れたものの、体験したことのない衝撃で気が動転していました。

9時43分、防災無線で津波注意報の発令で、「この放送で避難所に地区民が集合する」ことを思い、母を軽トラックに乗せて地区の高台にある指定避難所の「道下農村公園」へ急行しました。

2. 生かされた防災訓練

道下区は258世帯、約600人、9町会があります。区長として最初にすることは、避難者の準備でした。5か月前に偶然にも、能登半島地震とはほぼ同様の地震を想定した輪島市防災総合訓練の体験を生かし、町会長に町会名を書いたプラカードを渡し、町内ごとに集合し、避難状況の把握をしてもらいました。どの町内にも避難していない人がいることが分り、消防団員や町会長に避難を呼び掛けるための見回りをお願いしました。

11時30分の津波注意報解除までの、長時間の外での待機は、高齢者、病弱者にとっては厳しい状況でした。椅子を用意する。ブルーシートを敷き、毛布(公民館のもの)で休めるようにする。これらの準備は避難所に集まった人たちの自発的な行動で進められました。

3. 避難所生活を支えたもの

津波注意報が解除されてから、訪問公民館に移動。地震当日は公民館3室計166畳とロビーに247人を、入りきれない幼児連れ世帯と約60人を松風台保養所に収容しました。25日は道下区の半数が泊まりました。

①避難所としての公民館

避難者でもある、区長、公民館長、主事、地元の市職員が事務所に詰め、避難者の話を相談しな

が進めました。昼食の準備、応急トイレづくり、水タンクの設置など、市の支援体制が整うまで、地区の自分たちでできる対策をとりました。

また、避難所としての機能だけでなく、地区の被災者からの問い合わせ、復旧情報収集提供など情報伝達の窓口として活躍し、ボランティア依頼の受付も行われました。

②町会長の協力

避難者の状況を掌握、市からの情報連絡、在宅要援護者の点検と町会長の協力をなしにはできませんでした。特に膨大な量の災害ゴミの処理について、いつ、どこへ、どのように出すか、その指示の徹底が大変でした。

③地域団体の行動力

消防団＝地域を巡回し安全確認と避難の呼びかけ。被災者支援へのシートかけ。

婦人会＝昼食時を控え、公民館に避難した人たちの炊き出し。

地元建設業、左官、大工職人＝応急トイレの設置

④民生委員の活躍

地区民生委員の「要援護者見守りマップ」の情報をもとに見回りし、要援護者の安否確認が素早く行なわれた。

⑤ありがたかった支援

日本赤十字社から毛布、日用品、食料などの救援物資は助かりました。また当日夕方には石川県立赤十字病院の保健師、介護師が到着し、さっそく避難者のお世話を24時間態勢で下さいました。5月1日の閉鎖前日まで常駐していただき、その親切で熱心なお世話をとても感謝しています。また全国から駆け付けた、たくさんボランティアの方々のおかげで、元気づけられました。

4. 復旧・復興に向けて

地区住家の被害は大きく258戸の内、160戸が全半壊で、無被害がわずか2戸でした。被災から1年を経て、住家の復旧は驚くほど速く進んでいます。住みなれた土地を離れたくない気持ちから、支援金、義理金が後押しをしてくれました。また、復興基金による支援事業の「住まい、まちづくり協議会」を組織し、復旧にとどまらず、新しいまちづくりへ準備を進めています。

能登半島地震は、地区民にとって、強烈で、学ぶことのできた被災体験でした。

「がんばる米」に笑顔を見せて

農事組合法人モロオカエーシー代表理事 竹内新一

地震が起こった3月25日は日曜日で、私は農作業を休んで何処かへ遊びに行こうと思いつき、着替えの最中でした。一見目、上空からジェット機の衝撃音が頭の上から落ちてきたと思ったら、次は下から突き上げられ、物凄く地鳴りと共に左右に揺さぶられ、家財道具やテレビ、冷蔵庫などが次々と倒れてくるので、どこに身を置けば安全なのかさっぱりわからない状況でした。そのうち、揺れがおさまったので、すぐに外へ飛び出しました。近所の人も顔色を変えて集まり、何が起きたのかかわからずパニック状態でした。幸いにも私の家の周りは倒壊した家はなかったので、その時はすごい地震とは思いませんでした。

少し経ってから、防災無線ですぐに高台へ避難するように告げられました。近所の人達と高台へ登ると、町内のみんなも続々と集まって来ました。高台から海の方を見ると、海水が濁り、今にも何が起きるような感じの光景でした。

次に町の方目を目指すとあちこちの家、納屋等が倒壊し、凄まじい光景が目に見え込んできました。私達の農業者が所有する農機具格納庫の方向は、すべての建物が倒れているように見えました。私は一瞬、農機具がすべて壊れてしまったと思い心配になりましたが、皆が集まっている所へ行き、町内ごとに全員無事にいるか点呼を取った後、公民館へ避難しました。

その時は仕事のことなどは頭にも浮かばず、みんなと一緒にボランティア活動を行い、一週間が経ったころ、少し落ち着きが出てきました。私は仕事のことを気にしなくなり、農機具格納庫を見に行くことにしました。半分諦めていた格納庫が無事と、農機具も何となく無事だったので、「今年も仕事ができる」と思うと何かが胸が熱くなってきました。ひと安心して家の後片付けを行った後、仕事に取りかかろうとハウスへ水桶の苗づくりの準備に行くところ、水桶用の育苗床が見るも無様に散乱しており、後片付けに2、3日かかりました。

仕事の傍ら、公民館で朝晩ボランティアを行っていた時、家を出て公民館に避難している高齢者の人達から、「今年も田んぼも畑も出来ない」と話を聞きました。私は「田畑が荒れてしまえば、地域の活力が消えてしまうのではないかと心配になり、田んぼ作りを諦めている農家を訪ね、「今年一年だけでも私が田んぼの作業をする

かららせてくれ」と言いながら個々の農家を回りまわりました。農家のみんなはよく私に任せてほしい、喜んでくれました。

半年より2週間遅れて田植えの準備にかかりました。しかし、水田へ行ってみると見た目は何でもないように見える水田が、トラクターで耕して初めて、いたる所に土が隆起していることが分りました。中山間地の棚田では、畦畔が崩れ、水桶を作付けできない水田も2、3カ所あり、用水路も崩れたり、裂けたりしていました。私は、このような状況ではかなりの水田を休耕しなければならぬと思いつきながら、一応、水田だけは耕しておこうと作業しているところ、水利組合長が訪ねて来て、「用水路の修復を早急にすることから、出来るだけ水桶を作ってくれ」と言われ、「そこまでの対応してくれらるなら、私に任せなさい」と言いながら返事をしました。

しかし、水田を均等に耕すのにかなりの時間がかかり、約10日遅れて田植えを始めた。6月中旬頃までに終われば良いかなと思いつきながら作業しました。しかし、作間の応援もあり、思ったより早く終えることが出来ました。仲間には感謝の一言です。

私の田植えも一段落し、町内を回ると6割の家が取り壊されています。改めて、地震の凄さには恐怖心が湧いて来ました。私と出会う町内の人達の口癖は、「よう頑張ったね。秋が楽しみだね」でした。この言葉に励まされながら作業し、収穫期を迎えました。私は収穫した米を、仲間と地産を乗り越えて頑張ったのだから、自分達にすこし褒美を買ったために「がんばる米」とネーミングして販売しようと思いつきました。

いつの間にか町内のみんなにもこのネーミングを覚えてもらい嬉しくなりました。私は地震で水田を作れなかった農家や以前から水田が少なかった農家へ「がんばる米」を準備して、「あなた頑張ったのだからこの米は買えない」「水田を荒らさないで作っているからこの米は買えない」「がんばる米を買って頑張る」などの言葉を頂きました。

今回の地震で感じたことは、地域の人達の団結力の強さ、思いやりで、これにはつくづく感謝しました。その一方で「音に対する恐怖心」が心に焼き付いて残っています。地震は本当に怖いものです。

素早い決断で、溜池の決壊を回避

志賀町世話区長 茶畑勝朗

震源に近い石川県羽咋郡志賀町笹波地区内でも震度6弱を記録し、地域の農業用水として利用している溜池(平田上池)は25日の地震で堤防の一部が壊れ、大変危険な状態となり、決壊すれば良下にある(平田下池)も決壊し、下流の人家にも被害を及ぼす恐れがあった。(当時の春の農繁期前で上池、下池共に満水)翌朝の余震で平田上池は決壊したが、早い決断で下池の水位を下げていたため、下池の決壊を未然に防ぎ事が出来た。

3月25日地震発生後、区長は区内を一巡し区内の役員に各班の被害確認を指示し、被害状況を確認しながら、溜池の確認にいった。平田上池は3分の2程養蚕用が崩壊していた。この時点で下池の水位を下げる為に取水栓を1本だけ引き上げ、志賀町役場富木支所及び本所に通報するが電話、携帯電話も思う様に役立たず、どこにか被害状況を報告し本所、支所の職員が来た時点で堤防は中央では抜水が少し始まりましたので、(本震以後数回余震もあり)目視出来たので、職員との相談の後、下池の取水栓を新たに1本引き上げた。2本の取水栓を同時に引き上げることは未だに経験のないことであり、排水路下流の民家に状況説明する事にした。

この時までは決壊の恐れについては本当の話をし、避難したほうが安全の旨を伝えた。当日の避難者は住宅被害や溜池に関連した者で50人強であった。25日は日没近くまで監視し、区長、堤管理者と町会連で朝を迎え、早朝の監視時7時頃の余震時に決壊が始まり、其の時の下池の水位は前日の2本の取水栓引き上げの効果もあり、7時の決壊時には急激な増水にはならないが、赤茶けた水が満杯になり、下池の洪水吐から流出し始めてから、上池も確認しながら下池の取水栓を戻し町職員との今後について協議に入った。その時、避難所当直の方だろうか、同行された町職員の方も確認され、本所に通報された。

この後、下池の水で5月の田植えを済ませ、秋の収穫までの間、2人の水管理とし、水路の水を耕作者には一切取り扱えず管理し、通常の収穫をさせて頂いた。

平田池の本格的な復旧工事は9月以降となるため、管理者には長期にわたり労苦をかけた。この件につき以前から笹波区には、区長、副区長、会計、班長×8人、副班長×8人、堤管理×2人、水当×2人の体制が出来ていたことが幸いした。その他に各役職、各種団体もあり、区民の協力の上で20年度を迎える事が出来た。

災害時、外国籍住民は誰に頼れるの？

輪島工務局長 七浦 禎 運

2007年3月25日の朝、突然来た揺れ、電気や電話が動かない状態で、これほどの揺れを経験した事がない私は大動揺と気が付くのに時間がかかりました。当時、地震中だった私は、上司の指示で家族の安否を確認し、その後、家族と合流することができました。今だから穏やかに語れますが、当時のパニック状態は、映画のようにでした。

余震が続く中、輪島市役所の災害対策本部の町内放送を聴いたり、周りの日本人の話の聞いたり、地震後に備えました。例えば、ライフラインの確保—浴槽に水を溜める、電池や懐中電灯、蠟燭を用意する、おにぎりやパン、ミネラルウォーターを購入するなどです。主人は倒れてくる物で二次災害が起きないように、棚を壁に固定したり、逃げ道を作っておくなどの対策を取っていました。

今考えれば、私の国籍は中国(台湾)ですが来日して13年。日本語検定1級合格者で、日本人の家族も居るので、災害に対する受け方や対応は日本人と差はほとんどありません。外国籍住民の中でも私の場合は災害時、自分の家族や同僚に頼ることができました。しかし、日本語が流暢に使えない外国籍住民はどうでしょう？地震の二日後、私は通訳として最も被災が深刻な門前の避難所に居る外国籍研修生を尋ねました。彼女たちはその時点で未だ地震の状況を把握できず、市や政府からの支援を受けられない事も理解できないまま、住えていました。避難所では外国人向けの説明や指導者もいない状態、言葉が通じないから外国人への問題点を収集できず、輪島市災害対策本部へ送られた報告は、外国人被災者は特に問題はないとの結論

になりました。

日本語が流暢に使えない外国籍住民は災害時に、誰に頼ればいいのかというので、会社ですか、役所ですか、近隣ですか？それとも自分たち？

過疎地だから、外国人向けの取り組みが鈍いと考えた人はたくさん居るかもしれませんが、でも、過疎地だから日本語があまり分からない外国人が来るのです。例えば農家のお嬢さん、技術実習研修生。このような外国人はほとんど他国と接触がないまま日本で生活しています。普段は静かに暮らしている人たちこそ、災害時に忘れられてしまいがちです。できれば、普段の生活から彼らのケアを市町で担っていただけたら、災害時も同様に対応できるのではないかと思います。

外国籍住民も同じ住民なので、同様な待遇を受けられれば、災害時に抱える不安も減るでしょう。二次災害を受ける事も減ると考えます。

地震から一年経った今、私たちが家族はやつと通常の生活に戻り、狭いアパートから逃げ出し、畑や田んぼ、竹林に囲まれた家に戻りました。家で使う調味料の長い非常食、ミネラルウォーター、電池式懐中電灯がありますが、夜中に来る震度3の地震で目が覚める事は、今でも変わりません。でも、能登半島地震のおかげで、私たちが家族は輪島をもっと愛するようになりました。私たちが家族は一つなんだと知らされたからです。

この過疎地で日本人のような外国籍の私は、これからも他の外国籍住民の助けが必要な時に、力を貸したいと思います。日本人からの助けも大事ですが、外国籍の住民間で頼られる人になれたらもっと意味があると思います。

能登半島地震の体験から

七尾市中央町 永谷 誠 行

石川県議会議員選挙が近づき、地元から議員候補者が出馬を予定していたので、能登島の知人宅へ向かっていた途中、車中で大きな大きな揺れが、今迄経験したことのない揺れが襲ってきました。携帯を掛けたが繋がらず、取り急ぎ選挙事務所へ帰り、この日はこれ以上上がらせて欲しいとお許しを得て、店へ急ぎました。

能登島で感じた揺れが尋常でないことはわかっていましたが、店に足を踏み入れてびっくりしました。陳列台が倒れ、棚の上から酒類のビンが落ち、店中にアルコールの臭いが充満しておりました。後から聞いたことですが、アルバイトの親大生が再けをするように、奥で酔って途中で上がるようになったそうです。

市役所中高支所より町会長は集合する様に連絡が入っていて、駆けつけました。そこと在所の現状を把握し、連絡するよう指示がありました。集会所に役員、班長に集合してもらい、六班に分かれて現状を把握してもらいました。

◎人的被害なし
◎水道管破三カ所破裂
と第一報を三所へ報告しました。水道管の破裂三カ所共、当直中に応急処置ではあるが、破裂箇所が多く有る中、復旧しています。

役所、業者の陣に感謝しています。

在所全体を改めて自分自身で確かめたくて巡回しました。お宮さんの本殿に揺れ有り、鳥居、燈籠、狛犬が破損、同じ境内に有るお宮さんの墓地で八割以上の墓が倒壊。住宅、蔵、納屋等何カ所も被害あり、道路の浮上箇所有り、当日は引き受け受けていた間に合わない、加賀方面の国道が通行不能、堤の土手が水漏れ等、段々被害が拡大して行くようになっていきました。

市指定の避難所へ移動した世帯、一世帯、自宅を離れ移動した世帯、一世帯、納屋へ移動した世帯、一世帯でした。何はともあれ人的被害のなかった事に胸を撫で下ろしました。

一段落して自宅へ行ってみると、玄関の下駄箱(二段になっている背の高いもの)が倒れ、上り口を塞いでいます。台所の天井が落ちていて、廊下の壁が損傷、二階へ上がった自分の寝室へ入ってまた驚きました。いつも

寝ている真上から、タンスが扉を開いた状態で落下してしまいました。もし寝ていた時間だったら、怪我がおこるか死んでしまったかも知れない状態です。今こうして自分が元気で有る事に、神、仏に感謝しながら、頑張らなければいけないと心から思います。

大工さんに家の修理をお願いしました。訪ねて来て下さったのですが、玄関におはようございますの声はしたのですが、時間が経っても入って来ません。上がってお茶でも飲みながら話しませんかと言うと、あなた方は気の強い方達や、俺はこんな恐ろしい家へ上げられたと外での会話になってしまいました。直せと云えば直しますが、下からやるのと変らなほどの金額になるぞ、そして真面目ならぬと説明されました。修理で済ますか、建て直すか、相談で相談しましたが、妻や子供達は新築を希望して。しかも母は長年の愛着と、夫と二人で苦勞して改築した時の思い出から、出来れば残したいと言います。長い時間を掛けて母を認めて納得した様でも、お友達、御近所の方達からあんな支拂の家を、もつたないと言われれば、また気持ちも揺れて、どうしても壊さなければならぬのと迷います。補助対象期間ぎりぎり迄時間を掛け、11月末ようやく母に諦めしてもらって取り壊すことにしました。

お宮さんの境内の整理を4月25日の春祭りまで完了して、鳥居等石垣壁を作って下さった業者さんにお断りしたいが、込め合っている間に合わないと言われ、ある会場で合った業者さんをお願いすると、自分達で作ったもの何かも引き受けて間に合わない、加賀方面の方達の同業者に来てもらうこと何とかなって合せてもらいました。本当にありがとうかったです。

この地震のお陰でいろんな事を学ばせてもらった様な気がします。普段持っていた、行政に対する考え方が変わるくらい、昔、頑強で下さなかった、今も仮設に住まわせてもらっているのですが、いろんな方達の御支援を頂き勇気と元気を貰いました。この頂いた御恩を私達家族は、石に刻んだ様にいつまでも忘れる事なく、お返し出来る様になりたいと願うものです。

震災からの一年-日記・メモから-

輪島市門前町深見区長 板谷 弘

3月25日 雪割草祭で嶺山散策来訪者が一年で最も多くなる。朝8時登山道の受け付けを開始。9時40分ごろ、突き上げのような激震あり。深見住民は築港の広場へ避難。年配者の津波が来る」という声で高台へ移動。携帯電報の情報を津波の心配がないことを知る。他地区へ通じる道路は土砂崩れのため通行不能。深見は孤立状態。住民脱出の手段として隣集落の漁業倉へ漁船(約5トン)による脱出運航を交渉し承諾を得る。人数確認の上漁船で殆どの住民が門前小学校へ避難。深見に9人留まる。

3月26日 集落の真山(南側北側)に地震による亀裂を発見。降水による土砂災害防止のためブルーシートを張る。

3月27日 集落内は危険につき全員退去を役所から勧告される。滞留を断念する。

3月28日 全員阿岸公民館避難場所へ移る。

4月1日 バトカー先導で消防隊50人が深見地区へ入り住宅の屋根修繕。

4月4日 御供田幸子一座の慰問公演あり。全員笑いと涙の熱演ショーに歓喜感溢。

4月9日 今日から日中時間制限で深見地区へ住民が入り片付け作業する許可が出る。

4月18日 市土木課より深見地区の復旧は今年一杯かかるとの説明あり。

4月24日 昨日と今日市土木課、県議と深見海岸道路復旧について話し合う。

4月27日 香掛元大臣が阿岸公民館を視察。

4月29日 4月9日以来は連日ボランティアの方が深見へ入る。本日は20人入る。

4月30日 深見全阿岸公民館から道下仮設住宅へ移る。赤石公民館長へ深見一同謝意を表す。深見全戸が仮設住宅の一區画に居住。仮設150戸の区長を依頼される。

5月17日 歌手の北島三郎道下仮設住宅を慰問。その外多数の慰問を土日を中心に受ける。今後も慰問予定、慰問物資共に多い。

5月29日 集会所で深見地区の臨時集会を開く。議事は向裏山道滑り防止工事、岩のり畑の畑旧工事、海岸道路復旧工事、サビヤ林道復旧工事、お滝神社の修繕工事など。

6月5日 市職員と共に海岸土砂崩れ箇所の崩落状況を現地確認。該当地権者を調べ。

6月20日 深見地区31人が県議会傍聴。その後県庁見学。知事室で知事さんと震災について懇談。知事さんから大変有意義なお話あり。深見地区一同知事さんのお心遣いに感謝。皆で金沢まで行った甲斐あり。

6月26日 深見で新たに土砂崩れ発生。明日は通行止めの通知あり。

7月12日 深見阿裏山の工事に10社以上の業者が入り工事を急ぐとの情報あり。

7月23日 道下仮設住宅へ冬寒祭開会式。谷本知事他一行が視察。大臣から深見住民の帰村について心強い言葉を頂いた。

8月17日 深見の坂下初江さん(70才)道下。仮設住宅区長を引き受けて以来入所者の健康を気に掛けてきた。阪神大震災では仮設入居高齢者が多く亡くなったと聞く。坂下さんの死は深見の大きな人を喪っただけでなく色々な意味で残念である。

9月1日 昨日の土砂崩れで海岸道路は明後日まで通行止め。

9月26日 知事さんより深見の帰村が予定より早くなる可能性の告知あり。

11月21日 仮設集会所へ親市長、宮下県議が来訪。深見帰村の話あり。嬉しさのあまりは強根を重ねる。

11月25日 深見帰村の引越が始まる。

12月10日 山崎道下仮設住宅新区長に事務引き継ぎして深見の自宅へ引越す。

1月8日 深見地区総会。総会後御供田幸子一と阿岸公民館長を招待してピナーセットで深見地区新年会を催す。

5月20日 深見川河川及び道路工事中。

能登半島地震に思う事

志賀町輪野里 松田 外茂 三

当日、朝食後、私たちが不幸であった親戚へ挨拶に行こうと思ひ私達の車にある軽自動車センター駐車場で車のエンジンをかけ、家内が下りてくるのを待った。車から降りて、家内を振り回した途端、いきなり地面が揺れだし、私はその場で何をすることも出来ず、何が起こったのかと考えることが出来るまま立ち止まっていた。

しばらくの間ですが、目の前の境界から周囲の建物が消えてしまった様に思われました。震動がおさまった瞬間、近所の人々が大声を上げて集まってきました。二階に座り込んだ人、柱にしがみついた人、物に挟まれて動けなかった人、色々と集まってきた人の話が入り混じっていました。

特に私の孫の男の子がドアが開かなくなり、部屋に閉じ込められ、それでも外に出たい一心で、窓を叩いて外へ飛び出してきた。

また、私の息子が職場の都合でタイに行っていたのが偶然昨日休暇を取り帰国してました。昨夜は私の住まいの方で久しぶりに夜裡くまでお酒を飲み交わし、当日は朝寝坊をして建物の中に居たのでした。

それでも、我々の地区は、ケガをする人も無く、幸いなことに家の倒壊が無かったことが不幸中の幸いだった様に思われます。この地区では30歳前後の若者がほとんど居ません。中学生、高校生が5人程です。後は殆どが老人会に入っている年齢の方々たちです。

私たちが、子供の頃から、先人に「この地区では地震など絶対に起きない」と聞かされてきたものです。地震に対する備えなどあるはずがありません。自然の怖さをつぶくつと思ひ知らされ、現代の人間に勝る心を集めてくれたように、自分なりに判断しました。

誰しも備えのない自然の怖さから、人間の弱さが憤りなく思っています。

その上で感じたことは、町政のあり方に一時は不平不満が多少心にもありました。火事が起きたでもなく、当事者がた「対応が遅い」と言っていただけで、何をどうして欲しいのかもわかりません。「溺れる者、わらをも掴む」と

いう言葉があるように、一抹の寂しさと不安が頭の中を生じてきました。

何はともあれ、当地区の避難所である旧醸造小学校の体育館は屋根の瓦が落ち、天井も落下して中に入る事ができず、急ぎも隣接する研修センターでの自主避難生活が始まりました。

当然、集団生活経験のない人々の生活で、精神的にも肉体的にもうまく行くはずはありません。女性陣が食事の仕度をして、男性陣は日中、家の旧田作業とがんばっている人もいました。

避難所では県や町の保健師さんや医師が時折来られ、私たちの健康面に気を配っていただいたことが何より嬉しく思いました。

一層生活を営んでいる人々も少しずつ心が通じ合うように努力し、慰めあって「頑張ろう」を合言葉にして励みあったものでした。

5月の連休に仮設住宅が建設され、数世帯の人々が狭い場所での生活が始まりました。日々生活の中で、入居者皆が行政の有難さを認識するようになりました。現在ではお互いに食べ物や交換したり、周囲の清掃を共同で行い、皆の笑顔がかなり戻っています。時折、町からの励ましの言葉や声入れをいただく皆さんがいます。

仮設住宅に入居している者の今後の再建方法については、家を修理して戻る者、新天地を求めて地元を離れる者と半々です。私の息子は仕事や子供の通学を考慮して町外へと移転しようとしていました。私たち夫婦は何となく住むように家を直そうと、宅地の崩れた部分を先日から修復を行っています。

しかしながら何をやるにも先立つものはお金です。修繕も限られた収入で、細々と老後の生活を営んで行く限りです。周囲の人々も広大な土地があっても何の価値のない時代になったことを悔やみながら、今更どへも行きたくない「一日一日生き長らえて行きましよう」と言葉を変えていた近況です。

地震発生当時私は、地元区長をまかされておりました。この紙面をお借りしまして全国から寄せられた支援に対しては御礼を申し上げるべくくりたいと思います。

感謝の一年

穴水町大町 皆森照子

地震が教えてくれたこと

七尾市立小丸山小学校4年 南 優花

「お母さん、地震やよ。早よ逃げよー」
娘の悲鳴と共に地中から突き上げる大きな縦揺れに続きこれまで経験の無い大きな横揺れ。能登半島地震です。

ギン、ギン、ギンと家は大きくきしみ、ガチャン、ガチャンと家中の窓ガラスが割れる中、私は意外と落ち着いていました。調理中のガス栓を閉め、長靴をはいて娘と共に外に逃げ出しました。通り出てわが家を振り返り見て見た時、初めて恐怖感に襲われました。1階部分の柱は大きく傾き、梁は柱から外れ、長年家族を守ってくれた倒壊寸前のわが家の姿がそこにありました。震災前には「貴重品、防災グッズは一方所に置いておいてもいい時に持ち出そう」と決めていましたが、持ち出す余裕はありませんでした。大きな揺れがおさまり、家から逃げ出す時、私は長靴を履いて出ましたが、一緒に逃げ出した娘は裸足で飛び出していました。散乱したガラスで足をケガをしてしまいました。余震が続く中、親戚や友人からの安否確認の電話が鳴り続いていましたが、どうすることもできませんでした。

あの日から1年。感謝の1年間でした。
震災直後から国、県、地元穴水町からのご支援、全国各地からのボランティアの皆様から助ましを受けました。

平成19年5月1日から大町仮設住宅へ入居が始まりました。大町仮設住宅では、石川県で初の試みである45世帯の住民の中から、生活援助員2人が県から依頼されました。私もその生活援助員の一人です。1軒1軒、身体の不調などを聞いてまわったり、役場への必要手続きの案内やボランティアの方がおいですることを連絡したりするなどしましたが、仮設住宅内での生活援助員は同じ被災者であることから十分に対応できず、困惑することも数多くありました。余り毎日訪問しても嫌がられるのではないかと思います。6月から毎月1日に談話室に足を運んでもらい、体重と血圧の測定で自分の体をチェックしてもらいました。その後、お茶会を開き、それぞれの生活再建などの話をします。お顔を覚えて頂けない方へは後で支援の案内や支援物資をお届けする時にお顔を拝見し、一人暮らしの世帯は夜、電気がついていないかどうかで安否の確認をしていました。仮設入居時から町のボランティアグループ325の5人の方々が当初1週間に3回、住民への助ましや

声掛け、談話室で話し相手になっていただき、心配事などの相談もさせて頂きました。とても心強く、今では仮設の住民にとってかけがえのない存在となっています。

これまでの仮設住宅での生活を通して感じたことは、それぞれのお年寄りたちが持っている潜在能力を発揮するチャンスと場所があれば、高齢者の皆さんは生き生きと過ごせるという事です。高齢化率が高い奥能登でも、元気なお年寄りが多く住むということは、復興にもつながるものだと思います。

仮設住宅住民、グループ325、行政間で毎月1回、仮設住宅の生活上の問題点、復興について情報交換を行っています。行政の各課の間で情報の共有化がされていることにも不満を感じませんが、これまでの国、県、穴水町からの大きなご支援には大変感謝しています。特に穴水町の職員の皆様には同じ被災者の立場ながら、復旧復興に向けて夜食を振替えて取り組んで頂きました。被災者間で格差が感じられていた国の被災者生活再建支援法の改正で、自宅の再建にも希望が出てきました。

私は、退職後はゆったりと過ごしたいと思っていましたが、能登半島地震が私に「これからの人生でまだまだやる事がありますよ、頑張りなさい」と言うように思われ、仮設住宅で出会った気の合う主婦3人で、商店街の空き店舗を利用して地元のお年寄りの方たちが気軽に立ち寄れる定食屋「ホットちゃん」の営業を始めました。穴水高校の生徒たちが考案した「もずくうどん」を受け継ぎ、地元の安全な食材をふんだんに使った季節の料理を提供しようと思っています。

復興への力となるのは、自分が住んでいる地域とどれだけ関わっているか、どれだけ愛情を持って、住民同士の絆を持って、生活しているかということです。被災して初めて、地域の歴史、伝統文化を子どもたちに伝えていくことが、いかに大切なことか思い知らされました。伝統文化は一度途切れると、再び伝える事が難しい。映画「のど花嫁」を見て感銘しました。

能登半島地震を体験して、今は「感謝」と「前向き」に1歩ずつ前進していく気持ちでいっぱいです。小さなですが、町の復興、生活の再建に向け、仮設住宅住民が力を合わせて頑張ることをお誓いします。

地震をふり返って

輪島市立門前中学校2年 松原 萌

3月25日(日)、能登半島地震がありました。その時私は部屋でテレビを見ていました。すると急に大きな揺れがありました。それは立てられないほどの揺れで、すぐに電気は消え、目の前のテレビや食器等はその揺れでほとんど床に落ちました。みるみるうちに目の前が別世界のようにになりました。私は、その揺れがおさまってから少しの間も今の状況を判断することができませんでした。家の一階に下りると、家には亀裂が入り、床は一面食器などの破片が散らばり、足の踏み場がないほどでした。

外に出ると近所のお寺がつぶれていました。また、周辺の家は傾いてからが落ちている家ばかりでした。そして、なによりそれを見ている人は皆この状況にすぐ動揺していました。私も、その人々や状況を見て、急に不安など様々な感情が込み上げ、とてもこわくなってきたことを覚えています。度々起こる余震やそれにより少しずつ家を立てて壊れていく家々を見ていると、地震のおそろしさが迫ってくるようでした。しかし、そのような時も私のそばには家族や近隣の人がいてくれました。私は、その時自分自身を支えてくれている人達の存在の大きさを感じました。その晩、私は家族と一緒に児童館へ避難しました。そこには親戚の人もいて、食べ物や飲み物、翌朝からは家の片付けをはじめました。その際は改めて人と人が手を取り合うことの大切さを学んだ気がします。

今私の近所にあった家は十数件なくなりました。その家々が壊れていく様子を見ていると、この町、そしてこの町の人々が受けた傷の大きさを感ずります。しかし、その中でも今ではほとんどの人々が以前と変わらぬように仕事をしたり、生活を送ることができています。これは、日本全国からの多大な支援のおかげだと思えます。それは、地震後すぐに多くの方がボランティアに訪れてくれたことや、たくさんの方からのメッセージをいただいたことからもひしひしと伝わってきました。また、修学旅行での復興イベントの際に出会った埼玉県在住の女性の方からは、地震後約一年経とうとしている今でも温かいご支援のお手紙をいただきます。私は、そのメッセージを読んで何度も何度も勇気づけられました。そして私達のために全国から駆けつけ、力を貸して下さいましたボランティアの方やご支援を下さった多くの方々から感謝しています。

今、そしてこれからの私達にはまだ多くの問題があると思います。しかし、その中でもこのように私達に手をさしのべてくれた人たちのことを決して忘れず、前に進んでいかなければと思っています。そして、いつか私も支えてくれた人に恩返しができると思います。地震は私達に大きな傷を与えましたが同時に、人の温かさを教えてくれた気がします。
(能登半島地震復興作文コンクール
中学校の部 最優秀賞作品)

能登半島地震

和倉温泉旅館協同組合女将の会 会長 (大観荘) 大井マ璃幸

2007年3月25日。この日は私にとって一生忘れられない日になった。

日曜の朝、この日がピアノの発表会だった私は、じゅんびもとの母といっしょに家を出ようとした。その時だった。とっぜん、「ガツッグラグラグラグラ。」とっはげしくゆれて、私はすぐこたつにもぐりこんだ。

ゆれがおさまってから、こたつから出てみたら、物がわれてガラスのへんがとびちっていた。しかも立っただけで床がぐらぐらゆれて、狭くもやっとなった。

「なにが起きたのか、どんなことになってるんだろう。」うまればじめるの恐ろしきだった。液状化現象のため家の基礎が飛び、壁がゆがんでゆれるようになってしまったため、この日から私は自分の家にすむことができなくなりました。

次の日から母の市役所通いが始まり、あっという間に新学期。アパートに引っ越して、私は4年生になった。

母がそだった家、私にとっても小さいころから思い出がった家は、けっよくこわすことになり、部屋のせいりを手つだった私は大

切な物を捨てるのが悲しくて、泣きだくなりました。物だけじゃなく、おじいちゃんやおばあちゃんとのたくさんの時間がつまった家でした。でも、悲しいことだけではありませんでした。不安でたまらない時に近所の人や母の友達がはげましてくれて、とても心強かったです。七尾は、門前や輪島ほどひどい被害ではなかったけれど、周りの人たちの優しさや助けがなければ、ここまでこれなかったと思う。

あれだけ大きな地震だったのに、ケガもなく命があって本当によかった。

地震や災害時の訓練はふ段していても、本当に自分がいざという時は思っていないかったと思う。今回の地震でできるような体験ができたと思う。今度何かが起きたらこのことを教訓にしたいし、自分がしてもらったような親切や優しいを、人に対してできる自分になりたいと思う。

もうすぐ地震から1年になる。今この日は、何年かたかのようにくらべているけれど、あの日は決して忘れないでいようと思います。

(能登半島地震復興作文コンクール
小学校の部 最優秀賞作品)

1. 忘れ得ぬ日々
2007年3月25日(日)穏やかに晴れた朝、昨晩からお泊りのお客様の中には、春休みに来たばかりのお子様がお見えになりました。「4月にまたからお兄ちゃんと一緒に小学校へ行くよ！」と明るく笑顔で車の中から手を振ってくれる男子のお子も、玄関前にはにこやかにお帰り頂くお客様の声が溢れておりました。「有難う御座います。又お越し下さいませ」と答える私。いつもの変わった又朝の姿がそこにはありました。

只一つ、未明から異常と思われる程震っていた鳥の鳴き声が止み、当り前にいた雀も全く見掛られなくなりました。「何だか変!?!」と思いつつ、お客様のチェックアウト時刻のピークを終えたり9時42分のこと。今迄聞いていた風が止まったと感じた瞬間、ゴー!と地の底からの音、同時に地面から突き上げる感覚。その後地面は右に左にと揺れ始めました。これが地震だと気付いた時、「今、私のすべき事は?」、その手を頭を過ぎりました。しかし車の中へ荷物を入りようとしたまま茫然と立っているお客様を車と車間の誘導するのがやっとでした。道路を挟んだ向う側にある大きな石灯籠は倒れ、当館の足湯の大屋根は左右へ大きく揺れていました。私はたまた無事を祈るだけでした。

永遠に続くかと思っ揺れが収まった途端、お客様は「自宅が心配だから行ける所まで行きませ」とおっしゃり、車を次々と発車されて行きました。館内に戻り、まずエレベーターの中に入人が乗っていない確認し、各従業員には火の始末を指示し、お客様を安全に誘導するために館内放送で地震が発生したと階段利用のお願い。またロビーにお集まり頂くように呼び掛けました。幸いお客様は全員怪我一つ無く落ち着いておられました。

2. 自分たちの力で
旅館の仕事はサービスでお客様を待てます事ですが、根幹を成すものは御宿泊頂いたお客様一人一人の「命と財産」をお預かりするという重責です。従ってお客様がお帰りになる迄、一時も気を抜けません。さて今回の「震度6強」という天災においては台風等と違い何の前触れも無く突然に襲ってくる為、全員がバニック状態でした。

道路の被害状況や交通機関の状態等、和倉温泉内の事ですから分からない状態の中、電話回線は不通。テレビでは上空からの映像や地震のコメントばかりで欲しいと思う情報は全く手に入りませんでした。

「自分達の方で出来ることはやろう!」と従業員が一丸となり、自転車や近くのバスターミナルへ行って道路情報とバス運行状況を聞いたり、また車でタクシー会社やJRの駅に旅行情報を収集したりと奔走致しました。被災当日の15時頃にはお客様は全員無事に帰りになり、ホッと安堵しました。和倉地区内のライフラインは全て無事でしたが、道路の陥没とそれに伴う温泉引湯管の破損、墓地においては多数の墓石が崩れ落ちていました。一見して倒壊した旅館は見受けられなかったのですが、内部は壁には無数の亀裂、ガラス窓は割れ、水道管の破裂で水浸し等々、自分の所だけではなく和倉全ての旅館は惨憺たる状況でした。

「明日からどうやって生きていけばいい」と先の見えな不安で、悲しいのを乗り越し、茫然自失の状態でした。

和倉——能登の地は、町内や組織を通して近所で多くの絆が強い所です。お互いに隣近所の家族構成は分かっており、どこのお宅に高齢の方がいて、その方の身体の具合まで知っています。又旅館には組合組織があり、そこから入る情報を地域の各組織に知らせたりして、共に助け合い支え合いという形が自然と発生していました。

3. 公助
私達にとって建物の被害以上に辛かったのは、風評被害による統出キャンセルでした。

和倉温泉では一丸となり「GW迄には営業再開」を目指し、皆死に物狂いで建物の修復や集客営業にと頑張り、県でも能登の大動脈である能登有料道路の復旧にいち早く乗り出して行きました。その為道路は4月27日に全線開通の運びとなり、又県知事らが先頭に立ち、「元氣宣言、能登」のキャンペーンを日本各地で展開して頂きました。

また地震が起こった際には全国の皆様から頂いた多くの御支援、そして励ましの御言葉を心の支えとし、「前進あるのみ」と固く心に誓い、今日現在、そしてこれからも頑張っていきたいと思っています。

①自力・自分達の出来ることは自分たちです。
②共助…その上でお互い出来ることをして、共に助け合う。

③公助…次に一類も早い国・県の支援。
この三点が素早く一体となると、被害も最小限に食い止められる事が分りました。そしてそれ以上に有事の時こそ人々との絆が必要だと心から思っています。

震災と輪島塗業界

輪島漆器商工業協同組合理事長 岡垣昌典

「地震は忘れた頃にやってくる」、この言葉の意味を本当にかみ締めたのは、私だけではないでしょう。この日私達が体験したことは、何時でもこの国に起こりうるものだと、再認識させられた事実でありました。

3月25日午前、私は自宅で、日曜日ということもありゆっくりと時間を過ごしておりました。もし何もなければ、きっとこの日の情景も記憶には残っていないかたでしょう。遅い朝食の後、洗面台の前で歯を磨いていた時、突然ふわふわした感覚に襲われました。それが地震とわかったのは、次の瞬間、急に横揺れが起きたときでした。いま振り返ってみれば、地震が起きる直前に鼻音が響いたとも考えられますが、何も警戒心を抱いていない私は気がつきませんでした。家中を駆け巡る激しい揺れに、妻は何も言葉が出ず、辺りを見回し震えておりました。とにかく二人でテーブルの下に隠れました。まず座の方から聞こえる大きな倒壊音、続いて二階の方から、そして私たちのすぐ隣の食器棚からも激しい音が響きました。これらの倒壊音が耳に入ってくる度に、私は不安に襲われ、これが現実であってほしくないと祈るばかりでした。

非常に長い時間、揺れが続いたと思います。揺れが収まり、恐る恐るテーブルの下から這い上がり、少しずつ周りの様子を確かめていきました。近所に住む父母や知り合いなど、とにかく人の顔ばかりが思い出され、テレビで震源地を知ったとき、この不安は最も大きくなりました。当然のように通じていた電話も使えず、私は慌てて外へ出て、父母の元へと急ぎました。幸いともに父母は無事で、十数年前の酒田沖地震の際に食器棚の上に取り付けた鎖が、辛うじて倒落から守ってありました。この鎖がなかったらと考えると、背筋に寒気が走りました。備えあればを、正に証明された現実でした。

固定していない電化製品等はほとんどぐちゃぐちゃ、休む場所の確保の跡片付けに疲まらずむずむずと夢中で、落ち着いた頃は、もう夜になっており人間も頑張れるものだと感じました。翌日からきついつ筋肉痛に悩まされました。

能登半島地震の発生は、私共輪島漆器業界に於きましても、店舗、生産設備作業場、密閉蔵等の建物の全半壊130件をはじめ、そのほとんどが、商品、設備、材料を含め一部損壊以上の甚大な被害を受けてしまいました。視認出来た被害状況に、今後の密閉蔵を含めた業界の事業継続再開が一体何時になるのか、見当すらつかない状況にまで追い込まれた絶望感がありました。

しかしながら、国、県の助言、御指導の基、早期の4月20日に激甚災害の指定を受け、中小企業関連の特例措置が適用されました。これにより、今後の復興に向けての各種支援制度を設けられ、今後の早期業界復興の足がかりを見出すことが可能になり、輪島漆器震災復興計画も策定することが出来ました。また多くの輪島漆器のご愛用者の皆様から、お見舞いや、応援状文、ご支援がありまして、業界全体が一体となり対応させていただきました。このことは、大いに職人の方の励みとなり勇気づけられ、先人から受け継がれている歴史の重さにも、改めて感謝奉る次第です。

現在は、この輪島漆器震災復興計画に基づきまして、業界として、事業用建物、付帯設備の復旧、復興にあたっており、今後は、この危機をバネに新規の商品開発及び、後継者育成等の事業にも拡大し、取り組む所存であります。機会良く現在、輪島塗の世界無形遺産登録運動に対する機運も高まっており、この復興計画が、これからの輪島漆器産地の確固たる礎としての地位を確立させていくものと考えており、皆様方のさらなるご指導ご鞭撻を重ねてお願い申し上げます。

全てが初めての経験

総持寺通り商店街復興委員会 五十嵐 義 憲

珠洲沖、秋田沖地震による揺れは知っていましたが、最大震度6強。乾いた「ドン」という音の後、上下左右前後の強いゆれは初めてです。時間的は短かったが、地震だと気がつくまで何だこれはと座り込んでしまい、周りの家、電柱が激しく揺れているのを目に、初めて地震だと認識しました。それから、「興禪寺がぶぶた」との叫び声で、アツ中に人がいるはずと強い恐怖を感じました。3月25日は「能登・雪割草まつり2007」2日目で、町内の女性連8人が準備のため作業をしていました。私の御加護でしようか、幸いにしてかすり傷程度で、皆さん自分で駆立していました。しかし商店街は、瓦が、ガラスが、板きれが散乱し、一変しました。雪割草まつりは中止となり、スタッフに家に帰るように、かなり強い口調で告げた記憶が残っています。テントも机も雪割草のポットも散乱したままでした。

自宅は家具が倒れ込み、土足で上がる状態で何をしたら良いのか分からぬまま、「門前児童会館」に避難し、町内の人たちと眠れぬ一夜を過ごした。

私の店は、棚が倒れ、商品はほとんど棚から落ちましたが、幸いにも鉄筋コンクリートで店舗には被害がありませんでした。余震が続く中、散乱した商品は、取りあえず段ボールに入れたままで一日も休まず店を開け続けました。

4月、能登半島地震が激甚災害に指定、更に支援基金の創設、総持寺通り協同組合も、市、商工会の三者で復興委員会を5月16日に設立し、復興への準備に入りまして、商店街の会長が、復興委員会の長を務めることになりました。私自身の店舗には被害がありませんでしたので、被害の少ない他がやる、と覚悟を決めた次第です。

A4判1枚の紙に復興計画のメニューが書かれた物が提示されましたが、なかなか理解できません。県、市の担当者とも何度もメール、電話のやり取りで相談しました。「履歴証明」という言葉を初めて聞きましたが、これが被害を証明する書類でした。

支援内容も、個店への「事業用施設設備復旧費助成」では修理、再建の支援金が支払われました。日本で初めての災害における助成がそう

で、被災した商店には大変動向になりました。また門前町には「総持寺周辺地区まちづくり協議会」が平成13年度から寺町風情をテーマに建物修繕が実施されており、建物の再建修復を後押し、早めたと思います。

20年5月現在、商店街会員数39店、全半壊28店舗、一部損壊9店舗でしたが、建設中を含め未改修が残り4店舗となるまで再建できております。更に5月21日、全壊した「興禪寺」では来週のリニューアルを目指して地鎮祭が行われました。

震災では、大勢のボランティアの方々による支援を頂きました。空き地に、2階の屋根根がりの高さまで積み上げられた被災ゴミが、一日できれいに無くなりました。感謝しています。震災当日、3時頃から救急車、消防車が続き入り、夕方には医療関係者も入られたようです。翌日は、空には数多くのヘリコプターが上空を旋回、報道関係者、更に警察関係、自衛隊と救助に来ていただきました。総持寺通りは救助、報道関係者の車両が多くなり、総持寺からの一方通行の規制が行われ、田舎町に時ならぬ交通ラッシュになるほどでした。

幸いにして門前町では亡くなった方がいません、しかし家屋の下敷きになった方は数多くあったようです。ただ死者が無かったことが後に復興を早め、明るさがあつたように思います。上下水道は使用不能に、でも電気は停電せず、灯りと電子レンジが使え、温かい食べ物、飲み物が取れたのは助かりました。震災直後は炊き出しの飯が重宝しました。

沢山の被災者の皆さんから聞いた話を整理しながら、経験を伝えていくことが、私たちの大切な使命だと考えます。ライフラインはほぼ修復されましたが、一部損壊の私の家でも、壁の角はかけたままです。

町の中はまだまだホコリっぽく、再興の土音

が何処彼処から聞こえています。町内個々の家庭ではまだ修復は進んでいません。これからです。是非、門前へお越しください、声をかけていただければ経験した事をお話いたします。日本は地震国、何処でも地震が起こりうるのですから。

感謝 合掌

真の復興に向けて

合名会社中島酒造店代表 中島 浩司

平成19年3月25日(日)当日は3月に珍しく晴れ上がった暖かい日だった。当時私は会合で市内のホテル4階に居りました。突然ゴッと言った地鳴りと伴にドンと下から突き上げる強烈なショックを感じ、一瞬何が起こったか判断出来ませんでした。その後の強烈な揺れは鉄筋4階建てのホテルが倒壊するのではと思った程でした。会社に電話したところ電話から聞こえたのは妻の絶叫のみ。急いで帰宅したが、途中神社の大鳥居や寺の鐘楼が倒壊しているのを見て相当酷いことになっていると感じていましたが、不思議と酒蔵建物には思いが及びませんでした。酒のタンクはどうなっているだろうか?かなりこぼれたであろう、などと考えながら帰りがけに人が人も無く、店は大丈夫そうだったので安堵しながら奥へ足を進めると然

とした。酒蔵では無い、蔵自体が壊れて中へは入るに出来ませんでした。土埃が舞っている。危険を顧みず何とか掻き分け入って見るとタンクが台から落ち、傾き、こぼれ流れ出した酒で床中びしょじりの状況でした。頭が白くなり、ただ薄笑いをしている自分に気づきました。そう、とんでもない事に遭遇した時、人は笑うことしか出来ないのです。直に残った酒の救済を被さ、酒蔵組合に相談したところ、自社の蔵は被害が少なかった蔵から2社が早く申し出て頂き、内1社が早速タンクローリーで駆けつけてくれました。そのまま、とにかくビストン輸送して被災した酒を移動し、何とか酒の酒を助ける事が出来た。現在も瓶詰め作業をその蔵で行われて頂いておりますので製品化作業は支障なく進んでおります。普段はライバルとて競合してはいたが、いったん事あればありがたく頼もしい仲間です。

さて、その後がもっと大変です。酒屋の仕事歴史と伝統を重んずる業界、ご先祖様から引き継いだ蔵が在ったから出来る仕事でした。新たに起こせる産業ではありません。又、地場産業の象徴としても街に無くてはならないものとも自負しております。

種々多方面からの応援を賜りまして、皆様には心より感謝致しております。市、内外からの応援と励ましと、行政の「出来るだけ支援します」の言葉にも背中を押され、私どもは熱慮する間も無くまずは復旧に向けてただただひた走ってきました。

おかげさまで酒造業が、残さなければならぬ地場産業として復興支援業種に指定され、私は輪島市酒造業復興委員会の委員長として、酒屋全体の復旧・復興の為、全力で務めさせて頂いております。現在、各酒造会社は復興事業対象としての責任感と、楽しい街づくりに必要な市民に密着した観光産業としての自負もあり、全員熱心で頑張るよう一心不乱に復旧に取り組んでおります。

「頑張れ!頑張れ!!」。とてもありがたい言葉です。とっても嬉しです。反面、或る意味つらい点もあります。心からの被災者に対しての責任感が湧き、頑張れないとも言えず、無理を承知で頑張ってしまう自分達が居る。実は廃業が最も有力な選択でした。

突き進んだ今、ふと我に返ると今後どうなるのか?負債償還期限の10年後には当社は始めの各酒蔵は生き残っているだろうか?何より返済してゆけるのだろうか?正直、不安があることも事実です。

誤解しないで下さい。皆様のお心には重々感謝致しております。今回の地震被害には迅速に対応していただき、前例の無い地場産業支援策もどんどん立ち上げて頂きました。

しかしながら、復旧・復興に向けての負担は想像以上に大きなものであったことも事実であります。そんな大きなマイナス要素と不安を抱えながらもがきながらも表面上は、やっと復旧の目途は立ちました。

ただ、本当の復興はこれからです。様々な被災された方々がおいでます。お互い手を取り合いながら、前進できよう市民の皆様・行政には今後より一層のご支援を賜ります様お願い致します。

資料編

- 1 能登半島地震発生後の主なできごと 234
- 2 能登半島地震対応記録 236
- 3 県による新聞広報 246
- 4 避難所における避難者の推移 252
- 5 能登半島地震に係る主な県予算の概要 254
- 6 能登半島地震による 県管理道路通行規制実施状況 259
- 7 避難所における健康管理活動実施状況 260
- 8 平成20年度「被災者の健康状況調査」結果 261
- 9 応急仮設住宅入居者の推移 270
- 10 全国からの受援状況 272
- 11 ボランティアの活動状況 287
- 12 平成19年能登半島地震の検証結果を踏まえ 今後推進すべき施策大綱 291
- 13 能登半島地震復興プラン(抜粋) 306
- 14 平成19年(2007年)能登半島地震における 国等の対応状況(平成20年版防災白書(抜粋)) 323
- 15 能登半島地震関連の新聞記事 325

1 能登半島地震発生後の主なできごと

Table with 3 columns: Date, Event, and Details. Covers the period from March 19, 2019, to April 29, 2019. Key events include the earthquake itself, emergency response, road closures, and reconstruction efforts.

Table with 3 columns: Date, Event, and Details. Covers the period from May 1, 2019, to December 18, 2019. Key events include the start of reconstruction, road reopening, and disaster relief activities.

Table with 3 columns: Date, Event, and Details. Covers the period from February 12, 2020, to October 4, 2020. Key events include the completion of reconstruction, disaster relief, and infrastructure improvements.

Table with 3 columns: Date, Event, and Details. Covers the period from February 25, 2021, to March 25, 2021. Key events include the completion of reconstruction and disaster relief.

2 能登半島地震対応記録

平成19年(2007年)3月25日(日)

Table with 4 columns: Time, Event, Iwate Prefecture Response, and National Response. Provides a detailed timeline of disaster response actions from 9:42 AM to 10:45 AM.

Table with 4 columns: Time, Event, Iwate Prefecture Response, and National Response. Provides a detailed timeline of disaster response actions from 11:00 AM to 19:00 PM.

Table with 4 columns: 時間, できごと等, 石川県の対応, 国の対応. Rows include 19:30, 20:20, 21:15, 22:10, and その他.

3月26日(月)

Table with 4 columns: 時間, できごと等, 石川県の対応, 国の対応. Rows include 0:40, 2:40, 6:00頃, 7:07, 7:16頃, 8:00, 9:00, 10:30, 10:42, 11:03, 13:08, 14:10, and 14:46頃.

3月29日(木)

Table with 4 columns: 時間, できごと等, 石川県の対応, 国の対応. Rows include 6:00頃, 10:00, 13:00, 15:00, and その他.

3月30日(金)

Table with 4 columns: 時間, できごと等, 石川県の対応, 国の対応. Rows include 6:01, 9:15, 13:40頃, 17:00, and その他.

3月31日(土)

Table with 4 columns: 時間, できごと等, 石川県の対応, 国の対応. Rows include 6:30, 10:00, and 17:12.

平成19年(2007年)4月1日～平成20年(2008年)3月31日

Table with 4 columns: 月日, できごと等, 石川県の対応, 国の対応. Rows include 4月1日(日) and 4月2日(月).

Table with 4 columns: 時間, できごと等, 石川県の対応, 国の対応. Rows include 16:00, 16:50, 17:50, 18:00, 18:30, and その他.

3月27日(火)

Table with 4 columns: 時間, できごと等, 石川県の対応, 国の対応. Rows include 0:00, 9:15, 11:40, 18:00, and その他.

3月28日(水)

Table with 4 columns: 時間, できごと等, 石川県の対応, 国の対応. Rows include 8:00頃, 9:15, 18:00, 18:15, and その他.

Table with 4 columns: 月日, できごと等, 石川県の対応, 国の対応. Rows include 平成19年4月3日(火), 4月4日(水), 4月5日(木), 4月6日(金), 4月7日(土), 4月8日(日), 4月10日(火), 4月11日(水), 4月12日(木), 4月13日(金), 4月17日(火), 4月20日(金), 4月23日(月), and 4月24日(火).

月日	できごと等	石川県の対応	国の対応
平成19年4月25日(水)	・能登半島地震津波被害復興支援本部を設置 ・能登半島地震穴水町災害復旧・復興対策本部を設置 ・能登町災害復興本部を設置	・石川県能登半島地震復旧・復興本部を設置(第1回会議を開催) ・第1回石川県能登半島地震復興・復興本部内連合会議を開催 ・災害義援金の配分を開始	
4月27日(金)	・能登有料道路(横田IC～穴水IC間)の通行止め解除	・「元氣堂、能登」をキャッチフレーズとした風評被害拭きキャンペーンを開始	
4月28日(土)		・輪島市宅田町、同市門前町の応急仮設住宅の入居開始	
4月29日(日)		・輪島市門前町の門前保健センター内に、心のケアを含めた健康相談窓口を設置 ・のとしま旅館で「能登半島地震復興支援イベント」を開催	
4月30日(月)		・輪島市門前町道下、穴水町大町の応急仮設住宅の入居開始	
5月1日(火)		・志賀町富永領家町、同町輪野屋の応急仮設住宅の入居開始 ・応急仮設住宅に生活援助員を配置開始(5月17日14人配置完了)	・福本参議院災害対策特別委員長が被災地(輪島市内ほか)を視察(2日まで)
5月2日(水)		・県議会臨時会を開催(震災復興・危機管理特別委員会を設置)	
5月3日(木)		・輪島市山岸町の応急仮設住宅の入居開始	
5月7日(月)	・輪島市震災復興本部を設置	・中小企業者への「再建相談センター」を設置(輪島地区、門前地区、穴水地区、七尾地区、富永地区の5カ所)	
5月8日(火)		・七尾市小島町、同市田鶴浜町、同市中島町浜田の応急仮設住宅の入居開始	
5月21日(月)	・志賀町災害復興本部を設置	・県議会震災復興・危機管理特別委員会が被災地(輪島市内ほか)を視察 ・心のケア活動の拠点を門前保健センターから門前町道下地区の心のケアハウスに移動	
5月25日(金)	・七尾市能登半島地震災害復興本部を設置	・第2回石川県能登半島地震復興・復興本部内連合会議を開催	・被災者生活再建支援特別制度検討会が被災地(輪島市内ほか)を視察(27日まで)
5月26日(土)			
5月28日(月)		・石川県防災会議を開催(震災対策専門委員会の設置を決定)	
6月4日(月)		・県議会震災復興・危機管理特別委員会を開催	
6月11日(月)	・能登半島地震の余震発生、マグニチュード5.0、震源の深さごく浅い(輪島市、志賀町、穴水町で震度4)		
6月14日(木)		・被災者健康状況調査を実施(8月10日まで)	
6月28日(木)		・「はっと石川」観光キャンペーン実行委員会を設置	
7月3日(火)		・能登半島地震被災中小企業復興支援基金(300億円)を創設	

月日	できごと等	石川県の対応	国の対応
平成19年7月7日(土)	・夜間通行止め一般国道249号「八世乃洞門」を除き、県管理道路の通行止め箇所がすべて解消		
7月12日(水)		・知事が全国知事会議において被災者生活再建支援法の見直し必要性について説明	
7月23日(月)		・震災対策専門委員会(第1回)による検証を実施	・冬寒国土交通大臣が被災地視察のため来県
8月7日(火)		・(財)能登半島地震復興基金を設立	
8月20日(月)		・第2回石川県能登半島地震復興・復興本部会議を開催	
8月30日(木)		・県議会震災復興・危機管理特別委員会を開催 ・能登半島地震復興基金(500億円)を創設	
8月31日(金)			
9月10日(月)		・震災復興支援策を設置	
9月24日(月)	・災害救助法に基づく全壊世帯、半壊世帯の応急修理が完了		
9月25日(火)		・県議会震災復興・危機管理特別委員会を開催	
10月3日(火)		・第3回石川県能登半島地震復興・復興本部会議を開催、能登半島地震復興プランを策定	
10月18日(木)			・内閣府が災害時要援護者における避難支援対策に関するシンポジウムを開催(輪島市)
10月22日(月)		・知事が豪防担当大臣等に対し、改正被災者生活再建支援法の普及適用を要請	
11月1日(水)		・震災対策専門委員会(第2回)による検証を実施	
11月9日(金)	・改正被災者生活再建支援法が成立		
11月25日(日)	・豪落真山斜面の安全が確保されたことなどから、輪島市門前町深見地区の住民の帰宅が可能となる		
11月30日(金)	・能登有料道路のすべての迂回路を解消し、全線が本線供用を再開		
12月1日(土)		・能登ふるさとモデル住宅を着工(輪島市河井町、同市門前町道下)	
12月14日(金)	・改正被災者生活再建支援法が施行		
12月17日(月)	10:00	・穴水町のとふあい文化センターで改正被災者生活再建支援法の説明会を開催	
12月18日(火)		・一般国道249号「八世乃洞門」新トンネル建設に着手	
平成20年1月21日(月)			・金沢地方気象台が大津注意報・警報の暫定基準廃止を発表
1月26日(土)	・4.23頃 能登半島地震の余震発生、マグニチュード4.8、震源の深さ約11km(輪島市で震度5)		

月日	できごと等	石川県の対応	国の対応
平成20年1月28日(月)		・第4回石川県能登半島地震復興・復興本部会議を開催	
1月29日(火)		・震災対策専門委員会(第3回)による検証を実施	
2月12日(火)		・震災対策専門委員会が「平成19年能登半島地震の検証結果を踏まえ今後推進すべき施策大綱」を取りまとめ、知事に報告書提出	
3月17日(月)		・県議会震災復興・危機管理特別委員会を開催	
3月23日(日)	・穴水町が「能登半島地震一周年復興記念式典」を開催		
3月25日(火)	・輪島市が「3.25能登半島地震復興記念式典」を開催	・能登半島地震復興シンポジウムを開催(輪島市) ・能登ふるさとモデル住宅が完成(輪島市河井町、同市門前町道下)	・北陸農政局が「がんばれ能登! 中越1～地震に負けるなおいし北陸～」を開催(東京都新宿)

平成20年(2008年)4月1日～平成21年(2009年)3月25日

月日	できごと等	石川県の対応	国の対応
4月25日(金)		・能登半島地震に係る知事感謝状贈呈式を実施 ・能登半島地震復興絵画・作文コンクール表彰式を実施	
5月16日(金)		・石川県防災会議を開催(石川県地域防災計画を大幅に見直し)	
6月6日(金)	・七尾市、輪島市、穴水町が災害対策本部を解散	・第5回石川県能登半島地震復興・復興本部会議を開催 ・災害対策本部を解散	
6月8日(日)		・穴水中心市街地創造的復興プロジェクト事業起工式を実施 ・能登ふるさとモデル住宅の着工(穴水町大町)	
7月1日(火)	・加賀西瀬博開催(10月5日まで)		
7月19日(土)	・能登ふるさと博開催(10月26日まで)		
7月27日(日)		・自主防災組織の組織化啓発研修会を開催(穴水町)	
8月1日(金)		・被災建物被害認定研修会を開催	
8月3日(日)		・自主防災組織の組織化啓発研修会を開催(羽咋市)	
8月7日(木)			・参議院災害対策特別委員会が被災地における復興状況の実情調査のため来県
8月27日(水)		・輪島市門前町深見地区で、能登半島地震関連の復旧工事が完成	
9月7日(日)		・石川県防災総合訓練を実施(羽咋市)	
9月21日(日)		・自主防災組織の組織化啓発研修会を開催(白山市)	
10月4日(土)		・能登ふるさとモデル住宅が完成(穴水町大町)	
10月15日(水)		・県民防災フォーラムを開催(地場産業復興センター)	

月日	できごと等	石川県の対応	国の対応
平成20年11月1日(土)		・自主防災組織のリーダー育成講座を開催(3日まで、消防学校)	
平成21年1月30日(金)		・第6回石川県能登半島地震復興・復興本部会議を開催	
2月25日(水)	・輪島市の災害公営住宅完成(松屋台団地10戸)		
3月25日(水)		・能登半島地震災害記録誌を発行	